

月刊

翻訳の世界

1 1
創刊号

1976

〈特集〉

英語の背景を探る

新倉俊一、成田成寿、出口保夫、八木敏雄

■連載■

翻訳原論の試み—小野二郎

翻訳と社会の歴史—吉武好孝

誤訳空間—龍口直太郎

戦後翻訳出版の流れの中で—佐藤亮一

☆翻訳家養成講座

★英文翻訳懸賞募集(毎号)



大学翻訳センター

TO ENRICH YOUR LIFE

言葉は心と心 を結ぶかけ橋

ユニークなコラムがいっぱい

「天声人語」の全文英訳や
英語らしい英語を習得する道場、
金口儀明上智大学教授の
「英語表現あれこれ」から
カラーマンガ、シネマガイド、
ミュージック・ライブラリーまで
ユニークで楽しいコラムがいっぱい。



タブロイド判・カラー印刷・12ヶ月16ページ

朝日の英和週刊新聞

Asahi Weekly

●毎週日曜日発行 ●購読料 1カ月 360円

最寄りの朝日新聞販売店、または直接本社販売部へお申し込み下さい

編集発行 **朝日イブニングニュース社**

本社：〒104 東京都中央区築地7-8-5 ☎ (03)543-3321

創刊号記念特別企画

ケンブリッジ語学研修とヨーロッパロマンの旅

～ 昭和52年 2月19日(土)～ 3月19日(土)(29日間) ～

❖**特色** イギリスの大学町ケンブリッジの名門校でみっちりQueen's Englishを学びながらシェイクスピアの生誕地ストラッドフォードアポンエイボンやカンタベリーの町をも訪問、イギリスを総合的に研修します。そのあとはドーバー海峡をわたりパリ、ジュネーブ、ローマなどの主要都市を大型のデラックスバスで途中の経由地も含めくまなく視察します。語学研修とイギリス人家庭滞在、英文学地訪問それに大陸内のバス旅行も含めて、これまで他の企画にみられなかった充実した企画になっています。

❖**費用** ¥**388,000** (ローン可能)

含まれるもの

往復航空機運賃／語学研修費用と午後の野外活動費／イギリス人家庭滞在費／全行程移動のバス料金／ホテル料金／食事料金(民泊中は月～金2食付、土、日は3食付)その他ホテル泊時の朝食／パリ・ローマにおける観光料金その他

❖**滞在都市** ケンブリッジ～ストラッドフォードアポンエイボン(オックスフォード)～ロンドン～カンタベリー～パリ～ジュネーブ～ミラノ～フローレンス～ローマ



❖**募集人員** **40**名(定員になり次第締切ります)

❖**申込締切日** 昭和51年12月25日

(ローン可)

※尚、語学研修だけを御希望の方には「イギリス語学研修と民泊の旅22日間」¥**318,000**もあります。

問い合わせ方法

愛読者カードのアンケートにご記入の上12月20日まで当センターへお送り下さい。詳しい資料を送付いたします。

企画・主催 **大学翻訳センター** 海外研修旅行係

〒113 東京都文京区湯島2-4-6 電話03-815-1650

取扱旅行業社 **近畿日本ツーリスト** (運輸大臣登録一般第20号)

神田海外旅行営業所 〒101 東京都千代田区内神田2-16-11(内神田渋谷ビル4 F)
電話 03-254-6071

「翻訳の世界」創刊記念

第一回翻訳奨励賞発表

主催／大学翻訳センター

後援／朝日イブニングニュース社



■最優秀翻訳賞■

一般部門＝田隅富美子

(写真上・出席は代理人)

学生部門＝中村由美子(右)

■優秀翻訳賞■

一般部門＝成瀬朋子(右下)

学生部門＝清水令子(左下)



翻訳とは言語の問題である。し

かも異種の言語との関係の問題である。私たちは長く漢語の影響を受け、今また英語の氾濫のさ中にある。そのような日本語の歴史と現状を見る時、翻訳という作業が日本語と日本文化に印してきた巨大な足跡を見逃すことはできない。ことに現在、地球はますます狭くなり、異言語(異文化)との接触の機会も増えている中で、翻訳の果たす役割の重要さは今さら指摘するまでもない。

それ故にこそ、翻訳の質がたえず問われなければならないのである。本誌の創刊を記念して設置された「翻訳奨励賞」は、そのような認識のもと、広く翻訳を奨励す

■受賞式では出席した審査委員
各氏の挨拶の後、課題文出題者
の武富紀雄氏から詳細な講評が
述べられ、厳しい評価を受賞者
一同熱心に聞き入っていた。高

橋健二氏の挨拶は格調高く、翻
訳を論じつつ受賞者を激励した。
(左の写真はパーティーで受賞
者と談笑する高橋氏。下は挨拶
する大竹審査委員長。)



るとともにその質を向上させよう
という趣旨で毎年一回開催される
もので、優秀な翻訳能力を持つ新
人の登場も期待されるところであ
る。

第一回翻訳奨励賞の発表及び受
賞式は、去る九月二十五日東京駿
河台の山の上ホテルで行われた。

応募総数は一〇一三点で、一次、
二次審査を通過した四〇点のうち
から厳正な最終審査を経て、一般
部門、学生部門それぞれの最優秀
翻訳賞(各一名)、優秀翻訳賞(各
一名)、翻訳努力賞(各五名)が
決定された。(審査委員、審査経
過、講評は本文71ページ参照)

受賞式には、受賞者の他来賓と
して高橋健二氏(日本芸術院会員、
独文学)を迎え、各審査委員出席
のもとで大竹審査委員長より各受
賞者に賞状及び副賞の賞金(最優
秀翻訳賞十万(学生五万)円、優
秀翻訳賞五万(同三万)円、翻訳
努力賞各一万円)が手渡された。

選にもれた応募者各位には来年
の奮起を期待したい。(Y・S)

EXCELLENT TRANSLATION FOR ANY TYPE OF MATERIAL

Quality Work by the staff with Quality

正確な外国語情報の把握が、貴社に大きな利益をもたらします。当センターでは外国人チェッカーを含む専門別翻訳者を多数そろえ、あらゆる分野にわたる翻訳のご依頼をうけたまわっており、翻訳のニュアンスの差異を解消した円滑なコミュニケーションを提供します。

●対象語●

英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・中国語・朝鮮語・ポルトガル語
ギリシア語・アラビア語・タイ語・オランダ語・その他

●範囲●

電気・機械・土木建築・化学・医学・薬学・法律・特許・宗教・純文学・学術論文・商業通信文
広告パンフレット・通訳・その他

★IBMコンポーザの導入によって、迅速・正確なタイプ仕上げのサービスを行っております。コピー・印刷・製本まで一貫した業務も行っております。ご利用下さい。

株式会社 **大学翻訳センター**
翻訳事業部

〒113 東京都文京区湯島 2-4-6

☎03-815-0644
0961

人類は今日、かつて経験したことのない多くの困難な問題に直面しており、その解決のために全世界的な規模での相互理解と協同が必要とされている。ここに翻訳家の果すべき重大な役割がある。

翻訳家は、人間が互いを依存し合い、ま

特別寄稿

翻訳者の保護に関する ユネスコの 勧告案に寄せて

ズラトコ・ゴリアン
(前国際翻訳家連盟副会長)

た国家とその国語が発達し始めた頃から、一つの言葉から他の言葉に移しかえる任務を負わされて来た。しかし、殆どの場合、翻訳家は無名であった。幾世紀にも亘って偉大な文学、哲学、科学上の業績が称えられ、またそれらが他の国の人々の精神的発

展に及ぼした影響が論議されて来たが、それに貢献した翻訳家の名は一切話題にすらならなかった。

翻訳家は思想や科学を伝え、また国々や諸国民を結びつけ、人間の言葉と文化を豊かにする重要な役割を果し、さまざまな面で国際交流の力となって来たが、いわば一種の「必要な邪魔者」とさえ考えられていたというのが実状であった。

近代に至ってはじめて、偉大な詩人および作家は、翻訳家の目覚しい職能とその業績を理解し、その価値が認められるようになった。偉大な文学の巧みな翻訳は、オリジナルの、つまらない文学よりはるかに生命の長いすぐれた価値をもっている。たとえば、シェイクスピアの作品の立派な翻訳は、その永続的で有意義な影響という点からすれば、自国の作者の平凡な戯曲の比ではなからう。エリオット、リルケ、ボードレールなどのすぐれた翻訳は、紋切型の平凡な自国の詩人の作品よりも、一層多くの感銘を人々に与えるであろう。そしてこうした立派な文学の翻訳が出来るためには、翻訳者は、ゲーテ、ボードレール、マラルメ、リルケ、ランボー等がそうであったよ

うに、同時に自らが詩人もしくは作家でなければならぬであろう。

作家は、自分の作品が外国で多くの人々に読まれ、影響を与えることができるようになるか否かは、ひとえに翻訳者の能力にかかっているのである。

しかしながら、依然として今日においてもなお、多くの国の出版社、批評家、その他重要な地位にいる人々が、たとえ翻訳の重要性を知っているとしても、翻訳家の努力に注目し、それに正当な評価を与えないままにしていることは残念である。この意味で、このたびユネスコがわれわれの意により翻訳家の地位を正当に認めるべく採択した「勧告案」は時宜を得たものであり、われわれは、それを真に有効なものにするべく努力しなければならない。



ズラトコ・ゴリアン氏



翻訳の世界

創刊号 ◇ 目次

- 表紙イラスト／オオシマ・ツネオ
- 表紙ロゴ／大町工房

特集／英語の背景を探る

マザーグースの向こうに……………10

新倉俊一

抒情と論理のことば（日英言語比較考）……………13

出口保夫

英語と日本語の文化コード……………18

八木敏雄

この似て非なるもの（日英文化論）……………20

成田成寿

△特別寄稿……………7

翻訳者の保護に関する

ユネスコ勧告案に寄せて

Z・ゴリアン

△創刊によせて……………50

高橋健二／佐藤亮一

ジョニー・リデルシリーズ△翻訳小説▽

血まみれのハレルヤ①……………37

フランク・ケーン／山下諭一訳

△連載▽

誤訳の深層(翻訳原論の試み) / 小野二郎……………25

変わるアメリカ(誤訳空間) / 龍口直太郎……………28

激流の中の洋学者たち(翻訳と社会の歴史) / 吉武好孝……………32

戦後翻訳出版の流れの中で / 佐藤亮一……………82

実践翻訳講座

- <児童文学>神宮輝夫……………59
- <文学>志村正雄……………61
- <特許>白石正義……………63
- <エレクトロニクス>江原信郎……………65
- <医学>安立恭彦……………67
- <公害>石川照男……………69

★第1回翻訳奨励賞発表★

- <口絵>授賞式……………4
- <本文>審査経過・講評・最優秀翻訳賞受賞作品・課題英文など……………71



英文翻訳懸賞募集

- 出題 / 出口保夫……………80
- 執筆者紹介……………53
- 編集後記……………90

△翻訳百話▽……………44

新庄哲夫 / 佐藤喬 / 加藤恭平

△本の紹介▽……………46

△インタビュー▽……………48

●在日外人ジャーナリストの眼

M・デビッドソン

前進する翻訳家の地歩……………88

武富紀雄

マザー・グースの向こうに

◇◇伝承童謡とパロディーの精神◇◇

新倉俊一

(明治学院大教授)

旅に出かける前の日に電話があつてマザー・グースについてなにか書けといわれ、とりあえず角川文庫版の白秋訳『まざあ・ぐうす』一冊を持って出た。これは昭和五年のアルス版全集本を底本としたものである。いま長野の先の宿について秋の虫の音に耳を傾けながらこの本をひろげていると、村祭りの練習らしいタイコタイコの音と民謡の歌声がきこえてくる。『まざあ・ぐうす』と民謡というのは偶然のとりあわせだが、白秋の訳の目標は「民謡調」で訳すことであつた。『ふしぎの国のアリス』でおなじみの「ハアトのクイン」を例にとると、

ハアトのクインが饅頭クアットをつくられた。

みんなできたよ、夏の日いっぱいかかった。

ハアトの兵士ソルジャーが饅頭をぬウすんだ。

こいつしめたとそっくりもつてにげてつた。

という具合に訳されている。マザー・グースが簡単に「民謡」と言えるかどうかは疑念があるけれども、すべてのナールナール・ライムと同様にマザー・グースにとつても音の世界が第一義的なものであることはたしかだ。白秋が「あとかぎ」で語っている翻訳についての工夫は、すべての詩の翻訳者に参考になると思うので、ここに要点をあげてみたい。

英詩を日本語に移すときに厄介なのは、ことばの上の引っかけである。「やぶ医者ヤブイシヤのフォスタアさんが、グロオス

タへいって」というような場合は、固有名詞でそのままやれるから問題はないが、「Rain, rain, go to Spain」というような音韻上の引っかけことは、訳しようとするのがそもそも無理であるから訳しなかった」と述べている。その理由は「雨、雨、スペインへ」では原語のおもしろみがなくなるからである。これと似たケースは「Bar, Bar, Black Sheep」で、「黒羊」と訳したのではBのアリタレーション（頭韻）が生きないし、かといって「くうくう黒羊」でも羊のなき声は出ない。「なけなけ、黒羊」では意味だけのものになる。「意味だけのものでは、ほんとうの訳にはならない」と白秋は説明している。この場合の解決は「べああ、べああ、ブラック・シイプ」と原語の音を生かしている。「Peter, Peter, pumpkin eater」の場合も同じように「ペエタアさん、ペエタアさん、南瓜南瓜ズキずき」と訳している。

つぎに、「とつびよくりんのチャアレエが」(Oherley was) という場合は、別の立場から「とつびよくりんのとん吉が」というふうにとで掛けて自由に翻案している。その理由は「チャアレエ」という人名は原語にはただ音韻上のしやれに使用したまでで、それ以上のものではないから本質的の引っかけの妙味を主として訳した、と言っている。

以上はみな白秋がいかにアリタレーションを重視したかの例証である。

三番目に、ややちがった角度から翻訳の原理をひれきしているのは「ノルウィッチへいく道をきいて、南へいって」という詩行のある唄の場合である。白秋は「ノルウィッチはロンドンの北に当たるので、本質の精神は北へが南と対照している」のであるから、「北へゆく道で南へいって」と訳したほうが、「ノルウィッチを知らない日本の子供にはつきりわかるし、このほうがずっと簡潔でいいから」こんな場合の地名は除けた、と付言している。なかなかふかい洞察といふべきだろう。

今までは翻訳の問題としてマザー・グースを眺めてきたが、つぎに伝承童謡としての受け取り方を少し考えてみたい。初めに言っておかなければならないことは、俗にマザー・グースといわれているものは、一部の古くから伝えられてきた子守唄や遊戯唄ばかりでなく、その後の新作も含む、かなり広範なナーサリー・ライムの総称だということである。たとえばハリウエルの編んだ『イングランドの童謡』(一八四二年)には出てまもない『十五人のおばあさんの冒険』(一八二〇年)というリメリック(五行俗謡)の絵本からとられたものも含まれている。この統編のような『十五人のおじいさんの冒険』(一八二一年)のなかの一編が、白秋の『まぎあ・ぐうず』には入っており、白秋は日本でリメリックの最初の訳者といえよう。ハリウエルは四年後に出たエドワード・リアの『ノンセンスの本』のり

メリックをもちろん入れていないが、もしリアが名声を獲得しないで死んでいたら、このリメリックもマザー・グースの共通財産の中に加わったにちがいない。こう考えてみると「無署名性」ということだけがいで、リアとマザー・グースとは紙一重であることがわかるだろう。同じようにルイス・キャロルの『アリス』の物語がマザー・グースに負っていることは周知のとおりで、英文学は聖書とシエクスピアとマザー・グースの遺産でできていると言っても決して誇張ではない。

さて、このようにマザー・グースは今日でも生きつづけている伝承童謡として、英文学のなかでは、絶えず「本歌とり」の対象となっている。したがって英語を読む者はどうしてもその代表的な歌は知ってはいなくてはならない。たとえばエリオットの「空ろな人間」という現代人の絶望を扱った詩の第五連には、「さぼてんのまわりをまわろうよ、いっしょにあさのまだ五じに、……こうして世界はおしまいだ、どんともいわず すすりなきで」という奇妙な詩行がある。これが実はマザー・グースの「くわのまわりをまわろうよ、いっしょに さむいしものあさ、……こうしてほくらはてをあらう いっしょに さむいしものあさ」という遊戯唄の替え歌であることを知るとき、エリオットのいわば「付け句」のおそろしさを初めて正確に感じとることができぬ。

これはあなたがち外国の詩を読むときばかりでなく、日本の作品を読むことについても言える。たとえば長谷川四郎の「川は流れる」という短編を読むと、ロンドン塔を見物した話が出てくる。あそこにはいつもカラスが五羽いることにきまつているのに、四羽しかいなかったと、一人が言つて、「だれがカラスを殺したか」ときくと、相手は「そんなことはとくにわかつているよ……歌の文句にあるじゃないか」と鼻歌まじりにつぎのように口ずさむ。

弓をしぼって

ハトを射って

カラス殺した

こまどりやこまどり……

これがマザー・グースの中の有名な "Who killed Cock Robin? / I, said the Sparrow, / With my bow and arrow, / I killed Cock Robin" の替え歌であることがわからなければ、この会話のしやれはよくわからない。イギリスの推理小説家アガサ・クリステイの作品にも、"A Pocket Full of Rye", "Ten Little Niggers", "Hickory, Dickory, Dock" などの題名があり、マザー・グースを知らなくてはこれらの通俗文学すら読むことができない。私たちはマザー・グースを通して、その活字のむこうの暗闇に、今もなおいきづいてる伝承童謡と、イギリス人のパロディの精神とを、つねに心にとめておかねばならないだろう。

抒情と論理のことば

□日英言語比較考□

出口 保夫
(早稲田大学教授)

1

日本語はふつう情緒性に特質があり、英語はそれに比較して、論理的言語であるといわれる。自然の豊かな風土に育てられた日本人の言語文化は、自然や人事について、情緒的内実をもっている。この点では、イギリスもまた美しい自然と風土にめぐまれており、われわれ日本人にも劣らない審美性と情緒性を育ててきた。このような特質は、ことに文学作品をおしてあらわされるが、イギリス文学を貫くひとつの顕著な特徴として、情緒性ないしは抒情性があるのであって、世界文学的視野からみても、すぐれた抒情詩の伝統を築きあげてきたのである。このような文学作品ともなると、英語もかならずしも論理性だけで規定することはできない。また十九世紀のチャールズ・ディケンズとか、今日のアラン・シリトーといった作家たちにしても、論理的とはお世辞にもいえないし、詩作品ともなれば、なおさらのことである。しかし一般的な比較論としては、英語は日本語よりも論理的構造をもつ言語であることはたしかである。

日本語では主語と動詞の関係は、決して明確ではない。「何がどうした」とか、「誰がどう思う」というような作爲や、思考態度は、あいまいにぼかされる。ながいあいだ封建的な社会や、島国の閉鎖性や、後進性にならされてき

た人間は、はっきりとどうしたとか、どう思うという表現を避けることによつて、他人との対立を避けてきたように思われる。これは哲学的には、日本人の生活の知恵ともいふべきもので、あながちすべて否定することもできないかもしれない。しかし同じように島国でありながら、自由と個人的尊厳をながい歴史のなかで育ててきたイギリス人（この場合は主としてイングリランド人であるが）は、その言語表現において、論理的構築を有している。すなわち、事物の特性を正確に規定し、主体と客体との関係を明確にする。たとえば日本語では、『もの』をあらわす場合に、それが単数であるか複数であるか、あるいはまた特定のものか不定のものか、決して明らかではない。しかし英語表現においては、それらの『もの』の实体と特性とは、きわめて厳格に規定される。つまりそれらは名詞の「数」とか「性」や、あるいは定冠詞とか不定冠詞などによつて規定されているのである。また文法範疇についていえば、人称代名詞は、主格、目的格、所有格など、それぞれあるべきところで省略されることはほとんどない。たとえば *Sir Francis, in his turn, sequestered his thoughts.* という文において、この所有格 *his* をそのまま日本語におきかえると、ほとんど日本語として適切な表現とはいえないなくなつてしまふ。

英語の論理的構造を、ささえているもののひとつは関係詞であろう。これは日本語にはない品詞である。この関係

代名詞は、日本語では「……であるところの」というまわりくどい表現で訳されることがあるが、このような日本語がすべての日本人に、自然に受け入れられているわけではない。しかしこうした関係詞の訳とか、翻訳調の生硬な表現を、むしろありがたがるような種類の人間のいることも事実で、日本語の文法的变化を物語るものであろう。「彼女が母親になつている自分の幼い子供の自覚をながながとしている」という日本語の傍線の部分は、関係詞 *whom* を含蓄していることはたしかであるが、このような表現はふつう一般的ではなく、このような筆者は、たぶん英語的発想で書いているのだと思う。近頃では日本語にも、英語的構文の影響が、かなり見られるようになってきた。

しかし最初に指摘したように、英語にくらべて日本語の特徴は、きわめて情緒的、感覺的である。感情や情緒そのものは、論理とは無関係であるから、そうした表現は曖昧性をしようじやすい。そしてその曖昧性に、論理をこえた美が存在することもたしかなのである。日本語のもつ美質はこれであらう。この情緒的曖昧性のよい例が、俳句のよいうな短詩である。芭蕉の叙景詩に

はとてや
郭公なくや五尺のあやめぐさ

というのがある。これはまさに初夏の風景を、みずみずし

い感覚で描写したもので、美しい初夏の風景そのものが描かれていたこと、意味そのものには曖昧性がのこる。また「さみだれのころに君が恋を失うなかれ。ひねもす、雨を見入りて君がまなこもまた湿うなるべし」というような散文でも、情緒的、感覺的であつて、それゆえにわれわれは美を感じるのである。とにかく日本語は、このように情緒的にすぐれた言語であり、象徴的、文学的表現に求めるような表現には、あまり適していないように思われる。かつて敗戦後、志賀直哉のような文学者でさえ、日本語廢止論を提言したことがあつたが、論理的正確さにおいて、ヨーロッパの言語に劣る点を自覚したからに他ならない。

2

つぎに日英両語の音韻についての相違点は、日本語にくらべて英語は音の強弱とか、抑揚がきわめて明確である。たとえば話しことばにしても、日本語はただらとした調子で抑揚はまったくないが、英語はわれわれの感覚からすればいかにもきざつばい感じがする。実際わかりやすく言えば、英語はヴァイタリティにみちた言語であり、力強い。つまり音韻的には、日本語とは比較にならないほど、たくましく男性的なのである。イギリス英語の方が、アメ

リカ英語よりも、いつそうこの傾向がつよい。

このような日英両語の音韻上の特質から、英語のもつ音楽性を、そのまま日本語におきかえることは不可能である。英語の音楽性は詩においてもつともよく表わされるが、この英詩の翻訳は、意味とか心象の移しかえはできて、音韻の美をそのまま、同じように移しかえることはできない。たとえば

Season of mists and mellow fruitfulness

という詩句には、強弱の抑揚のほかに、*i* と *f* の音の繰りかえしによる音楽美があるけれども、日本語には抑揚はおろか、*i* と *f* の音はまったく無いのだから、どうひっくりかえつても、音声的には翻訳は不可能である。それは日本語には、音楽美がまったく存在しないかといえ、そうではない。日本語にもそれ自身の音楽性はあるわけで、いわゆる俗に齒切れのよい言葉というものには、耳に聴いて美しい音楽的要素をそれなりに備えているのだと思ふ。しかし客観的にいって、シェイクスピアの英語や、イギリスの詩のもつ、あの独特の音楽性に匹敵することばの美は、残念ながらわれわれの言語にはないと思う。ただ日本語の音楽性は英語のような強弱のリズムではなく、音の数にもとづいている。日本語では、五音とか七音が区切の

よい音数であり、また三音プラス四音（＝七音）というよ
うな音構成も、音楽的要素をそなえている。たとえば今日
の流行歌や歌謡曲を例にとつても、たいてい五音とか七音
の構成で書かれ、明治の唱歌や新体詩とくらべて、基本的
な音構成は変わらないのである。おそらくこのような五音と
か、七音とかの音数が、われわれ日本人の生理や体質に、
もつとも適合しているものと思われる。また個有名詞をみ
ても、

東京都（五音）ワセダ大学（七音）

などの音数は、区切りがよいから、言いやすいのである。
慶応大学は、ケイオーと長く発音すると歯切れがわるくな
り、むしろケイオダイガクと言う場合の方がおおいのは、
音数による音楽美の原理にもとづいていえるといえるであ
らう。

音韻美という点では、擬声音もまたひとつの要素であ
る。英語にくらべると、この点では日本語の方が、より豊
富かもしれない。雨の降る音にしても、「しとしと」「び
ちやびちや」「ざあざあ」「ばしやばしや」「じとじと」
「ばたばた」などと例にこと欠かない。英語にも擬声音は
あるが、これほどの種類はない。だからこのような日本語
の特性をいかすことを考えると、

The gradual sand that through an hour-glass runs

というような句は、

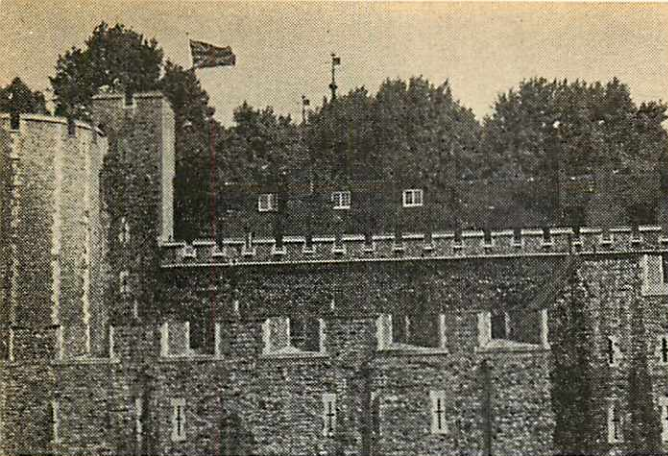
砂時計のなかを　さらさらと落ちる砂

と訳してみると、自然で美しい日本語になるのではない
か。「やらやら」という擬声音はどこにもないが、gradual
という語を文字どおりに訳すよりも、はるかによいのでは
ないかと思う。

3

ところでイギリス人は、その思考のパターンからすれ
ば、ドイツ人やフランス人ほど抽象的ではない。後者の理
論的構築は、カントやデカルトやサルトルの言語をみるま
でもなく明らかであろう。ところがイギリスにはほとんど
観念哲学が発達しなかった例をみてもわかるように、ふつ
うイギリス人は経験主義・実証主義的であつて、単なる空
理空論を避ける傾向がある。この事實は英語表現にもあら
われていると思う。すなわち英語には、具体的表現 *figura-*
tive language が豊富なのである。

法律上の見地では *in the eye of the law*



ロンドン塔

情勢の動きに注意する = have an ear to the ground
熱狂させる = carry off one's feet
人の立場にたつ = stand in a person's shoes
不平の原因をのぞく = draw a person's teeth

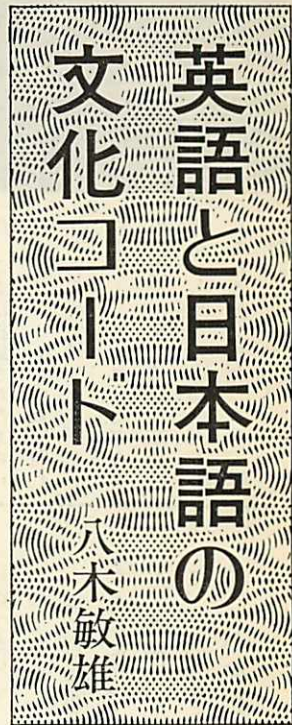
ロンドン市のテムズ川北岸にあり、イギリス中世の二重城壁をもつ城。ロチェスターの司教ガンダルフがウイリアム一世の命をうけて建てた。ノルマン朝から十九世紀にかけては軍事上使用された城であり、国事犯の獄舎でもあった。ここに投獄されたものは、アンブレン内親王時代のエリザベス、ウォーター・ローリー、トマス・モアなどがいた。王宮は清教徒革命の時クロムウエルの命によりとりこわれ、現在、兵營、博物館になっている。

などの具体的表現の例は、実に豊富であつて、英語のイデオムの多くは、この種の表現である場合がおおい。最初にのべたように、英語は基本的には論理的な特質をもっているが、非論理的な側面もたぶん有している。

He doesn't like music, more or less. は、「かれは音楽がまったくきらいだ」の意味となるけれども、'more or less' は文字どおりには、「多少」とか「程度の差はあれ」の意味であるから、論理的な文章ではなく、迂回的思考を示している。また、

Home is home, be it never so humble. は「いかに粗まつであれ、家庭は家庭」の意味であるが、この it never is *never* とまつたく同じ意味である。つまり *never* という否定語は、まったく正しく機能せずに、虚辞的役割しかもっていない。この種の曖昧性や非論理性も、英語には多いのであつて、かならずしも論理的言語とばかりは言えないのである。

しかし人間の情緒・感情には曖昧性や、暗黒の深淵部分がつねにつきまとうことは事実だし、精神活動においても、神秘性のともなわぬ高い思想はあり得ないのであつて、このかぎりにおいて、文化としての言語はいずれの国語にも、究極的には論理をこえた部分があるのである。



言語はさまざまなコードからできあがっている。音韻のコード、構文のコード、意味のコードなどの。そして英語と日本語の場合、両者のコードは相互にほとんど関係がない。だから、いかほど日本語の諸コードに通曉していても、英語の諸コードを知らなければ、英語を読むこと、つまり英語の諸コードに則して英語のテキストを読むことはできない。また英語のテキストがよく読めても、それを日本語の諸コードに関連づけ、置き換えて、英語のテキストに過不足なく対応する日本語のテキストをつくりあげるのは容易なことではない。その転換の過程で、なにかが失われ、なにかが付け加わり、なにかのずれが生じるのが常であ

る。そして、そのさい、いちばんやややしいのが文化コードの問題である。たとえば、ここに次のような英語のテキストがある。「We need a little of your fresh blood」これ自体、いささかもむずかしい英語ではない。英文和訳の次元でなら、つまり統辞法と辞書的意味のレベルでなら、「われわれはあなた（がた）の新鮮な血をすこし必要とする」、または「新しい血がすこし欲しい」という「訳

で、一応正解ということになる。が、この英語のテキストに、私が実際にそれを目撃したときの、次のようなコンテキストを与えてみればどうか。

場所はアメリカの大学の構内。その建物の壁に、形相ものすごい、しかしいく

らか滑稽化されたドラキュラの絵のポスター。近づいてみると、そこに「We need a little of……」の文字が読め、「××献血協会」の署名がある。つまり吸血鬼ドラキュラが献血運動に一役買わされているわけで、こうなれば右の英文の意味もにわかには定まってくるかにみえるが、それだけ文化コードが絡んできたわけでもあり、もしそれを日本語に翻訳してみる——つまり日本語の文化コードに対応させて、日本語のテキストを作ってみる——ということになれば、それだけやややしきは増す。

たとえば、日本の妖怪変化たちを思いおこし、日本語の文化コードに照らして、これを「うらめしや、血が欲しや」としたらどうか。これがドラキュラの吐くせりふとして適切かどうかが問題になる。さらには、このせりふが緊急に大量の血液を必要とする医療機関のメッセージを正確に伝え、かつ人びとの献血意欲に訴えるための英語の文句に対応する日本語の文句として有効かどうかの問題になる。そのコンテキストにおいて、英

語の場合にかもし出されるブラック・ユーモアが日本語の場合にも効くか……といった問題が次から次へと出てこよう。そして、ついには、わが国の献血運動の場合にはドラキユラの絵に相当するものが薔薇の図柄のポスターで、文句も「愛の献血を」であることにかんがみ、ドラキユラに「愛の献血を」と言わずことにするとすれば、これはこれで別種のおかしみが出て、原文とはかなり違うが、翻訳としては悪くないかもしれない。

このように、同一のメッセージを伝えようとするときにも、文化コードの違いにより、言葉の用い方が極端に、あるいは微妙に違うのは避けがたい必然で、このことは翻訳者たる者、つねに念頭に置かねばならぬことである。その卑近な事例として、私はまた別に、アメリカの紙巻タバコの箱と日本のそれとに印刷されている文句の違いを思い出す。アメリカのそれには、次の文字が印刷されている——“Warning: The Surgeon General has determined that cigarette smoking is dangerous to your health.”(1)

るで日本専売公社のタバコの箱には「健康のため 吸いすぎに注意しましょう」とある。両者はともに、ほぼ同じ意図と考慮によって発案された文句であるはずである。「意図」とは喫煙が有害であるというメッセージの伝達、「考慮」とは、にもかかわらず、それを売るということだが、英文の「警告」はともかく「喫煙は健康に有害である」と述べ、ただし、そう認めたのが米国公衆衛生局「医務長官」であると間接化しているのに対して、日本文の「注意」は喫煙の有害性については直接触れず、ただ「健康のため」に「吸いすぎ」に注意せよ、と言うのだが、私などは、これを読むと、健康のためにもっとタバコを吸わねばならぬような気にさえなってしまうほどだ。が、ところで、日本のタバコの箱には、「厚生大臣は喫煙が健康に有害であると決定しました」というような文句は絶対になじまない。つまり、英語を、日本語の文化コードを無視して、直訳しても、たいてい、いい日本語にはならないということである。

しかし、いわゆる「意訳」というのも、ほどほどにしなくてはならない。翻訳とは、つねになにかが失われ、なにかが付け加わる行為であるにしても、あまり大量に失われたり、付け加えたりするのは感心できないからだ。英語と日本語の場合ではないが、有名な短歌「足引の山鳥の尾のしだりおのながく、夜をひとりかもねん」の「現代語訳」として、ある解説書は「山鳥の尾の垂れさがった、あの長い長いその尾よりも、いっそう長いこの秋の夜を、恋しい人とも離れて、たったひとりできびしく寝ることであろうかなあ」としている。すぐれた訳ではない。このながながしい現代語には、多くが付け加えられているが、「あしびきの」という枕詞(古歌のコード)に対応するものは欠け、「山鳥」を「夜は雌雄谷をへだてて寝る習性のあるキジ科の鳥」とする「新古今」のこの文化コードを生かしてもいい。英語と日本語の場合には、どれほどのことが起こるかは想像にかたくあるまい。

(成城大学助教授)

この以て非なるもの

◇◇日英文化論◇◇

成田成寿

(共立女子大学教授)

1

日本とイギリスとは似ている国のようにいうものがある。それは、とんでもない思いちがいであろう。うぬぼれかもしれない。わずかに似ているといえれば似ているようなところは、両方とも島国である点である。島国といっても、全然ちがう島国である。日本は地震国で、土地の起伏がはげしい。イギリスには地震がなく、なだらかで、川も、どつちへ向って流れているのかわからない。日本は細長く端から端まで、車でいけば、いく日もかかる。イギリスでは端から端までいっても、大した時間はかからない。ロンドンからヨーロッパ大陸へも一時間たらずでいける。東京から大陸へは、そう簡単でもない。ヨーロッパ全体についてもいえることだが、イギリスのようなあんな狭いところに、

あれくらい、いろいろな人間が住んでいるのは、むしろ変っている。第一に、イギリスではたいてい、一人一人、目の色、髪の色、皮膚の色がちがっている。髪は茶色が多いが、金も赤も、黒も、さまざまなものがある。瞳の色でも、青、灰、茶があるかと思うと、緑もある。日本人の方は、どこへいっても、誰のものでも、黒い髪に、茶か黒の瞳にきまつている。皮膚の色が白いいっても、イギリス人の白いのとは、ちがう。大体は黄色である。黄色で悪いことはない。だが、どこへいっても、いつでも、黒い髪に黄色い皮膚では単調だ。こんど生まれる子供の髪の色は何色だろうなどという期待もないわけだ。茶色に染めた髪も、皮膚の色とつりあわないから魅力にならない。

イギリス文化の特色の一つは多様性と個性である。温和な気候、自然の中で、莽猛な気性が醇化している。日本の一般的な特色は単一性と個性のなさである。それが激しい気候、風土の中で激烈なものになっている。それは日本人をより長く封建制に甘んじさせ、軍隊や学校における絶對的な訓練に耐えさせた。日本人ほど生命を粗末にする国民はいない。すぐ自殺をしたがる。自殺をすればすむと思つている。上の人が死ぬといえ、文句もいわず死ぬ。イギリス人は命を惜しむ。自殺は、なかなかしない。義理も人情も日本人とおなじようにあるのだが、命を捨ててという考えはあるまい。命がなくなれば、何もかもなくなってしまうことを知っている。上の人のいうことでも理屈にあわなければ、かならずしも聴かない。理詰めで不合理を変えさせようとする。日本で、個性的でもないが、てんでばらばら、もつともちがうのは街のビルや住宅である。イギリスなら街全体の美観とか調和を重視するところがある。

文化的にいえば、イギリス人の方が、はるかに進んでいる。封建制度も比較的早く脱皮した。内戦、外戦で、さんざん苦勞をした。その民主主義も、苦勞のあげく、自分の力でしだいに、かち得たものであった。外から押しつけられて、だまっている国民でもない。政治も科学も芸術も軍隊でも、あらゆる文化は、しだいに發展させて、自分なり

のものにした。付け焼刃ではない。文学にしても、段階的に發展したものである。ルネッサンスのあと、古典主義を経て、ロマン主義になるといふうに、動と反動をくりかえし、しだいに変わっていった。政治にしても保守と進歩が、交代し牽制して過度に陥らないように動いている。自分たちで工夫し、自分たちで作りだしていくので、ロマン主義も自然主義も、外から同時に入ってくるという日本的な形は、めつたにとらない。

3

こんなちがう国民であり、文化なのである。表面的には両方とも島国で似ているから手をつなごうなどと、見えたことはいふものでない。おなじように島国で、などと、エリザベス女王も、このあいだおいでになったとき、おっしゃったようだ。それは向うの都合で、あるいはこちに親愛の情を示そうとしていうのである。全体として、いく歩も先進国であることは、向うは十分知っている。何百年も前に一介の船乗りが、日本へ流れついても、十分教えるものをもっていた。幕府の末期に、さっさと見限りをつけ、新興勢力の薩長とけんかしながら、いち早く接触をもった。留学生も受け入れた。門戸開放の先鞭をつけたアメリカを押しつけて、イギリスは新日本の指導者になった。鹿鳴館的速成文化を教えながら、イギリスは心の中で笑っていたかもしれない。ガニまたの日本美人のローブ・

デコルテは、おかしかったにちがいない。

今でも、イギリスと日本とは、その文化の性質も、ものの感じかた、見方に、非常にちがうところがある。同じと見るべきではなく、補いあうべき性質のものである。同じであるようなことをいうのは、たいていイギリス側からのお上手で、真実、そう思っているわけでもなさそうである。釣られて、こつちから同じだなどということはない。現在でも日本のことなど、たいていのイギリス人は知らないだろう。日本では民主主義をふりまわすが、その歴史と基盤の浅いのに、はらはらしながら見ているところがある。

4

英語と日本語が、また、おそろしく異なる言語である。縦書き、横書きの差は、そのまま、発想でも叙述のしかたでも天と地ほどちがう。日本人は英語が上手にならないというが、こんなに異なっていないければ、もつと上手になつていたろう。私個人では、将来も、日本人の英語は、これくらい以上、そう上手にはならないのではないかと思つてゐる。身分の差があるというわけではないが、誰でも彼でも、たとえ、そば屋の出前持ちや、かつぎ屋の婆さんまで、英語を喋つたり、勉強したりする必要も、まず、ないのである。

だが、このくらい英語を勉強して、効果が、それほどあがらないというのが事実であるとすれば、教えかた、

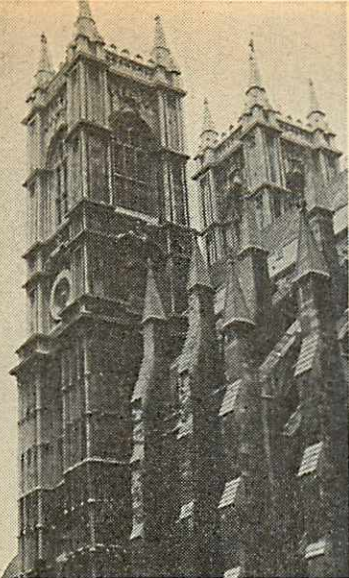
習いかたにも問題がある。しかし、民族と文化が、まったく、ちがっており、その壁を、ついに突き破れないところに、より問題がある。こんなに、いっしょけんめい(?)勉強しているのに、喋れもしないし書けもしない。それなら、読むのは確かかという、それだつて怪しい。喋ることや書くことは、思うようにいかないから、自分でも、できないということが、よくわかる。読解の方は、一語一語、辞書をひいて、なんとか辻褄が合うように、ひとり合点をする。ところが英語は、そんなことでは、わかるものではない。英語の文章は、初めから終りの方へ、自然に流れていつて意味が通じる。辞書を引いて、あつちの単語とこつちの単語を結びつけて意味が浮かび上がるものでない。よい発音で、イギリス人の呼吸と合わせて、切りながら、自然に読みくだしていかなくては理解できない。判じものではない。喋れず書けなければ、ほんとに読めない。自然に読むのに馴れなければ、喋れず、書けもしない。英語は順序を重んずる。だめなことは、ふつう、初めに否定する語が来る。「誰も知らない」というときの日本語のように、否定が最後に来ない。英語では、ふつう、「ない人が知っている」という。だめなことは初めからわかる。どうなるのかと思つてゐると、最後にわかるというのではない。日本語と英語とは発想法が大体逆である。だから、よほど馴れても口からも頭からも、英語が、つづいて出てこない。

英語がむずかしいといつて、無理のない面もある。英語の単語の数の多さ、ニュアンスの微妙さは他に見られないほどである。英語はもとフランス語と一緒にあって、今の英語になった。単語の多いのも、ニュアンスの複雑さも一つには、そのせいである。その上、ちかごろは、アメリカ英語が加わって、やたらに豊富になった。いつまでたっても辞書を手ばなせない。何百年も前の単語を今も使う。そ

ウェストミンスター寺院

中心の聖ペテロ寺はイギリス唯一のゴシック建築で、一〇四二年頃エドワード懺悔王が建てたベネディクト派の僧院。

歴代の国王の戴冠式を行うことで有名。チヨウサー、シエイ



クスピア、ミルトン、ハーディなど著名な文人を記念した「詩人隅」や、第一次世界大戦の犠牲となった無名戦士の墓もある。

れには時代とともに、いろいろな陰影がつきまといていく。日本語はどんどん変る。現代日本語は、それはそれとしておもしろいが、陰影がよりとほしい。

日本語は、一方では、世界一複雑な国語である。おなじ漢字を、いく通りにも読む。男、女の区別、敬語もややこしい。外人には、読むより話す方が楽らしい。それでも外人は一般に外国語に馴れている。日本語のうまいイギリス人、アメリカ人はすくなくない。たいていは話し言葉から入る。それにしても日本語と英語とは、まったく異なる言語である。その差は、歴史、文化、伝統の差である。日本文化、イギリス文化、日本人、イギリス人の重なり合うのは、人間としての基本的な点か、表面的な点である。針で突けば日本人もイギリス人も痛い。だが痛がる本人たちの内容はまったくちがう。

6

だからこそ、両方の言葉を学びあい、文化の交流をはからなければならぬ。日本には独自の文化がある。それは発展させなければならぬ。だが近代社会に互していくためには日本がイギリスから学ぶ方が、また、より多そうだ。大学などを中心として、効率的に英語を勉強する必要は、いよいよあるのかもしれない。

同時に翻訳の問題がある。みんな英語を読み書き話せれば、翻訳の必要はないはずだ。事實は、翻訳がいよいよさ

かんである。必要があり、読者が求める。私自身は、いっそ幕府時代のような審書調所を、政府が発足させ、世界の文献をなんでもかんでも邦訳させてはどうかと思う。定員を減らす動きのある時に、公務員みたいなものを増やそうとするのは疑問である。しかし日本はイギリスとちがって、上からの仕事、公務員の身分が絶対である。下からの私企業が育ちにいく。

気をつけなければならないのは、技術などの場合はともかく、思想や文学の翻訳では、よほど注意しなければならぬということである。思想的、文学的作品では表現のしかた、いいあらわしかた、あるいはひとつひとつの単語の重層的な意味が重要である。それは特に日本語から英語などへ移しにくい。だじゃれ地口の翻訳は、ほとんどお手上げである。英語を日本語に忠実に移したつもりでも、元の含みは出てこない。「弱者よ、なんじの名は女なり」でも、「大わだつみの水を紅く染めて」でも、原文の巧みさ、おもしろさに、ほど遠い。だから、多少、もどかしくても、十分でなくとも、原語で読むのが一番よい。卒業論文を書くなどという大学生が、翻訳で読んで、でっちあげるなどというのは、そもそも心得ちがいはなほだし。

7

イギリスでも日本でも、いわゆる名訳が存在している。あまり翻訳というきこちなさもなく、ほどほどの異国調を

ただよわせて、読みやすいものである。それは一つの文学作品で、存在理由もある。だが、それは一種の必要悪的な性質のものである。

特に日本とイギリスのように、伝統や文化のまったく異なる場合、内容まで、そのまま移すのはむずかしい。イギリス文学は道徳的だなどというものがある。イギリス文学は人間の隅々にまで関心があるが、表面的な道徳は超越している。不道徳ともいえまいが、英語で書かれた艶笑的の文学作品は量、質とも世界一である。ロンドンにはポルノ的文学の世界的市場なのである。イギリス文学は本当は開放的で、激烈なものも多い。その表現が陰影と複雑性に富んでいて、おもしろい。表面的な道徳性というものではないが、人間のあらゆる姿に関心があつて、人間的といえる。日本人は性質が激しやすく、群集心理に支配されやすい。その点では、ロシア、フランス、アメリカ文学などの行動性と激越性により惹かれやすい。それらの国々の文学作品の多くの場合には、表面的に日本人に理解されやすいものがある。イギリスの文化、イギリスの言語、イギリスの文学の場合、人間を尊重し、人間と対決し、人間の複雑さのあらゆる面をとらえようと細かく探求しつづけている。その日本とちがうところの多いところが、イギリスの文化なり言語なり文学が、より興味あり、われわれがきわめたいところである。

……その思惟の運動の固有のリズムこそが構造を決定しているのであって、そのリズムをキャッチして再現しなければ、本当は翻訳ではない。……(本文より)

誤訳の深層

小野二郎

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses,
And all the king's men,
Couldn't put Humpty together again.

アメリカの作家 Robert Penn Warren の “All the King's Men” (1946) というピューリッツァー賞を獲得した作品がある。これについて、平野敬一氏はこういうことをいっている。平野氏は知られているように日本でのマザー・グース童謡集の本格的研究の先達であり第一人者である。(もともと第二、第三以下はいないのだが)そして平野氏は、英語圏文化の根本理解にはこの種のものに親しむことがもつとも肝心なことではないかという批判をこめてこの仕事を進めていられると思う。その平野氏はこの小説の邦訳題名が『すべて王の臣』となっていることに疑問を感じるのである。なぜなら、これはイギリス伝承童謡の次の唄から

由来していることは明らかであるが(平野氏にとって)、この訳しぶりでは訳者はそれがわかっていないのではないかというのである。この小説はアメリカ南部のある有名な政治家をモデルにして、主人公が地方政治家として栄耀榮華をきわめた後、その息子が破滅するという悲劇の進行をあつかっている。この唄はハンプティ・ダンプティは何かという謎唄でその答は卵だというわけだが、つまり、いったんこわれたら絶対にもとに戻らない、王様の馬を総動員しても、王様の部下を総動員しても、卵はもとに戻らないというのだから、この表題は、いったん進行し始めたらどうにもとまらぬ悲劇というこの小説の主題を深く暗示していることになる。

だから、『すべて王の臣』という訳は誤訳ということになる。平野氏の訳では『王の部下すべて』あるいは「童謡の調子からすれば……『王さまの家長がみーんな』とでも訳したいところである」という。『すべて王の臣』という訳はこの題名がハンプティ・ダンプティの唄に由来することを知らぬことからのものだとすることはどうもたしからしい。(この「誤訳」の意味を尋ねる前に、『すべて王の臣』という日本語の意味はどうだろうか。これは「すべて王の臣」という意味にはならない。「すべては王の臣」ということだ。「誰も彼もみな、王様の臣下である」という意味になり、All the King's Men の直訳でもない。

純な誤訳だといえるかもしれない。むろんこうなつたのは、平野氏指摘の「無知」から生じたものであるうが。

「ハンプティ・ダンプティ」の卵

さてこの「誤訳」によって失われたものは何であろうか。「ハンプティ・ダンプティの唄」の喚起力の源泉は「卵の崩壊するイメージの原初性」であるという。「卵が崩壊する」というのは、ある既存の秩序の解体であると同時に、ある新しい生命の誕生を象徴する。古代の創世神話にみられる世界卵(宇宙卵)も、どこかでこのハンプティ・ダンプティの卵とつながってくるのである。(平野氏)つまり、この唄が暗示する cosmological egg の神話を枠としてこの小説はできており、物語の悲劇性は、この神話の増幅作用によって強められているということになるか。田舎政治家一家の「悲劇」にそれほど大きい振幅があるのか、その容れものとしての神話は、その「悲劇」の内容に比して大き過ぎるのではないかともいえるかもしれない。作品の美的効果の中心に、うまくこの神話の枠が構造として機能しているかといえ、それはまた別問題になるだろうが、少くとも幼少時からこの唄に親しんできている英語国人にとっては、彼らにとってさえも意識化されていない、自覚されていない、この唄の魅力の原質にこの物語の題名に感応

はしているだろう。そしてこのことはこの作品の享受にとって本質的であろう。

となれば、この「誤訳」、その理解の基本部分を欠如していることになるだろう。だがしかし、当然のこと読者がこの唄に自然に親しみ、その唄の孕む神話の世界の伝統に自然にひたっている時のことである。われわれのようにそういう世界にいない読者にとつて、『すべて王の臣』と訳されようが、『王の部下すべて』と訳されようが、意味の違いは感得されても、それ以上何の喚起されるものはない。要するに猫に小判である。それは知識として、解説や話によつて教わる以外手はない。「マザー・グースの唄」を、われわれが熱心に読み、学んでも、結局学ぶ以上には出ないので、「知識」でしかないだろう。これは翻訳それ自体だけで、本来解決できない問題である。

「表現」の实行

それでは、そういう「誤訳」は許されるのだろうか。私はまったく逆だと思ふ。この平野氏が指摘する事例は、実は氷山の一角に過ぎないだろう。正訳しようが誤訳しようが、われわれ日本人一般にはわからない。わかりようがないことでは、誤訳がまかり通つており、自他とも気がつかないでいるのではなからうか。こういう訳語の選定、翻訳

技術などでは解決できない誤訳発生の場にこそ、翻訳の奥深い問題がかくされているのではないか。正訳しようが誤訳しようが、翻訳としての通用意味に実質的变化のないような時にこそ、誤訳を警戒することが翻訳の基本的な心かげではなからうか。

その訳語だけでは解決できなくとも、それを正解していれば、それをkeyとする全体の構造の理解がまったく異なるはずである。言語構築物は、その構築以前に、思考の流れ、思惟の運動体があると考えれば、言語の一对一の対応関係で移すことは翻訳ではない。その思惟の運動の個有的リズムこそが構造を決定しているのであつて、そのリズムをキャッチして再現しなければ、本当は翻訳ではない。だから、『すべて王の臣』と訳そうが、『王の部下のすべて』と訳そうが同じだというのは、実はその訳語の範囲だけの話であつて、後者の正解が本物ならば、作品全体のリズムのとらえ方がまったく違つてくるはずであり、註や解説などにまったくたよることなく、その「正解」の内容を、翻訳された世界の構造とリズムの中に表現することが可能であるだろう。「正解」を知識として披露することより、この「表現」を实行することの方が、何層倍もむつかしいことは、いうまでもない。

(明治大学教授)

変わるアメリカ

◇◇◇ 誤訳の背後にあるもの

— 風俗、風物など —

龍 口 直太郎

◀ 第 1 回 ▶

◎ はじめに

外国文学の翻訳ほどむずかしいものはないであろう。大学の英文科を出さなければ誰にだってかんたんにできるといったものではない。ほかに就職口がないし、家庭でもできるから、「あたしホンヤクでもしてみたいの」と言つて、私のところに下訳でもさせてほしいと頼んでくる女性が少くない。しかし、翻訳という仕事は片手間でやつつけられるほど生やさしいものではないし、「下訳でも」と申し込んでくるような人に仕事を頼んだらさいご、自分でやったよりは数倍も手間がかかることが多い。「デモ翻訳家はデモン (demon) 翻訳家か」などとシ

ヤレてみても仕方あるまいが——

外国のものを日本語に移すには、いろいろとむずかしい条件があると思う。例えば語学力である。私はつねづね、いい翻訳は原文の正しい解釈の上に成り立つものと考えている。どんなに名調子の日本語で書かれていても、英語の読みがまちがっているのでは、呑舟の魚マリーンは舟べりまでも上がってこないだろう。それは、どんなにきれいにピアノを叩いても、楽譜の読みが正しくなければ、よい演奏とはいえないのと同じである。いわゆる作家の翻訳の中に、あまりいただけないものがあるのはそのためである。

これと逆の場合も考えられる。英語の力は、英文科の教授をしているからでも

明らかなのに、その先生の訳したものが読めないこともよくある。原文と照合してみるとたしかにそのとおり書いてはあるが、日本語から受ける印象と原文の与える印象とがまるでちがっているとか、かなりズレがあるとかいったケースもよく見かける。それは日本語の表現力において劣っているからであつて、大学の先生の翻訳にはその種のものがよくある。

第三に、外国事情や外国の風俗・習慣、風物や地理・歴史などに通じていないために起こる誤訳もまたある。そう考えると、イギリスものを訳す人はイギリスに、アメリカものを訳す人は、何をいってもイギリスなりアメリカナリを訪れ、彼らの生活の中にはいってみることも必

要となってくる。これもホテル住居ではなくて、アパートなどに住んで自炊してみるのが一つのよい方法であろう。アメリカのビフテキはまずいなどときめつけないで、スーパーあたりでサーロインの肉を買ってきて、自分でステーキを焼いてみるとよい。四百円ぐらいの牛肉で、日本だと四千円もするようなステーキが食べられるというのを、私は自分の実験によって保証できるのである。

◎風俗・習慣を知っておきたい

私はしばらくアメリカに住んだあと、日本に戻って、オヤと思ったことがある。日本の女性がスカートをはいていることだ。今日のアメリカでは、よほどの老婆でもないかぎり、スカートなどはかず、若い女性から中年の女性に至るまで、さらにはたいいのお婆さんまでも、ストラックスかパンタロンをはいているのだ。もちろんパーティーとか、音楽会や芝居見物などにはドレス・アップして、ちゃんとスカートをお召しになる。カーネギー・ホールで私のおとなりになつていた令嬢らしき若き女性が膝下まで

のスカートををはいているのに出会って、これなら女らしく美しいな、と私は感心したことがある。但し、それは例外であつて、昼間、街中で見かける女はほとんどすべてジーンズかパンタロンかストラックス姿であるのだから、そのような風俗の女性はヒッピーだとか、中流以下の者だとか早合点してはならない。

それはそうと、彼らや彼女らが身につけるものについて用心しておく必要のあるものがある。例えば「パンツ」である。アメリカで「パンツ」といえばズボンのことで、trouser という言葉はあまり使われていない。「彼はグレーのパンツでパーティーにやってきた」などという邦訳を見ることがあるが、いったいそのパーティーでは何をやるのだらうか、と疑問が浮かぶのをいかんともしがない。シャツにしてもそうだ。英語の shirt はもちろんワイシャツのことで、下着なら「undershirt」となる。「あいつシャツ一枚で仕事をしている」といっても、それは上着だけを脱いでいることで、下着になつてはいるわけではない。

コーヒーについての習慣も近頃だいぶ

変つてきた。ひと昔前までのアメリカでは、コーヒーを飲みに行くと、「ブラックホワイトか?」ときかれたものだ。ところが、この頃では、「レギュラーか、エスプレッソか?」ときかれる。「レギュラー」とは、従来のような薄いコーヒーにミルクでさらに薄めたアメリカ式のもので、レストランともなると、「アメリカン・コーヒーかエスプレッソか?」とくる。この「アメリカン・コーヒー」というのが、コーヒー・ショップやスナックなどという「レギュラー」に当るものである。

また、この頃、ニュー・ヨークなど東部の町ではコーヒーをタダでお代りできない。(もともと、高級のレストランではそれができるが)しかし西部ロサンジエルスとかサン・フランシスコなどでは今もって自由にお代りできるのがふつうであるところから、東部に移り、同じだとばかり思いこんで、気軽に何杯もお代りして失敗した人もいる。アメリカは広いところなので、西部と東部では国がちがつていると考えるほうがよいこともあつた。ほんの一例だが、西部の代表的な州

であるキャリフォーニアでは最近になって墮胎が合法化されたが、東部その他の州では今もってそれが非合法になっている。従って東部の作家ジョン・バース (John Barth) の『旅路の果て』において重要な役割をするこの墮胎は、今日もなお通用するが、キャリフォーニア作家のリチャード・ブローティガン (Richard Brautigan) の『愛のゆくえ』 (原題は『アポシジョン』) は、内容としては歴史的にしか価値がなくなつたみたいである。

◎アメリカの風物

つまらない事のようにだが、「オレンジ」 (Orange) という英語をいまだに「蜜柑」と訳している人が少くないようだし、日本の中学校あたりでもそのように教えているところがあるのではなからうか。日本のミカンに当るものを英語の中に求めるとすれば“tangerine”か“mandarin”だと思うが、アメリカのキャリフォーニアやフロリダに産する“orange”は同類のものが日本にないので、やはり「オレンジ」とすべきであろう。ちょうど日本にはできない“grapefruit”をそのまま

「グレープフルト」とすべきだと同じ考え方である。

似たようなことが“porch”についても言えるのではないか。これをふつう「玄関」などと訳しているが、日本の玄関とアメリカの「ポーチ」ではだいぶちがっている。「玄関」はほとんど地面と同じレベルにか、ないし一段ぐらい上がっているところにかにあるが、「ポーチ」のほうは五、六段のステップスが上がったかなり高い所にあり、かつ「玄関」とはちがって、そこには椅子とかテーブルなどが置いてあり、来客の応待にも使うようになっている。日本では「玄関払いする」ことが礼を失する意味になるが、アメリカではポーチで人に応待しても失礼になるどころか、ごくふつうの応接法でさえある。

少し古い話だが、日本のある新劇グループがウィリアム・インジ (William Inge) の『ピクニック』をとり上げて上演したことがあるが、そのときの舞台が日本の玄関に近い装置になっていて、いかに狭苦しく、おかしなものであったことを思い出す。訳者か演出家かがアメ

リカの「ポーチ」がどんなものかよく知らなかつたためであろうか。

近頃のアメリカの都会では住宅がビル形式になっているので、この「ポーチ」などほとんど大都会では見かけられないが、一歩郊外に出たり、田舎に行つてみると、今もって「ポーチ」を持つ家がたくさんある。小さな家にも「フランド・ポーチ」と「バック・ポーチ」があり、大きな屋敷ともなると、さらに両側面に「サイド・ポーチ」がついている。そして、どの「ポーチ」にも数段のステップスがついていることに変りはない。従って、「バック・ステップス」といえば、「バック・ポーチ」の段々であり、けつして二階に上がる階段ではないのだ。建物に関してつけ加えておきたいことがもう一つある。例の「ホール」 (hall) である。これをうっかり「広間」と訳す者が多いが、個人の住宅ではおかしなことがある。ふつうの場合、これこそ「玄関」もしくは「玄関の間」とすべきである。「広間」どころか、狭いスペースのところが多いのである。とくにアメリカにおいては、この「ホール」が「廊下」

(hallway) に使われることがしばしばであるから注意したいものだ。

こんどアメリカを旅行してよく耳にしたのは「condominium」という言葉である。あちこちで見かける、高層の大規模な新しい住宅群をそう呼んでいるのだ。

「共同主権」(Joint sovereignty) という意味ではなく、字引にも出ているが、共同管理のアパートメント・ハウスという使い方は従来の辞典には載っていないようである。ほとんど日本の「マンション」に相当すると言ってよく、従ってこの英語は「コンドミニウム」もしくは「マンション」と邦訳してよいのではないだろうか。それはハワイでも、西部ロサンゼルスでも、東部でもよく見かける新型アパートである。

アパートといえば、この頃のアメリカには「……タワーズ」と呼ぶ高層アパートがふえてきたみたいである。私がニューヨークのマンハタンでしばらく住んでいたところは「Lincoln Towers」と呼ばれる三十階建てのアパートメント・ハウスが幾棟も並んでいるところである。ま

た、ワシントンD・C.に隣接したアーリントンに私の友人が住んでいるところは「Arlington Towers」といわれている。これらは「塔」というよりは「高層アパート」であって、そこに住む人々には塔のように高い誇りとなるかも知れないが、ほかの人たちには誤解を招きやすい名称ではある。

アメリカに行った人なら誰でも知っているが、行ったことのない人には案外知られていないもの一つに「ウールワース」というテン・セント・ストアがある。これはアメリカの至るところにある



▲New Jersey州のMontclairで見たと古い型の屋敷で、正面の階段を上ったところfront porchで、左側にはside porchが見られる。

安アパートで、初めは十セント均一の品物を売っていたのであろうが、今日ではその十倍、もしくはそれ以上の値段のものも販売している。トルーマン・カポーターイ(Truman Capote)の『ティファニーで朝食を』には、女主人公がニューヨークの「ウールワース」でハローインの仮面を盗む場面が描かれているが、同じ作者の「Shut a Final Door」でもやはりこの種の店で万引をするところが出ている。ところが、「Steal from Woolworth's」という原文を、ある大学教授は「ウールワース家から盗みをはたらく」と訳出している。訳者はウールワースという店を知らなかったばかりか「アポストロフィー・S」を複数ととりちがえた文法上の初歩的ミスまで犯しているのだ。さらに知っておきたいのは、最近アメリカでちよくちよく見かける「ウールコウ」(Woolco)と称する店についてである。これはウールワースと同じ会社の経営する、同種類の雑貨店であるが、どうやら新築の店にはこの名前をつける方針であるらしい。(早稲田大学名誉教授)



＜福沢論吉＞

激流の中の

洋学者たち

吉武好孝
 (武蔵野女子大教授)

1

まえがき

国語のちがった二つの国の文化が接触し、交流するところには必ず外国語同士の意味の違いの「言い換え」、つまり、「翻訳」という現象が起る。でないと、お互い同士の相手の意志がわからないからである。そのばあい、ちがった国語を話す甲と乙という人間同士の間ならば、甲の方には乙のことを自分の国のことばに言い換えてみるだけの知識があり、乙の方にも甲のことばがわかることが必要条

件であって、甲乙相互に相手のことばが通じ合わなければ、そこには言い換えも起らないし、意志の疎通はなく、二人は永久に相手の意志を知ることが出来ず、二人の間には起らない。

ところが、今度は、日本人の誰かが外国人の書いた書物に接して、その知識や教養の内容を読みとろうとするばあいを考えてみると、彼は日本語をもって、その書物の外国語の意味内容を「言い換え」て、つまり、その内容を日本語に「翻訳し」て、知識や教養を受け入れる。考えてみる

と、翻訳という活動は、外国文化のもっている知識や教養を自分の国に受け入れる「窓口」のようなものだといつてよい。

ところが、周知のように、徳川幕府以来の日本は、二百年間鎖国政策をとつて、外国文化との接触をしなかつた。しかし、幕末になつてから、幕府はいや応なしに鎖国の政策をすてざるをえなくなり、いわゆる「黒船」の來襲におびえて、アメリカと通商修交の条約を結ぶことになつた。明治維新を通過した後にも、明治政府はこの条約を改訂（明治四年）し、いよいよ本格的な開港通商貿易を推進することになつた。このような一連の外交上の出来ごとを通じて、むしろ、翻訳活動は、多くは「通詞」（つうじ）とか、或は「通訳」という人間の力を借りて行われ、日米両国間の文化の接触交流が進んでいったのであつた。

このようにして、日本にはいわゆる「近代」が訪れ、国際間の文化的接触と交流はいよいよますます多くなり、今日におよんでいるのである。近年交通機関、とくに航空機の發達のために、世界の国々の距離は百年前の何十分の一に縮まり、この国際間の文化交流に拍車をかけてきている。翻訳活動が今日ほどその必要度を増した時代は、日本や世界の過去の歴史にはいまだ曾てなかつた。そこで私は、このような一般情勢に関する大まかな予備知識を前提にして、以下この文章では、「日本の近代化」のために翻

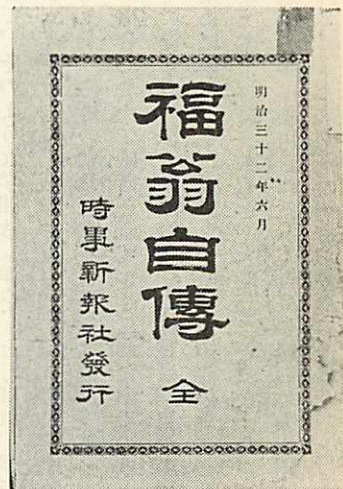
訳がどんな役割を果してきたかを、歴史に沿つて考えてみたいと思ふ。

洋学はなにをしたのか

鎖国時代といえども、日本はわずかながら主として長崎などを基点としてポルトガルやオランダと通商や貿易をし、多少とも外国の文化に接していたので、それらの国々の人を通して医学、薬学、砲術などのような特定の実用学問を学んでいた。そして、それらの学問を学ぶばあいは、外国語のわかる人なら直接外国人から学んだり、或は「通詞」と呼ばれる通訳を介して外国人から学んだりした。また、日本人のその道の専門学者から、医学書、薬学書、砲術学書を読まされたり講義してもらつたりした。そして、そのような学問は「洋学」と呼ばれ、学者は「洋学者」と呼ばれた。医学や薬学の方は比較的楽で問題はなかつたが、砲術の勉強となると奇妙な關係が起つた。旧藩主の指令によつて砲術を研究させられた学者のばあいには、その洋学者の伝える軍事科学の知識は、自分の藩の防衛のために研究させた知識なのに、他の藩の者に伝わつたり、或は盗まれたりすると、大変なことになつた。砲術の知識が他の藩に利用されると、自分の藩の危険を招くし、地方の藩の多くに砲術の知識が普及し進歩すると、中央政府である幕府の存亡にかかわりかねない、といったように、砲

術学に関してだけは、微妙なひびきがあるので隠密のうちに研究されるのが常道だった。いずれにしても、これらの洋学の出発点には外国語（最初には、ポルトガル語とオランダ語、後には英語）があり、それをマスターするには、外国語の文法知識をたよりに、その内容を日本語に言い換える、読解（ひろい意味での翻訳）と翻訳がつづいて来なければならなかった。その窓を通して外国書の知識内容を受け入れる以外には道がなかったからである。

いうまでもなく、洋学者たちは、日本人の知識の進歩に大きく貢献する国の先覚者として最も重要な学問の研究をしている人であるし、それも特に、医学や薬学の研究に従事している洋学者たちは、日本国民の生命を救うという、なによりも重要な人々であるのに、幕末の時代には、外国人排撃の思想が国民の間につよく湧き起り、いわゆる過激な攘夷論者たちの襲撃的になり、いつなん時暗殺の憂き目に会うかわからない立場に立たされた。外国の学問を研究すること自体が、外国人の味方をしているのだと誤解されたのだった。「外国人の学問や思想を翻訳して日本人のものにすること」が、国民のためにどんな意味をもつかということを、静かに考えてみれば、洋学者のいのちを狙うというような馬鹿げたことができないはずなのに、当時の日本人は、それがよく判断できないような、低い文化程度だったというほかはない。



『福翁自傳』

一八九八年（明治三十一年）七月一日から翌年の一八九九年二月十六日にかけて『時事新報』に六十七回にわたって連載された。日本の自伝文学の傑作といわれている。論吉が六十二歳の一八九七年秋ごろから、矢野由次郎に自伝を口述して筆記させたもの。内容は、時代的、社会的なものを背景として経歴を回想している。

福沢論吉は、当時代の洋学者たちがたえず感じざるをえなかった暗殺の危機感を、『福翁自傳』（明治三十二年六月）のなかでつぎのように追想している。

「例へば開國の初に横濱で露西亜人の斬られたことなどは唯その事変に驚くばかりで自分の身には何とも思はざりしに其後間もなく外人嫌ひの精神は俄に進歩して殺人の法が綿密になり、筋道が分り、区域が廣くなり、之に加ふるに政治上の

意味をも調査して萬延元年井伊大老の事変後は世上何となく殺氣を催して手塚律蔵東條礼蔵は洋学者なるが故にとて長州人に襲撃せられ、塙二郎は國学者として不臣なりとて何者かに首を斬られ江戸市中の唐物屋は外國品を賣買して國の損害するとして苦しめらるると云ふやうな風潮になつて來ました是れが即ち尊王攘夷の始りで……」(『福翁自伝』三六六頁)

このような世の中の雰圍氣は、

「凡そ維新前文久二、三年から維新後明治六、七年の頃まで十二、三年の間が最も物騒な世の中で私は東京に居て夜分は決して外出もせず余儀なく旅行するときは姓名を偽り荷物にも福澤と記さずコソコソして往來する其有様は欠落者(かけおちもの)が人目を忍び泥坊が逃げて廻るやうな風で誠に面白くない……」(同書三六七頁)

こんな風だったから、福沢諭吉は、三田の屋敷を新築したときにも、家の床(ゆか)をすこし高くして、押入れの中には揚げ板をつくって置き、おかしな奴に踏みこまれても、うまく逃げられるやうな工夫をしておいた、と書き記している。これではまるで刑事犯人の逃げかくれするのと変りはない。翻訳家が一般民衆の尊敬を集めている今日とは全く隔世の観がある。

世の中がまっ暗で、西洋文明の光りが小孔をもれてくるかすかな明りにしかみえなかつた封建時代にあつては、渡辺華山や高野長英などという蘭学者たちは、福沢諭吉程度

のくるしみでなく、大きな犠牲を払わされた。非攘夷論者高野長英は彼の関知しない無人島渡航事件の嫌疑をうけて捕吏に追いつめられて自殺し(嘉永三年)、航海術を学び平和論を唱えた蘭学者渡辺華山も、その洋学のために幕府の誤解をうけ、ついに自殺(天保十二年十月)に追いやられてしまった。この二人の蘭学者は、攘夷論が日本のためにならないことを主張したために幕府の怒りにふれて自殺に追いやられたのだ。彼等は二人とも、オランダ語の翻訳を通じて医学や航海術の知識を日本人に伝えてくれた文化の恩人だったので、このような犠牲になつたのであつた。彼等は、幕府や國民に鎖國や攘夷の非を悟らせ、開國の必要性を知らしめようとした真の意味の愛國者だつた。

この二人の蘭学者と同じようなけわしく困難な環境と戦いながら、今から二〇六年の昔、四年の歳月をかけて啓蒙生理学書『解体新書』(ターフル・アナトミヤ、四卷、一七七四)というオランダ語の人体解剖書の翻訳を完成した人々がある。杉田玄白、前野良沢、中川淳庵、桂川甫周の四人の蘭学者たちである。この翻訳書の果した医学上の役割の大きいことはいうまでもないが、それよりも重要なことは、前にのべた二人の蘭学者をふくめて、彼等が多くの門弟を育て、わが国の洋学思想の發達の基礎をつくつてくれたこと、それによつて彼等が日本文化の近代化のために大きな役割を果してくれたということである。

蘭学から英学へ

長崎にオランダの商館が置かれたのは一六〇九年の昔にさかのぼる。その時代から二百余年間、オランダは世界の海を牛耳^{ごうじ}っていたわけである。

その時代が過ぎた後は、英米がそれにとつて代るのであるが、それはほぼ一九世紀の初め頃から以後の時代であつて、この国際的な力が直接日本に大きな関係をもつてくるのは、一八五四年（安政元年）から一八六〇年（万延元年）を過ぎて、明治元年（一八六八）にいたる時代、つまり、

幕末から明治維新にさしかかる時代なのである。この一般国際情勢の変化に即応して、外国文化を吸収するのに必要な外国語は、オランダ語から英語の習得にきり変わらざるをえなくなつた。日本の洋学者たちは、いや応なしに、长年苦しんで覚えたオランダ語と、蘭学をすてて英語の習得一辺倒に、しかも急速にそれをなしとげて、時代の大転換に即応せねばならなかつた。このあわただしい変化の中で苦しんだ洋学者たちは福沢諭吉や神田孝平^{たかひら}をはじめとする多くの人々だつた。「蘭学」から「英学」への急角度の方向転換だつた。その苦しみは、われわれの想像もおよばないものだつた。福沢諭吉の述懐を聴いてみよう。――

「横濱から帰って私は足の疲れてはない實に落胆して仕舞た。是れはどうも仕方がない今まで数年の間死物狂ひになって和

蘭の書を読むことを勉強した、其勉強したものが今は何にもならない商賣人の看板を見て讀むことが出来ない左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと實に落胆して仕舞た、けれども決して落胆して居られる場合でない、……今我国は條約を結んで開けかかつて居る左すれば此後は英語が必要になるに違ひない洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない此後は英語を読むより外に仕方がないと横濱から帰つた翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を發してそれから以來は一切万事英語と覚悟を極めて……」（『福翁自伝』一六〇―一六一頁）

この記事は、福沢が江戸に出て来た翌年すなわち安政六年のことで、五国條約が發効になり横浜が新時代の脚光を浴びている時なので、福沢がそれを見物に出かけたときの思い出を語つたことばである。この記事からも察せられるように、オランダの国力が衰えをみせ、英米がそれにとつて代る交代の時期は、嘉永から安政に移る時代で、嘉永元年が一八四八年で、福沢のこの記事に當る安政六年といえれば、西曆でいえば一八五九年に相當する。だから、日本の歴史でいえば、およその見当で蘭英の交代の時期は、十九世紀の半ば頃だと考えてよい。すくなくとも、外国文化の影響力が日本の歴史を左右しはじめるおよその時代を、そんな見当で考えればよい、という意味である。

（『福翁自伝』のページは時事新報社版による。）

小説 訳 翻

ジョニー・リデルシリーズ

血まみれの ハレルヤ

フランク・ケーン
山下 諭一 訳



年は十八よりうえではないだろう。

みがきあげた銅のような色の髪を、短かくカットして、その髪が柔らかなうねりをみせている。なかば閉じられたまぶたのあいだからのぞいている眼は、深いブルーで、眼のしたにできた淡いブルーのくまが、眼の色をいつそうきわだたせていた。恰好のいい唇はふくらとして、小さな歯が白い。口のまわりや、頬のしたのほうに、青い色が気味わるく浮き出している。女は死んでいた。

ジョニー・リデルは、声には出さずになにかつぶやいて、かたわらに立っている灰色の髪の男のほうへ視線をうつした。

「自殺？」

年をとった男は、まるで髪の毛をひきぬくようにかきむしりながら、むりやりひきはなすように、女から眼をそらした。

「警察はそう言ってますよ」にがい言葉を吐き出すように、男は言った。「だけど、こいつは殺人です」男の眼は、涙をみせず燃えていた。ふとくく白い眉のしたで、男の眼は燃えあがっていた。「この子を殺したやつらをさがし出すなんて、そんなことはやりようがないと、警察はそう言うんです。わたしはね、それをあんたにやってもらいたいんだ」

リデルは、あごのわきのあたりを指先でかいた。「警察の言うのは間違いで、誰かがじっさいにこのひとを殺しておいて、それを自殺にみせかけたんだと、そうおっしゃるんですか？」

白髪の男はかぶりをふった。「いいや。この子は、ガレージを閉めきって、エンジンをかけたんです。しかしね、この子の

心は、それよりもずっと前に死んでたんですよ。この子がまだ生きているときに、この子の心をひき裂いたやつら、そいつらを見つめ出してほしいんだ。連中は、警察につかまりもしないで、この町にいます。わたしのために、そいつらを見つけて出してほしいんですよ」

「で、そいつらを見つけたら？」

男は肩をすくめてみせた。「そのときには、あなたの仕事は完了ということですね」男の熱っぽい眼が、リデルの顔をはなれ、死んだ女を見おろした。「わたしの仕事は、そこから始まるんですよ」

2

キャロンドレットのカールスン・アパートメントの前で、ジョニー・リデルはタクシーからおり、玄関のドアを押してはいっていった。リデルがたずねる部屋は、一階の奥のほうにある。ドアの前でたちどまって、リデルはノックをした。返事がないので、リデルは鍵穴に鍵をさしこみ、ドアをあけた。

リヴィング・ルームがひとつにベッドルームがふたつの、こじんまりしたアパートだ。なかにはいると、リデルはうしろ手にドアをしめ、キッチンにもベッドルームにも誰もいないのをたしかめた。部屋のまんなかにつつま立って、どこから手をつけようかと考えたとき、おもてのドアのきしみながらあく音がした。

リデルはショルダー・ホルスターから四五口径をぬき出して、待った。背の高い、赤毛の女がはいってきて、四五口径を眼にしたとたん、ドアのところで凍りついたようになった。女



の手が口もとへはねあがり、両腕でかかえていた食料品やなんかの包みが落ちて、中身が床に散らばった。

「ヒルダ・ジョンズだね？」リデルがきいた。

女はうなずいた。

リデルは、四五口径をホルスターにもどした。「驚かせておろかしたよ。おれはリデルっていうんだ。私立探偵だね。スージー・ラブランシエの父親が、スージーが死んだ事件を調べるのに、おれを雇ったんだよ」リデルはポケットに手をいれて、鍵をとり出し、それを手のひらのうえで二度三度ほおりあげてみせた。「るすだったんでね、スージーの鍵を使っただ」

赤毛の女は、口に押しあてていた手をおろして、大きく息をついた。「死ぬほどびっくりさせて、もう少しで女の子をひとり、殺してしまうところだったわよ」女は体をかがめて、散らばったものを集めはじめた。「で、ミスタ・ラブランシエは、まだこちらにいらっしゃるの？」

リデルはかぶりをふった。「駅まで送ってきたところだよ。いろいろ準備するのに、バトン・ルージュへ帰ったんだ」

赤毛の女はうなずいて、食料品をキッチンへ運び、テーブルにおいた。「スージーの死んだ事件を調べるのに、おとうさんがあなたを雇ったって言ったわね。どういうことなの？ スージーは間違いないで自殺したのよ」

リデルはうなずいた。「おやじさんが知りたがってるのは、その理由でね」

「なんにもしないで、そっとしておいたほうがいいんじゃないのかな」ヒルダは体をすぼめるようにして、ゆったりしたジャ

ケットを脱ぎ、それを椅子にかけた。「いまさらスージーに、なにがしてやれるっていうのよ」

「なんにもしてやれないだろうな。だけど、ちゃんとけりをつけておけば、誰か別の人間が、スージーの二の舞をやらかさずにはすむってことになるかもしれない」ポケットからタバコを一本ひっぱり出して、リデルはそれを唇のあいだへ押しこんだ。「スージーが、どんなたぐいのめんどうにまきこまれてたか、なにか心当たりがある？」

ヒルダはちよつと考えてから、くびをふつた。「スージーはね、あまりおしゃべりをしなかったのよ」窓のそばの椅子へ足を運んで、ヒルダは腰をおろし、恰好のいい長い脚を組んだ。

「スージーがなにかを気にやんでたのは知ってたけど、彼女、そのことを話し合いたくないみたいだったし、だからあたしも、無理にきこうとはしなかったわ」

リデルはヒルダの脚へ眼をやった。

「男のことでトラブルは？」

「自分でア・パートを借りて暮らしてるちよつときれいな女の子なら、誰にだって多少のことはあるんじゃないかしら。でも、それ以上のことはなかったでしょうね。何人かの男どもがいて、適当に言いよってるところかな」ヒルダは、そのことを考えてみるようなしぐさをみせてから、おもむろにかぶりをつつた。「だけど、スージーはしっかりしてたわ」

「みんな自分ではそう思ってるんだ。それがあつた日、ふと気づいてみると、とんでもない深みにはまりこんでいて、そこからぬけ出す方法は、ひとつしか思いつけないってことになる」リ



デルは部屋のなかをゆっくりと歩きまわり、おかれた品物をあれこれととりあげては、じつと見た。「家には金があつて、パト・ルージュにいればなんの不自由もないのに、そんな娘が、なんだってニューオーリンズへやってきて、ひとりで生きていこうとしたのかね？」

ヒルダは肩をすくめてみせた。「年がら年じゅう、親の足もとにいるっていう生活がいやになつたんじゃないのかしら。少しばかり、羽をのばしたくなつたんでしょ」

「たしかに、羽はのばしたわけだな。おれはね、さつき死体置場で見えたばかりなんだ。きみはスージーに会つてやつたかい？」

ヒルダの顔から、いくらか血の気がひいた。「スージーをみ

作者と作品について①

ミステリー、あるいは推理小説、探偵小説などと呼ばれる分野の作品は、ごくおおざっぱにいって三つの傾向にわかれます。ひとつは、一見不可解な事件を、名探偵がもつぱら推理力でときほぐしてみせるA謎とき型V、ふたつ目は、もつと現実的な事件を、探偵が現実的な行動で解決していくB行動型V、そして三番目が、小説のなかに一種のミステリアスな世界を作り出すCムード型Vともいうような感じのものです。

アメリカにはB行動型Vのミステリーがとくに多く、なかでも、ハメット、チャンドラー、ロス・マクドナルドとつづく作風の流れば、本格ハードボイルド派と呼ばれています。一九四〇年代の後半から、ハードボイルド・タッチの作品に、娯楽的な要素をたふりもりこんだ、いわば通俗ハードボイルドともいえる小説が数多く書かれるようになりました。この雑誌で紹介することになつたフランク・ケーンは、そのタイプの作家のひとつです。

つけたのは、あたしなのよ」ヒルダは椅子からたつて、キッチンへはいっていった。「お酒のむ？」肩ごしに、ヒルダはきいた。

「もしあったら、バーボンをもらおうか」リデルはソファのほうへ歩を運んで、沈みこんだ。

ウィスキーのびんと、グラスをふたつ、それに氷を入れた小さなボウルを持って、ヒルダはキッチンから出てきた。ソファの前の、小さなコーヒー・テーブルに、運んできたものを並べて、ヒルダはリデルのかたわらに腰をおろした。ふたつのグラスに、氷をほおりこみ、ヒルダはそれにバーボンをついた。

「ねえ」ヒルダが言った。「スージーのこと、誤解しないでください。彼女、いい子だったわ。遊ぶのは好きだったけど、でもいい子だったのよ」グラスのひとつを、ヒルダはリデルにさし出し、もうひとつを自分でとって、まるでそれをあたためるように、両方の手のひらでそっとはさんだ。「彼女はね、おとうさんが好きだったのよ。だからこそ、羽をのばすのに、ニューオーリンズへやってきたんだわ。おとうさんを傷つけたくなかったんだらうし、知られるのささいやだったんでしようね」

リデルはバーボンの匂いをかいで、それからひと口味わってみた。匂いと同じように、味もいいバーボンだ。「スージーがどんなトラブルにまきこまれてたか、なにか心当たりは？」

「さっき言ったでしょう。スージーはあまりおしゃべりをしなかつたのよ」

リデルはうなずいた。「スージーに言いよつた男どもが、何



人かいたって言ったね。特別なのはいなかったのかい？ スージーが、とくに気に入っているように見えたのは？」

ヒルダは、バーボンをひと口のんでから、グラスを静かにゆすって、グラスのなかのバーボンを氷のうえにすべらせた。

「とくにってのはいなかったわね。しいていえば、ジミー・ウォールデンかしら」

「ジミー・ウォールデンってのは？」

ヒルダは肩をすくめ、顔をちよつとしかめてみせた。「つまらない男よ。ロティの店で、ホットなピアノをひいてるわ。スージーはブギウギが好きで、そこへよく聴きにいったの。それでジミーも、ほかの男どもとおなじように、スージーを追いかけはじめただけど」

「スージーのほうは、気に入ってたのか？」

「スージーが気に入ってたのは、ジミーのピアノよ。ジミーの部屋やロティの店へ、よくいってたわ。でも、深刻なことにはなにもなかつたんじゃないかな」

「だけど、ほかの男よりはそいつによく会ってたんだろ？」

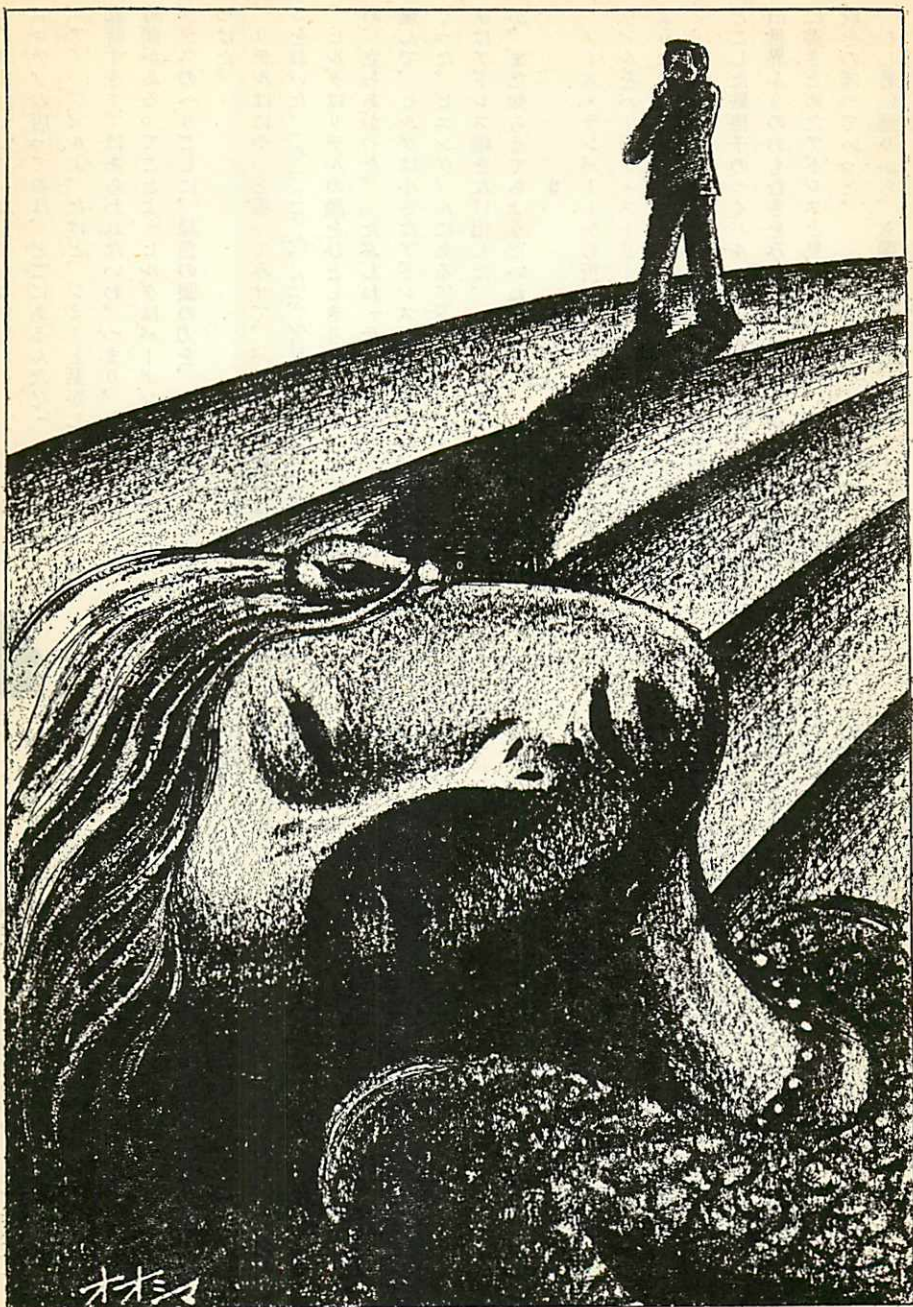
「回数はずっと多かつたわね」ヒルダはバーボンを飲みほして、新しくついで。「でも、スージーが誰か男のことで自殺したなんて考えたら、とんでもない見当違いよ。男なんて、スージーには、どうってことでもなかつたんだから」

「きみになにか、考えてることがあるかい？」

ヒルダはグラスから眼をあげた。「スージーのこと？」

リデルはうなずいた。

ヒルダは、またグラスに視線を落として、グラスの中身をゆ



「なんにもないわ」

「ロティの店ってのは、どこにあるんだ？」

「アイバヴィルよ。だけど、ジミーと話したいんなら、彼、九時すぎまではあらわれないわ。つまり、あなたにはたっぶり時間があるってことよ」ヒルダはパーボンをひと口流しこみ、グラスのへりごしに、緑色の眼の力を、そっくりリデルになげつけた。

リデルはにやっと笑ってみせて、パーボンを飲みほし、グラスをおいた。「やっこさん、たぶん自分の部屋にいるんだろ？」ヒルダはリデルの顔をひとしきりじっとみつめて、肩をすくめ、立ちあがった。「たぶんね」テレフォン・テーブルに足を運んで、ヒルダは小さなアドレス帳をとりあげ、そのページをくつた。ビエンヴィルにあるアドレスをリデルに教えて、ヒルダはアドレス帳をなげ出した。「どんなふうにかたをつけるのか、また知らせてちょうだいね」

3

ノース・ランバートから折れて、ジョニー・リデルはビエンヴィルをパーボン・ストリートのほうにむかっていた。同じようなこげ茶色の石の家が、何軒も並んでいるなかの一軒の前で、リデルは足をとめた。そのブロックは、こまかな細工をほどこした鉄格子のつくバルコニーが、ずつつづいて、それが旧世界ふうのおもむきをみせている。リデルは、古い封筒の裏に書きとめたアドレスと見くらべてから、三段の古びた石の階段をのぼっていた。

むし暑い通りから、玄関へはいると、ほっとするような涼し



さだった。なにかの底のような、薄暗がりのなかにつつ立って、リデルは鼻のしたの汗を手の甲でぬぐい、壁に画鋏でとめた厚紙の、タイプで打った名前の列に眼をやった。ジェームズ・ウオールデンの名前のしたに、リデルは親指の爪を押しつけ、その部屋が2Dであることをたしかめた。

何十年も使い古された階段は、すっかりくたびれ、廊下には、追いつくことのできない古びた匂いがしみついている。リデルは階段を二階へのぼり、おもてのほうのつきあたりには、2Dの部屋をみつけた。

リデルの最初のノックに、返事はなかった。少しあいだをおいてから、リデルはもう一度ドアをたたいた。ドアのむこう側で、なにかの動く気配がかすかにあった。リデルはノブに手をやって、音をたてて動かした。

「誰だい？」

「あける。ちよつと話をしたいんだ」うなるように、リデルは言った。

「誰なんだ？ なんの用事だね？」部屋のなかの男がきいた。

「おれの名前はリデル。捜査してるもんだ。スージー・ラブランシエのことで話したい。ドアをあけるか、それともおれのほうから、蹴破ってはいっていいこうか？」

なかの男は、しばらくためらっているようだったが、やがて鍵のまわる音がして、きしみながらドアがあいた。痩せた男が、両足を開き、両手を腰にあてて立っていた。「どういうことなんだ？」男がきいた。

リデルは一方の手を男の胸に押しつけ、男を押しやって、部

屋にふみこみ、うしろ手に荒っぽくドアを閉めた。

「ジミー・ウォールデンだな？」リデルは部屋のなかを見まわして、エキゾチックな手彫りの胸像のコレクションや、何枚かの立休派の絵、バルコニーに面した窓ぎわの、部屋のわりには大きすぎるベビー・グランド・ピアノ、それに床に散らばったクッションなどを眼にとめた。そしてリデルの眼は、すばやく男の顔にもどった。「そうなんだな？」

部屋の男は、腹立たしさをなんとかおもてに出そうとしたようだが、それがうまくいったとは、自分でも思えなかったらしい。どう見ても三十前だが、放埒な生活のしみが、その顔へすでにあらわれている。ひたいは広く、そこへ髪の毛がひとかたまり、一方の眼へとどくくらいに垂れていた。残りの長い髪の毛は、うしろのほうへびったりなでつけられている。唇の薄っぺらな口もとは、顔のそこだけなにかをちよつと塗りつけたように濡れていて、おとがいはよわよわしく、うしろへひっこんでいた。「おれはジミー・ウォールデンで、ここはおれの部屋だ。あなたには、ここへふみこんでくる権利なんかないだよ」声を荒げて、男は言った。「どういうことなんだね？」

「スージー・ラプランシェだ。スージー・ラプランシェを知ってるな？」

ウォールデンの視線がゆれ、いったん足もとに落ちて、それから部屋のなかを、せわしく見まわした。「ああ、スージーなら知ってるよ。友だからね」

「最後に会ったのはいつだ？」

ウォールデンの視線は、まだリデルの眼を避けている。「知



らん。ゆうべだったか、その前の晩だったか。おれみたいに、夜の仕事を持っていると、いつ何があったなことを思い出すのはいへんね」ひとまわりしたウォールデンの眼が、やつとリデルの顔にもどった。「あの子があんたにどんな話をして、あんたがここへふみこんでくることになったのか、おれにはさっぱりわからないけど——」

「あの子はなんにも話してないさ。スージーは死んだんだ」

小ぶりのあごから力がぬけて、ウォールデンの口がぼっかり開いた。無意識のようなしぐさで、ウォールデンは手をあげ、眼のあたりまで垂れた髪の毛をかきあげた。「死んだ？」

「そのことで、おまえさんはどんなことを知ってるんだ、ウォールデン？」

「おれが？」ウォールデンはかぶりをふって、けんめいに口もとを落ちつかせようとした。「おれはなんにも知らないよ。ほんとうだ」ほんのしばらく、ウォールデンはリデルの顔をじつとみつめた。「おれがなにか関係あるって、そんなふうに見えるんじゃないんだろうな」

リデルはポケットからタバコのバックをとり出して、さし出した。だがウォールデンはかぶりをふった。

「おれがみつげ出したいと思ってるのは、そのところなんだがね」タバコを一本、リデルは唇のはしへ押しこんで、そのままこばをついだ。タバコがゆれた。「スージーのことでおまえさんが知ってることを、なにもかもしゃべってもらおうか。ひよっとすると、スージーが死んだことにひっかかりのある話が出てくるかもしれないから」

(つづく)

脱線する愉しみ

新庄哲夫

この春、ひとしぶりに探偵小説の翻訳をやらされた。探偵小説とは古風な、などと思わないでいただきたい。実は、そう呼んだ方がびつたりの新作だったのだから。

お前は随分ミステリーをやっているだろうと、よく友人たちにいわれる。ところが存外、それほど実績はない。わずか一点しか手掛けていないのである。それもひと昔かふた昔前のことなので、出版社から話があったときは、技術上の不安がないでもなかった。

正直に言えば、つい愉しきにつられて一気に仕上げた。いまから考えてみると、翻訳の作業それ自体よりも、どうやらウォーミング・アップが愉しくてならなかったらしい。

舞台は現在のロンドンで、主人公はシャーロック・ホームズに傾倒する文明嫌いの、どちらかといえば一徹者なのだが、何とな

く調子はずれのところがある初老の役者。連続殺人事件に巻きこまれていく経緯を、ホームズのバロディー風に描いている。

こんな作品だから当然、ホームズ物の知識がないといけない。中学時代にもどって『緋色の研究』や『四つの署名』を読みふけるうちに、ロンドン新旧の地図や事物誌をあさり歩く次第と相成った。居ながらにして、ヴィクトリア朝時代のロンドンと二十世紀のロンドンをせわしなく往ったり来たり。

宮仕えの身の上でこんな脱線をしようものなら、さしずめお払い箱か配転の憂き目を見るところだろう。もともと、翻訳は労働ばかり多くして功は少ない。脱線する愉しみくらいが、精一杯の役得である。もっとも、脱線しすぎると確実に足が出てしま

う。この作品には、スポーツ・テイング・クラブというのが出てくる。賭博場のことである。一夕、ロンドン生活が長い友人に講釈を頼んだ。牛飲馬食されたあげく、ご丁寧に車でお送りしなければならなかった。

(翻訳家)

漢文学習のすすめ

佐藤 喬

翻訳、というといつも思い出すのは、永井荷風の『小説作法』中の次の言葉である。

「……漢文欧文そのいずれかを知らざれば世に立ちがたし。両方とも出来れば虎に翼あるが如し。……在来の国語存するの限り文学に志すものは歐洲語と併せて漢文の素養をつくりたまへ。翻訳なんぞする時どれほど人より上手にやれるか物はためしぞかし。」

さすがに『珊瑚集』の名訳者、荷風ならではの名言である。永年文章の修業に骨身を削り、翻訳家としても偉大な先達の一人であった荷風の、これはその体験から得た実感、というよりもむしろ信念だったのであろう。

衆知の如く、荷風は仏文、英文に堪能であると同時に、漢学にも深い造詣を有していた。鵬外や漱石などと同じく、彼もまた「翼もつ虎」の一人だったのである。

明治・大正から昭和にかけてのこれらの文人たちが苦勞して作り上げた文体、すなわち欧文脈と漢文脈とを打って一丸とした「翻訳文スタイル」が、現代日本語の書きことばの、依然たる主底流をなしている、と考えられる。それは今日の作家たちや、また著名な訳者たちの文章の、語彙、リズム等を、少し注意ぶかく調べてみれば、すぐわかることである。

これから翻訳をやろうという若い方々におすすぬめしたい。外国語の勉強はもちろんであるが、それと併せて、漢文の古典を学びたまえ。白文でなくてもよい。書きくだし文でいいから、『文章軌範』『唐宋八家文』、あるいは江戸時代の日本の漢学者や明治初期の文人の書いたものを、朗読するくせをつけることである。そういう不断のけいこが、諸君の訳文を、ピシツとしまりのある、格調高いものにするであろう。「漢文なんて、今どきそんなカビのはえたものを……」と思うかも知れないが、一流の翻訳者になりたいのなら、古いものをバカにしてはいけない。「物はためし」である。

(慶応大学教授・英文学)

「分るかな?」

加藤恭平

翻訳の苦勞談や体験談を書けと言われ、手軽に引き受けたものの、愚痴にならず我慢にならずそんな話を書こうとすると、それがまた一苦勞になりそうである。

そもそも「翻訳」という言葉を翻訳するど、「苦勞」という語になるのではないかと思うほど、翻訳に苦勞はつきものであるが、戯曲の翻訳の多い私の場合、少しでも台詞の「翻訳臭」を消すことに一番苦勞する。もちろん、登場人物も地名もカタカナ、芝居を観に来てくれるお客さんも、はじめから「翻訳劇」を視る覚悟(?)は出来てゐるわけで、ある程度の「臭い」は致し方ないかも知れない。それに、明治以来の翻訳調にすっかり飼いならされた結果、逆にその「臭い」をありがたがる向きもあるし、「愛しているわ」などという、昔はなかつたはずの日本語も極く普通に使われるようになるほど、「臭い」に慣れてしまった面

もある。

しかし、原文がすぐに思い浮かべられるような台詞では、やはりお客さんの耳障りになるし、「聞いて分ること」を絶対条件とする戯曲の場合、英語としてはどんなに洒落た表現でも、そのまま訳すわけには行かず、思い切つて変えてしまうこともままある。結局は何処まで原文そのものを生かし、何処から原文を離れるかの問題で、近頃のテレビCMではないが、「分るかな?」分らねえだろうな」と思つたら、もう原文からは離れなければならない。ところが、そこにまた問題があり、なまじ(?)英語の分る人は、「あそこは原文では何んて言っているの?」などと、さも、原文のニュアンスを生かしていないと言いたげな顔をすするし、「やはり難かしいね、この作品は」と嫌味たっぷりに同情してくれることもある。むしろ、英語には無縁の人が、こちらの作り変えた台詞をとらえて、「さすがにイギリスの作家は気の利いたことを言いますね」などと、「原作」をほめてくれたりする。戯曲の翻訳の苦勞が報われるのは、そんな時である。(共立女子大助教授)

原著者ワイルド没後七十五周年記念出版、と銘打って刊行中の本全集の、これは第一回配本である。ルーパート・ハート・デイヴィスの周到な編集になる「ワイルド書簡集」（一九六二）の翻訳は、長らく待たれていたところであつたが、それがこのたび、昨年設立された「日本ワイルド協会」会長たる西村氏の手により、本全集中の二巻本（第九巻、第十巻）として実現しつつあることは、よろこばしい限りである。残りの第十巻の、すみやかな配本を期待したいと思う。

この第九巻は、本文は二六〇ページで、それに二〇ページの訳注と、二〇ページの解説と、さらに四ページの解説とが付いている。まことに至れりつくせりのていねいな訳書といえよう。なかならず、本書の圧巻ともいふべき特色は、「訳注」の部分にある。

本を手にする時、まず「あとがき」を見、さらに、本文を読む前に「注」に目を通す、という人は少くない。そのような「注ファーン」または「注マニア」にとつて、本書は

まさに見のがすことのできない天下の一奇書といえるであろう。

とにかく、個性的というか、わがままというか、こんな奔放（一）な訳注ぶりもめずらしい。一例をあげれば、ダンテの引用に対する注の中で「神曲」の英訳者ド、ロシー・セイヤーズの名を引くと、「余談ながら」とことわつて、セイヤーズ女史の推理

「余談ながら」の脚注がおもしろい

『オスカーワイルド全集』第九巻
出帆社刊 二五〇〇円

作家としての作風に関する訳者西村氏の感想を、六行にわたつて述べる、といった具合である。ヴェルレーヌの名が出ると、ページ半にわたつてワイルドとヴェルレーヌとを比較したあげく、イギリスのタバコとフランスのタバコはどっちがうまいか、という話に脱線する。ホモについての注は、二ページ以上に及び、微に入り細をうがつ

具体的なホモ行為の解説があつて、これだけで独立したホモ論になつてゐる。

その他、「いつの世でも子供ものは低劣で道徳的であればあるほど潜在的ベスト・アンド・ロングスト・セラーである」だの、「どこでも教授はたいいばかである」だの、「ジッドはいかにもまじめくさつたうそつき、かたときも油断のならぬ誠実ぶつた詐欺師であつた。だからこそノーベル文学賞というようなものを授けられたのである」だの、「童話作家と教育評論家とは、どうしてあんなに人相がわるいのだろう」といった愉快な訳者の独語がやたらに出てくる。これはもう既成の概念による訳注などというものではない。注のていさいを借りた新しいエッセイともいふべきものであらう。

翻訳における注のあり方、について、あらためて考えさせられるところの多い、風変りな訳書、といえる。（T・K・S）

西村孝次訳、一九七六年一月十五日発行
四一二ページ（書簡Ⅱ、完本・獄中記）

このシリーズは、植民地時代から今日に至るまでの、編集者が必読の名著と考えたものを厳選したものである。

アメリカは建国二百年の行事を展開しているが、一般の日本人の中には、たった二百年か、わが国は二千数百年の昔にさかのぼる、と考える人がいるかもしれない。これはたわいもない無邪気な考え方である。まずアメリカは民主主義の国であるということを考えなければならぬ。そしてその民主主義は、歴史的にふり返ってみれば、一六二〇年にメイフラワー号が清教徒団を乗せてニューイングランドの地に上陸したとき、すべての者に施政者を選ぶための選挙権があること、すべての者が法律の制定にあずかる権利を持つこと、新しく渡来する者には市民権を許可することなどを定めた事実をわれわれは思い出すべきである。個人の自由を尊重する観念がアメリカ民主主義の基礎であるのが、すでにこのとき定められているのである。

一七七一年、トマス・ジェファソンが独立宣言文起草して七月四日に受諾さ

れ、一七七六年独立宣言が調印されたときと、一七八七年に憲法が公布されたときに自由の鐘が鳴らされ、さらにニューヨーク湾頭には独立百年祭を祝ってフランス国民から贈られた自由の女神が建てられた。そして一八六一年、六五年の大統領エブラム・リンカーンは、アメリカ政府は「人民の、人民による、人民のため」のものである

建国200年というけれど……祭りの後で

『アメリカ古典文庫23巻』
研究社刊 各巻二八〇〇円

るといふ名言を残した。

アメリカの事情は日本には断片的に入ってきて来たが、本格的にくわしく入ってきたのは、第二次大戦後、アメリカ軍に占領されて以来のことである。そしてアメリカによってわが国の民主化も本格化したのである。二百年前の日本国を考えると、われわれに民主主義というものがあつたとい

うのか。それは全く夢想だにできなかったとはなかったか。わが民権運動の台頭と社会がこれを受け入れる風潮を生んだ経路を考えると、すでに二百年以前から民主主義の土壌が、アメリカにはできていたことをわれわれは考えなければならぬ。

しかもこのアメリカの民主主義を知るためには、アメリカ国民の指標となり指導の原理を植えた先人たちの、名著による遺産を読むべきである。このシリーズはこれにこたえる名著を提供している。政治、社会、思想、文化の各方面に及ぶ名著の翻訳による紹介だが、断片的であるのは残念だとはいえ、まとものシリーズなら百巻でも足りないだろう。われわれはこのシリーズからエッセンスを汲み取り、大まかなながらもアメリカという国と人間と風土を見るには、画期的な貴重な出版である。特に本シリーズ中、「日本人論」はわれわれに深く反省させるものがあり、否応なしに持続しなければならぬ日米関係を考えるとき、このシリーズは座右に備えるべきものである。

(S)

窮屈なニッポン

過剰人口
封建性その
封鎖友情



Mr. Martin Davidson

国籍/アメリカ

フリー記者 (GMN, N

EAと契約)

40歳

滞日年数4年

【インタビュー・訳=大井恭子】
【構成=杉浦洋一】

国際間の交流の最前線で活躍する人々の群にジャーナリストがいる。日本にいる外人ジャーナリストたちはこの国をどのように理解して、日々のニュースを全世界に打電しているのだろうか。彼らの眼を通して結ばれる日本(人)像を紹介してみたい。

デビッドソン氏は、日本のロッキード事件に関して、「日本株式会社」の金権構造は「世界で最も封建的な資本主義社会」を支えてきたが、この事件によっても日本の金権的な政治風土に変化はないだろう、と厳しく分析した記事を書き、イギリスの高級紙「The Guardian」(八月十七日付)に大きくその記事がとり上げられた。この時期は田中逮捕の直後にあたり、海外のジャーナリズムに日本の民主主義の健全さを評価する気運が高かっただけに、デビッドソン氏の「冷静」な記事がよけい目についた。で、氏の日本観を聞いてみよう。

デビッドソン氏(以下D) 日本の最大でかつすべての問題の源は、人口に対する居住地の割合がとて低低いということだ。だから、社会のあらゆる方面で窮屈になるし「自由」になれる余地がない。人と異なるうとしてもできにくいんですね。つまり、日本社会は画一性と厳格さを要求することになるわけです。

日本のかかえている問題というのは、知的なこととか歴史的なこととか政治的

なこととか、そういうことではなくて、日本のこのどうしようもない不幸な土地の狭さと、その膨大な人口なんです。

(以下、氏によれば将来は国境という概念が徐々に消滅し、日本はアジア大陸の一部とソ連の一部—シベリア—と一緒にあって新しい国家が作られるだろう。そうなれば、土地の狭さに帰因するすべての問題は、このような international country の出現によって解決されるだろう、という楽観論が述べられた。)

ヨーロッパの人々は、日本の土地の狭さはほんとにひどいものだと思っています。すべての問題はそこに起因しているんですからね。私は例の記事で、日本は“The most feudal capitalist society”だと書きましたが、土地の狭さによってもたらされる厳格さが、真に“自由”な社会の到来を妨げているのだと思いますよ。私は日本人が気の毒に思う。

—それは、同情して下さってありがとうございます。それでは、現実的に私たちがそうした社会を良くするような、どんなことができると思いますか。

D 解決策はあまりないが、日本はゆくりと改善されつつあるとはいえます。

—あなたはこの記事の中で、ロッキード事件によっても日本の社会は良くなると思わないと書いていましたか。

D あれですか、あれは間違いですね。今はもう少し楽観的です。三木さんが賢くしているから。でも結局のところ自民党は分裂すると思います。

—ほんとうにそう思いますか。

D いつも間違いはあるものです。記事を書いても、読者に読まれる頃には真実でなくなっているかもしれない。

—日本の民主主義は健全でしょうか。

D たとえばアメリカにも金権の体質はあるし政治献金もある。“dollar speaks” という言葉もあります。ただど日本の方がひどいですね。

—そうした体質はいつか直るとお考えになりますか。

D いいえそうは思いません。山口県の知事選挙で自民党が勝ったでしょう。いつも同じみたくですね。

—日本人はつき合いやすいですか。

D 一番の問題は親しすぎることです。

—私はその逆で、日本人は恥かしがり屋だとばかり思っていましたか。

D 皆とは言いませんが、外国人と仲良くなりたがる人がいますよ。私にとってはそういう人々を take advantage するのが容易です。たとえば、私が川端康成について何か書こうとすると、日本人から助けを得るのはとても簡単です。皆気軽に熱心に手伝ってくれます。

日本人にとって一番の問題は……私、いやな思い出があります。

—よろしかったら話してくださいませんか。

D いやです。とても悲しい経験です。日本にいる外国人は、いつかはこう思うのじゃないか——日本の友人もいなければ、外国人同士の友をもつていなければならぬ、と。というのも、私たちは、日本人が私たちともとうとする友情の理由や、その基盤——何の上に友情が成立しているのか——そういうことがよくわからぬからです。

—どうもありがとうございました。



『翻訳の世界』に

寄せることば

高橋 健二 (日本翻訳家協会会長
日本芸術院会員 独文学)

ゲーテが世界文学を提唱してから、百五十年ほどたった。その間、世界諸民族の文学が交流し刺激し合つて、今まさに世界文学は百花りようらの靨を呈している。文学だけでなく、ゲーテはスエズ運河やパナマ運河の開通をとくに予言し、科学技術の交流に大きな期待を寄せていた。それもまた今日すばらしい結実を示している。

そういう交流は結局、翻訳によって可能になったのである。各国の文化的成果が翻訳されることによつて初めてはなばなしい開花

が、文化のあらゆる分野において達成されたのである。最も独創的だったゲーテ自身、英仏伊西の各国はもとより、アラビヤ、インド、中国などの翻訳をよく読み、人にも勧めた。そしてみずからたくさん訳した。天才だから翻訳はしないというような態度はとらなかつた。

それにゲーテは「外国語を知らないものは、自国語についても何も知らない」と言っているほど、自国語のためにも外国語の習得を重んじた。だが、外国語の著作は翻訳され

て、ほんとに自分のものとなり、ひとのものになる。読んでおぼえただけでは、外国語はほんとに身につかない。自国語に書いてみてはじめて正確に消化され、また一般の役にも

立つ。

かれこれ考え合わせ、よい翻訳を促進する企ては、まことに意義深いことであって、成果をあげられることを望んでやまない。



翻訳家の進出に期待

佐藤亮一（日本翻訳家協会副会長、共立女子大学教授、国際翻訳賞審査委員）

最近、世界の翻訳界の著しい現象は、各国の翻訳組織体の活動が活発化の一途をたどっていることである。これは、文化界の国際交流をはじめ、産業界、科学技術界のめざましい発展が国際交流と密接に関連をもつゆえの、当然の勢いである。そしてこれに参加するのが翻訳者である。

翻訳作業の重要性を認めたユネスコ本部

は、翻訳者の世界組織、国際翻訳家連盟 (FIT)

＝ Fédération Internationale des Traduc-

tions) を、ユネスコ加盟援助団体のBクラスからAクラスの地位に引き上げた（一昨年）。さらにユネスコ本部は今秋の総会で翻訳者の社会的、実質的地位に関する保障勧告を決議、各国に対して勧告文が発せられる予定である。翻訳者の地位の確立が予想され、各国の翻訳に従事する人々への朗報である。

これまで日本で翻訳というと、外国文学の翻訳出版の意味が大きく、学術、技術、実務などの専門書の翻訳が比較的少なかったが、

しかし現在はそうでなくなつた。一九七三年夏、西ドイツのシュツットガルトで開かれた第六回国際翻訳家連盟総会に出席して、各国の翻訳界がいかに現実の社会の進展と要請にこたえようと努力しているかを私は知つた。しかも、多数国語をあやつる翻訳者が、いかに貴重な存在であるかを改めて知らされた。

しかし、欧米の翻訳者の不満は、作家と比較して社会的地位と収入の点である。事実、現在各国の翻訳家協会の役員とメンバーの多くは、大学の教授、講師、またはごく限られた実績のある人々で、特にこれは文学の分野で多い。日本でもこれは言い得ることである。アメリカの著名な翻訳家が「文明は翻訳によつて生きるのだ」と言つたが、それだけの報いは受けていないのが現状だ。しかし各界を通じて今日は国際交流の時代であり、翻訳作業がぜひとも必要なものとして求められており、この情勢はますます重要なものとなる。オランダ・アムステルダム市近郊デルフト市にある「欧州翻訳情報機関Ⅱ一九六〇年創立Ⅱ」には世界十八カ国が加盟して、科学技術の翻訳情報を交換し、これを欧州経済協

力開発機構が協力している。また、アムステルダム大学付属翻訳・通訳研修所は、実際に役立つ人間を養成している。

時代の要請は次第に大学の講座にも翻訳を取り入れつつあり、アメリカではすでにジョージア大学とニューヨーク大学に独立した「翻訳セミナー」があり、日本でも最近各大学で翻訳について講義する教授たちがふえて

いる。

翻訳作業の重要さにかんがみて、スエーデンのナットホースト財団が世界の翻訳賞を制定、三年めごとに各国の最優秀な翻訳者を表彰しており、一昨年夏わが日本翻訳家協会会長高橋健二博士が、第二回の受賞者に選ばれたことは、日本の翻訳界の水準の高さを世界に示したものであつた。

わが国の翻訳に対する関心が必要度に応じて高まり、翻訳家をめざす研究者が増大しつつあるとき、大学翻訳センターで「翻訳の世界」誌を刊行するに至つたことは、今後翻訳家をめざす人々のために大きく貢献するであらう。

執筆者紹介

安立恭彦 大9生、東京外国語学校英語部卒、東京外語大講師、共立女子大助教、日本翻訳家協会評議員、俳人協会会員。

石川照男 昭10生、東京教育大学理学部生物学科卒、青山学院中等部教師。

江原信郎 昭18生、東大大学院産業機械工学卒、工学博士、日立製作所研究所在勤。

小野二郎 昭4生、東京大学教養学部教養学科イギリス科卒、明大文学部教授、著書『ユートピアの論理』。

佐藤喬 (米文学) 大14生、東京教育大学英文科卒、ミシガン大学留学、慶応大学教授、マークトウエン『地獄のペン』。

佐藤亮一 (英米文学) 明41生、慶大卒、共立女子大教授、ペンクラブ、日本翻訳家協会、アメリカ文学会員、リンドバーグ『翼よあれがバリの灯だ』。

志村正雄 (米文学) 昭4生、東京外語大卒、ニューヨーク大学大学院修了、外語大教授、共著書『ノベルとロマンス』、訳書『ジョンバース』『旅路の果て』。

白石正義 (翻訳家) 大3生、東京高等工芸学校金属工芸科卒。

新庄哲夫 (翻訳家) 大10生、青学卒、ペンクラブ会員、オーウェル『一九八四年』。

神宮輝夫 (児童文学者) 昭7生、早大卒、青学大教授、児童文学者協会、児童文学会員、『世界児童文学案内』。

高橋健二 (独文学) 明35生、東大独文卒、芸術院会員、ペンクラブ理事、日本翻訳家協会会長、ゲーテ『若きウエテルの悩み』。

武富紀雄 昭5生、早大卒、日大専任講師、法政大学、日本翻訳専門学院講師、日本翻訳家協会事務局長、ペンクラブ、日本文芸家協会会員、『ギネス世界記録事典』。

龍口直太郎 (米文学) 明36生、東京外語卒、早大名誉教授、ペンクラブ、翻訳家協会会員、カポージェイ『冷血』。

出口保夫 (英文学) 昭4生、早大大学院修了。早大教授、英、ロマン派学会副会長、日本翻訳家協会理事、『キーツ全詩集』。

成田成寿 (英米文学) 明40生、東京文理大卒、東京教育大名譽教授、共立女子大教授、日英協会理事、『D・H・ロレンス訳詩集』。

新倉俊一 (英米文学) 昭5生、慶大卒、明学大文学部教授、エドワード・リア『ノ

ンセンスの贈り物』『エミリー・ディケンソン詩集』、『アメリカ詩論—同一性の詩』。

山下論一 昭9生、早大英文科中退、日本翻訳専門学院講師、作家、推理小説翻訳家、ピーター・バーン『ビッグフット』。

八木敏雄 (米文学) 昭5生、東京外語大卒、成城大文芸学部助教授、『エドガー・アラン・ポー研究—破戒と創造』、ポー著黄金虫・黒猫・アッシュヤー家の崩壊その他。

吉武吉孝 (英米文学) 明33生、東北大卒、武蔵野女子大教授、英学史学会会長、翻訳家協会副会長、『近代文学の中の西欧』。

加藤恭平 (英米文学) 昭11生、学習院大学大学院卒、共立女子大助教、『ラティガン戯曲集』、『ノエル・カワード戯曲集』。

Z・ゴリアン 一九〇一年ユーゴスラビアに生れる。詩人、翻訳家、水彩画家。一九六三年、国際翻訳家連盟副会長に選ばれる。後、国際翻訳賞審査委員長、川端康成『伊豆の踊り子』、『千羽鶴』などの翻訳もある。長詩『ヒロシマ』は有名。佐藤亮一氏と長年の友人であったが去る六月二十五日死去。

最新刊!!

添削式

自修和文英訳

篠田義明 定価九六〇円 B5判一二八頁

課題文に対する生の英訳例を細部にわたって懇切丁寧に添削、詳細な解説と共に模範訳を導く。和製英語の排除、適切な用語と語法、構文の指導により、日本人の陥りやすい盲点をつく。ほかに、永年の教育経験に基づき、冠詞・助動詞・前置詞の用法などが簡潔明瞭に解説されている。

翻訳道場

岡地 栄 / 定価一、二〇〇円 2色刷 図面入り
英文を徹底的に読む作業を展開した待望の名著

和英電気活用辞典

岡地 栄・高橋昭男、他 定価一、六〇〇円
電気回りの要語活用例を米国最新文献より集成

和英必須活用辞典

小林一未 / 定価九六〇円 言葉と言葉のまわり
を徹底研究、頻出語20語を和見出しした決定版

和英をば発想辞典

岡地 栄 / 定価一、〇〇〇円 和文英訳の最大の難
点、ことばのつなぎを解明した画期的新研究!!

英和科学複合口語辞典

小柳修爾 / 定価一、〇〇〇円 医薬を含む科学技術
辞典に、新語づくり、解釈の手引き、商品名に!!

インタープレス 東京都文京区大塚3-3-1 新茗溪ビル
TEL 03 (945) 1091 (代)

特集

ロッキード事件の茶番劇

海外交流に役立つ新実践誌

月刊国際コミュニケーション

11月号全国書店で好評発売中!! 480円 (毎月10日発売)

マスコミの報道姿背と
罪意識なき日本の土壌

山本七平 A・ゴシユコフ
松本道弘

國弘と語る

アメリカにおける日本語教育

国際時事ミニだより

国際ビジネスの心得

デイベート道場

シリーズ ● 国際行動学「脱ぐ」……………以志 祐
● 新・お国事情 ― ニュージールランド ―
● ミーコのアメリカ留学奮闘記…小玉美恵子

連載 ● 燃える第三世界……………室 靖
● 小さくても強く

連載 ● 小村寿太郎と日露講和……………金山宣夫

● 翻訳実践セミナー

● 翻訳雑感……………村田孝四郎

● 契約書泣き笑い……………門司英夫

ゾディアック

〒160 東京都新宿区
西新宿6-22-8-503
☎ (342) 3740・0510

人材開発の 座標軸として機能します

水を得た魚のように——人は自分にふさわしい環境に会ったとき、実にアクティブになります。また人は、そうしためぐり合いをつねに求めます。産業社会においても、激動期から安定成長期へと時代がうねる中で、人材の有効活用に全智全能を傾ける動きが支配しつつあります。これは「人材の適性配置」ということ。つまり、ここに人と企業との有効な出会いがはじまります。

日本リクルートセンターは、適材適所、効果的人材開発のためのさまざまな活動をすすめています。マスコミュニケーションの立場からは、広告、PR、あるいは出版活動。人事教育の立場からは、適性・能力の測定、各種教育プログラムを開発するなど、その領域は広範をかかれています。

人と企業のかかわる分野で、「有効な出会い」を促進し、座標軸として機能する。またリクルーティンクのダイベロップメントとして、さらなる開拓をすすめる——それが日本リクルートセンターの願いです。

本社／東京都港区西新橋一〇一〇二

☎165 ☎(03)五〇八一九二二(大代)

事業所／支社・大阪、名古屋

営業所・札幌、仙台、北関東、千葉、横浜、静岡、京都、神戸、岡山、広島、福岡


日本リクルートセンター



今、あなたに翻訳家への道が開かれています

多読・速読による本格的 英語力養成

あなたはこれまで何冊の英文テキストを読み通しましたか？ 辞書をひくおっくうさから、つい途中で放り出してしまったのではありませんか？ 言うまでもないことですが、翻訳は英語力そのものがなければどうにも手が出せません。そのためには、何よりもまず、1行でも多くの英文を読むことです。そこで当センターの講座では辞書を引かずに多読できるようなテキストを構成しました。毎月20ページ程の英文に詳細な単語解説を付記し、いつでも、どこでも、気軽に英文を読むことができます。

毎月3回テキストが届きます

いつでも、どこでも学習できる通信教育—しかし1年間自分でスケジュールを調整しながらの孤独な学習では、つい中だるみになっ

たり、答案を提出せずに終わったりしがちです。当センターでは毎月定期的にテキストを送付、厳しい学習管理を行いながら、マンツーマンの個人指導を図っています。

受講中、受講後の特典

翻訳家養成講座・基礎科および速読英語養成講座には奨学金制度が有り、毎月の優秀生には奨学金が授与されます。また、翻訳家養成講座・本科修了生で優秀な方には翻訳の仕事をおまわししています。

★案内書請求は下記へ〈案内書無料進呈〉

〒113 東京都文京区湯島2-4-6

大学翻訳センター

- 翻訳家養成講座・本科係
- 翻訳家養成講座・基礎科係
- 速読英語養成講座係

(ハガキか電話でお申し込みください。)

電話は——

03-815-1621



1か月分のテキストとカセットテープ

113 東京都文京区
湯島2-4-6
大学翻訳
センター行

××講座○○科
案内書送れ
氏名
住所
職業
年齢

翻訳家養成講座へのご招待

求められるプロ翻訳家

現代の複雑化した国際状況においては、正確かつ迅速に情報を処理する語学専門家が熱望されていることは言うまでもありません。しかしながら、文学・社会科学・自然科学各分野、また企業内の実務文書においても、情報処理を担う翻訳は、即製のアマチュア翻訳家が手さぐりで行っているというのが実情です。

情報の複雑化、専門化、増大化に伴い、職業としての翻訳業の確立は緊急の課題となっています。

資格社会を生きる力として

石油ショック以降、減速成長を余儀なくされている経済界では、雇用の削減、少数精鋭主義を正面に打ち出し、特技・資格を持ったスペシャリストを求めています。これからの、“特技・資格社会”を生き抜いていくためには、語学力、それもプロとして通用するだけの力がなくては太刀打ちできません。ビジネスマンは今後の昇進・昇給への近道として、学生は、就職を有利にする武器として、主婦はサイド・ビジネスとして、翻訳力を身につけることは、百万の味方を得たと同じです。

大学翻訳センターの総合英語通信教育

大学翻訳センターでは、このような時代の要請に応えるため、'74年4月に通信教育・翻訳家養成講座を開講し、2年半にわたって優秀な翻訳家の育成に努めてきました。'76年には翻訳家養成講座・基礎科および高校生を対

象とした速読英語養成講座を開講、さらに10月には和文英訳添削講座を新規開講し、英語の総合通信教育をめざして着々と講座の充実化を進めています。

★基礎から着実に学習できます★

翻訳家養成講座・本科

大学卒業生、および大学院生対象。受講期間1年。受講料年間70,000円(分納可)。修了後、成績優秀者には専属翻訳者として契約し、仕事をしていただく特典があります。

翻訳家養成講座・基礎科

大学在学学生他対象。受講期間1年。受講料年間65,000円(分納可)。本科進学前に基礎力をじっくり身につけたい方のためのコースです。奨学金制度も設けられています。

速読英語養成講座

高校生他対象。受講期間1年。受講料年間72,000円(分納可)。受験準備だけでなく長文の読解力養成に重点を置き、数多くの高校英語通信教育中でユニークさを誇っています。

和文英訳添削講座

4コース選択制(基礎英作文コース・自然科学関係コース・特許契約関係コース・商業通信コース)。受講期間半年(10月開講3月修了)受講料1コース15,000円。

ランからきいたことがあります。私は、つい半年ほど前に必要があって、アレクセイ・トルストイ再話のロシア民話「大きなかぶ」をしらべたことがあります。内田莉莎子訳の「おじいさんは かぶをぬこうと しました。うんとこしょ。どっこいしょ。ところが かぶは ぬけませんでした。」

は、英訳では、

Then, one day, the old man went to pull it up. He pulled and pulled again, but he could not pull it up.

となっています。(ロシア語でもこうだと教えてもらいました)

この「ひっぱって、ひっぱって」とか「なんども ひっぱりました」となるところを「うんとこしょ。どっこいしょ。」と訳すところに、非凡さがあると思います。物語のアクセントを心得ていて、読むときの緩急遅速をよく計算した訳です。人が訳したのを読めば、なあんだと思う訳語ですが、こうした訳語が生まれる背後には、絵本と子どもを深く理解するまでの努力と豊かな才がかくされています。

絵本は(いうまでもないことですが)子どもが最初に出会う芸術の一つです。たいていの場合読んでもらうわけですから、意味だけでなく音声を伴っています。言葉のひびきの美しさをも味わうわけです。だから、翻訳に際しては、ただまちがいをなく訳すだけでなく、耳にこころよくひびく言葉の排列が必要だと私は思います。絵本がいちばんむずかしいのです。子どもに対する責任を考えると、児童文学の翻訳は、むしろ小学校高学年や中学生向きのもあたりからはじめるべきであって絵本の翻訳は、後になってからおそるおそるとりかかるとべきものだと、私は考えています。

児童文学を読むこと、知ること

ある高名な児童文学の研究者が、児童文学

の翻訳がしたいという人の希望をきいて、うんざりした顔で「どうなんでしょうねえ。そういうのは。」といったことがありました。その人の真意は、無限の宝庫の楽しみを味わうこともせず、翻訳という実際的な作業を志向する気持がふしぎだということだったでしょう。児童文学を専門に訳そうとする人たちが生まれたのは戦後だと思います。そして、そういう人たちは子どもの文学の魅力にとりつかれ、損も得もなく研究したり訳したりする人たちでした。これからも、そんな人たちがかりだといいと思いますが、そうした牧歌的な時期はすぎつつあるように思います。ビジネスとしての児童文学の翻訳がたくさん出てくるでしょう。しかし、ビジネスには、高度の技術が要求されると思います。りっぱなビジネスであるためには、児童文学については豊かな知識が必要です。

Work seemed to go on for a long time. It looked as though the digging was harder job than Walter and Rod had expected. Whispered comments and curses drifted across at intervals.

などという文は、この箇所だけ抜いてみると、大人の小説だから子どもの本だかわかりません。これは、小学校5、6年向けの作品の中からとったものですが、この年頃の子どもの理解力やなにかを考えなかつたら、

「作業は長時間継続されるらしかった。穴掘りは、ウォルターとロッドの予想以上に困難な仕事らしかった。ささやき声の評言や呪詛の言葉がときおり水を横切ってたどよい流れてきた。」

などと訳してしまうかもしれません。作品の発表された時期、想定される読者の年齢層、作家の作風など、知れば知るほどよい訳ができるのはあたりまえのことです。

児童文学

私の児童文学翻訳論

神宮輝夫

絵本からはじめないこと

児童文学の翻訳をはじめの人たちがよく口にするのは「まず絵本あたりから。」という言葉ですが、私は、これくらい読者である子どもにとって迷惑なことはないと考えています。というのは、絵本の翻訳ほどむずかしいものはないからです。例えば、

At the edge of the jungle, where the river bends, the hippos wallowed in mud. They were all happy there, squelching and rolling.

All except Horatio, who longed to do something else.

という絵本の文を、
「ジャングルのはずれの、川の曲ったところでは、河馬が 泥の中でごろごろしていました。泥の中で ピチャピチャ音をたてたり、ころげまわったりして 河馬はみんな しあわせでした。

ただし、ホレイショーを除けばです。ホレイショーは、泥の中にいるより、もっと他のことがしたくてたまりませんでした。」

と訳した例があります。この人の訳文は全

体的に見て作品鑑賞力の高いものでしたが、むろんこのままでは使えません。はじめのころは結構ですが、squelchingを「ピチャピチャ音をたてたり」、はなんだかカバラしくありません。カバだから「ガバガバ」とか「ガバッ」とか、情景を想像してことばがえらべると思います。そして「ただし、ホレイショーを除けばです。」は、幼児に読んできかせる言葉ではありません。「でも、ホレイショーだけは しあわせでは ありませんでした。ほかのことが したくてたまらなかったからです。」とか、「でも、ホレイショーだけは、ちがいました。ほかのことにあこがれていたからです。」とか、あるいは思いきって「ホレイショーだけは、なにかほかのことがしたくてたまりませんでした」と、幸福をとってしまいか、いろいろな訳し方が考えられます。ただし、「ただし」や「除けばです」などは使えません。幼児にとって意味不明になるおそれがあるばかりでなく、リズムカルでなくて声に出して読みにくいからです。

絵本の文章は、声に出して読めるもの、つまり、はく息吸う息にさからわないリズムのあるものでなくてはならないと、絵本のベテ

obscenity とはどのようなことか。これは簡単に言えば、性に関して、同じ事象を指す幾通りかの言い方があるとき、そのうちの一人前では言えない言い方を obscenity と呼ぶ、と言っているかと思えます。かつてアメリカでは leg という名詞は性にかかわり、obscene と考えられました。それで limb という名称なら人前で言っても差支えないものだったわけです。20世紀になっては、そんなことはなくなりましたが、しかし balls は今日でも obscene とされ、実体は同じの testicles は obscene ではありません。stones も同じ意味になり得るので、19世紀には、人前では、避けたはずです。「石」の意味では rocks というのがアメリカでは普通だったのです。

このような点で、日本語はかなり obscenity について違う要素をもっていると思えますが、それは性に対する態度の文化的違いにかかわっています。しかし、ここまで話せば、なぜ私がこの広告に怒りを覚えるかは解っていただけでしょう。英語キチガイのサラリーマンが“You turned me on.”などと意味も知らずに言う図を考えるとゾッとするのは。げんに私はその類の英会話の名人と称する日本人にアメリカで会うことがあるのです。

さて私は今「意味も知らずに」と申しました。そうです、(You turned me on.=おれの心に火をつけた)という意識で、その表現をあやつる人間がいたら、そのひとは、その表現の意味を知らない、ということで、その表現の文化的背景、言語的価値(つまり bookish か、colloquial か、taboo に近い表現か、などの問題)、しかるべき発音などを含めなければ知ったことにならないと言うのです。

それでは、私の言うような意味で意味を知れば、英語について翻訳ができるか、と言えば、私は否と答えざるを得ません。その段階

で可能なのは「英文和訳」です。「英文和訳」を嫌う英語の先生がいますが、私は、どの程度に英語を「知っているか」を見る上で、「英文和訳」は価値のあるものだと思っています。しかし、それは翻訳ではありません。

たとえば、さっきの広告の英語について、「きみ、おれ、行きそうな気持」とか「ぼくへんになって来た」ではダメだという理由はなく、仮に文学作品のセリフにその表現があったとして、そこに最もふさわしい日本語は何かという大きな問題があります。つまり英語を知っているだけでは「英文和訳」、日本語の創造性がプラスされて始めて「翻訳」になるというのが私の意見です。

英語の講読などで「きみ、そのパラグラフを訳して見たまえ」などと言いますが、このときの「訳す」は「英文和訳する」の意で、決して「翻訳する」の意ではありません。(もしも中学、高校で「英文和訳する」のではなく、「翻訳する」ことを英語の時間に行なっているとすれば、これは確かに問題です)。ですから英文和訳の名人が名翻訳家である、などということはまずないでしょう。

むしろ実際を見ますと、多少は英語の知識に欠点があっても、日本語の能力が優れていれば、文学作品の翻訳の場合には成り立っています。つまり、日本語で小説の一つ二つを書けるくらいの力があって、しかし小説家ではない、というくらいでないと、英語の小説を日本語に翻訳することはむずかしい。詩の翻訳も同じで、日本語で詩を書く苦勞をしたことのない人に英詩の翻訳は不可能でしょう。

昔から英語畑の人に比べて、フランス語畑の人に優れた翻訳家がいるのは、そういう点が大いに関係しています。英語畑の人は英語屋になって暮らして行けるので、日本語を文学的に身につけるといふ——つまり文学青年になり切るといふ——ことが少なかったと思われます。

文 学

翻 訳 と 英 文 和 訳

志村正雄

翻訳学概論というふうな硬い話をするつもりはありません。しばらく身近かな話をしてそれが多少なりと翻訳について考えるキッカケともなれば、というところです。身近かと言えば、新聞など、ずいぶん身近かなものですが、きのう（1976年7月14日）A新聞の夕刊の広告を見て驚きました。S社とK社（出版社）が共同で出した大きな広告です。

まんなかにマンガで、旅行して日本に来たらしい外国人女性と、サラリーマンふうな日本人男性が話しているようすが描かれています。外国人女性は胸部と臀部が誇張されていて、日本人男性は髪を七分三分にわけ、背広、ワイシャツ、ネクタイというイデタチ——耳が描いてありますから髪は短かいでしょう。男のしゃべっている言葉が雲形（英語で bubble とか balloon と呼ぶもの）の中に You turned me on. と入っていて、それに asterisk がついて、男の足もとに「*キミはおれの心に火をつけたという意味。（『竹村健一英語教室』より）」と注があり、その右に『竹村……』なる本の写真が「これでジャンジャン喋れる」とか、「生きた英語」などという文句とともに示されている。左側にはS

社のカセットコーダーなるものの写真。

驚いた、というよりは憤慨したと言うほうが近いでしょう。国辱ものというのが一番当たっているかもしれません。しまいにはこのような広告を無神経にのせたA新聞社に怒りを感じました。なぜか。

マンガの男の言葉は obscene と言ってもよいようなものだからです。「キミはおれの心に火をつけた」のどこがワイセツなのだ？ と言うのですか。それなら、仮に私が注をつけるなら、この言葉は「キミを見てたら、おれはポックして来た」とでもすると言ったら解りますか。ヒッピーの仲間どうしなら別ですが、七三に髪を分けたサラリーマンが人前で言うような言葉でないことだけは間違いない。

turn on という表現は元来、麻薬常用者のスラングで、麻薬を使って昂揚状態になることを言い、転じて性的に昂奮して来ることに使われるようになったもの、セックスとの関係なしには考えられない表現です。したがって、1950年代の後半あたりからビート族を通じてひろがり、60年代のヒッピーたちによって更に一般化したわけです。英語における

tion is measured in kilowatts, but the sensitivity required of the detector in detecting blemishes which are small, even though clearly visible to the unaided eye, is not obtainable."

特許用語の「に関する」は殆んど“relates to”で、稀に“pertains to”その他を使う変りものもある。疵には一般に defect, flaw, scar 其他あるが、文意から blemish = small fault となろう。

従来の検知器の不便さが色々と挙され、それらの短所を補う特許願発明の目的が、次に述べられる順序となる。

例=この発明の目的は、以前に使用されていたものよりも速い速度で検知器に対して動く表面の疵を検知する検知器を提供することにある。

It is an object of the present invention to provide a detector of blemishes in a surface moving relative to the detector at a higher speed than has previously been usable.

object も provide も定り文句である。目的も一つだけでなく、Another object is to provide……。A still further object……と沢山羅列される場合が多い。

これが終ると、普通、日本の特許請求の範囲(Claim)と似たような文章が続けられる。この道に熟達した人は別として、この部分はあとでまとめる方が安全であろう。

その次が翻訳者にとって内容を理解し、他の部分の翻訳の土台とすべき部分になる。この部分は、添付図面に指示されている部品の参照番号が部品名に添付されているから、図面を参照して、読んで訳しつつ内容を把握して行くといよい。

例=第1図においても断面で例示された疵検知器は走査部3の片端部に相互に隣接して取り付けられたレーザー1と光電子倍増管

検知手段2を含む。

The blemish detector illustrated in section in Fig. 1 comprises a laser 1 and photomultiplier detection means 2 mounted adjacent each other at one end of a scanning station 3.

説明される具体例は、特許の請求範囲を制限するものではなく、例示をするものである。illustrate が使用され、含むも include や contain でなく comprise が使用される。station というのも鉄道の駅等を日本人に想像させるが、機械装置や工場内のあるきまった作動や作業が行われる部位にも使用される。

例=走査部3の中心で開口部に隣接して、12個の小面をもった回転反射鏡がある。この反射鏡はスピンドル5上に取り付けられるが、そのスピンドルは動いている表面6の運動方向に平行に置かれていて、電動機7(第2図に示す)により定速で駆動される。

At the centre of the scanning station 3 adjacent an opening is a rotatable twelve-faceted mirror 4. The mirror is mounted on a spindle 5, which spindle lies parallel to the direction of motion of a moving surface 6, and is driven by a motor 7 (shown in Fig. 2) at a constant speed.

……に隣接しての adjacent は稀に to を附属している英文を見受けるが最近は殆んど見受けない。「12個の小面をもった」などはこの分野の人でなければちょっと簡単に片付けられないだろう。motor 7 は別に例示ではないので shown が使用される。「取り付ける」は JIS 用語集工作方法用語には set が挙げられているが、この場合は mount となろう。

こんな調子で部品の配置と関連が述べられ、終りに全体の作動方法が記されるが、それで技術内容が把握されれば先程スキップした部分やクレームが訳せることになる。

◀特 許▶

特 許

基 礎 (1)

白石正義

日本の特許明細書は書式が判で押したように定っていて、膨大な量の特許申請を少しでも裁き易くするようにもなっているが、アメリカはさすがに自由主義国のせい、その特許明細書に厳格な書式は要求されていないし、また書式もやや異なっている。大体において先ず摘要 (ABSTRACT) が述べられ、次に発明の背景 (BACK GROUND OF THE INVENTION)、発明の要約 (SUMMARY OF THE INVENTION) 図面の簡単な説明 (BRIEF DESCRIPTION OF THE DRAWINGS) そして好適実施例の説明 (DESCRIPTION OF THE PREFERRED EMBODIMENTS) が述べられ最後に特許請求の範囲 (CLAIM) が列記される。

大体、特許の翻訳は、和訳にしても、英訳にしても、その技術的内容が正しく理解され把握されないことには、本当に翻訳されたことにはならず、ただ、文法的に正しい英文を和文から作文した所で究極の目的が達せられないこともある。この辺が特許翻訳者に専門別が要求される所以でもあるが、問題は、

専門技術と英訳を兼備した人はそう沢山にはない。あまつさえ、最近の特許は一件でも色々な専門技術分野を統合したものが多いので俺は機械屋だから電子工学や化学の方は知らんといつては、ものの用に立たない難しい時代となっているようである。複合分野のものはチームで片付けることにもなるが、それは余談として、先ず日本の特許を英訳する場合は前述した通り。和文の最初の一行から英訳に着手することは危険でもあるし、非能率的でもあろう。日本の特許明細書の始めは「発明の名称」で、次に「特許請求の範囲」(CLAIM) があり、これこそ特許そのもののエッセンスではあるが、こればかりを読んだところでんで判らないのが普通であり、従って最初に訳すことは先ずできない。

そこで最初に「発明の明細な説明」を添付図面を参照しながら英訳するのが普通であろう。

これを次の「表面疵検知器」の例について述べる。和文は大体次のように始まる。

例=この発明は表面の疵の検知器に関する。疵検知器は高光度のランプと光電子検知器を採用するものが市販されている。包含されるランプは通常キセノンランプで、消費電力は、キロワットの桁であるのに、裸眼で明瞭に視えるが小さな疵を検知する場合に必要な感度が検知器に与えられないものが多い。

この部分は「発明の背景」に相当するもので従来のもの短所を紹介しているのがこの英訳は次のようになる。

This invention relates to a detector of blemishes in surfaces.

Detectors of blemishes are available employing high intensity lamps and photodetectors. The intensities of the lamps involved, usually xenon lamps, are frequently such that the power consump-

は、“the effect mass of an electron in the conduction band”であり、「実験で～」というようなときにも、“In an experiment～”がよい。

このような場合、前置詞のもつ基本的な意味を正しく理解しておくことが大切であり、前置詞の日本語訳にこだわると、誤訳のもとになる。

次の「～と仮定して」という場合、以下は仮定ですよ、ということをはっきりさせるため、たいいてい場合は、この表現を文頭にもってくる。このような例では、“assume that”がよく使われる。「～が等しいとして」とか「～しているものとする」というような場合でも、たいいていは、“assume that”, “assuming (that)” で間に合う。

「格子との衝突間の時間」は、比較的あいまいな表現であり、これは、ひとつの格子に衝突してから、次の格子に衝突するまでの時間をさしている。「～の間に」という表現には、“between”と“among”があるが、この場合には、当然“between”であり、“among”とすると、たくさんの格子の間ということになり、何の時間なのか判断できなくなる。

「ここで、～は～である」という表現も、よく出てくるものであり、一般に、“where”が用いられる。

「まず」「まず第一に」「まず書初に」という表現は、“first of all” “first” “firstly” などであり、うっかり、“at first”と訳すと、これは、「はじめのうちは～であり」ということになり、読者は、「次に～となり、最後に～となる」ということを期待して読むことになる。いくら読んでいっても、次にどうなったのか出てこないで、おかしいと思って、よくよく調べてみると、“at first”が、“first of all”の意味であったということに気がつく。

「2つの事例のうち、ひとつは～であり、も

うひとつは、～である」という表現もよく使われる。これは、“one is～, the other is～”となるのであるが、このthe otherを、うっかり、anotherとすると残りたくさんの中のひとつということになり、2つのうち、ひとつをとった残りが、たくさんあるとはどういう訳か、ということになってしまふ。

先にあげた例文は、次のようになろう。

“Electrons in n-type germanium have a mobility of 3,600 cm²/volt-sec at room temperature. Assume that the effective mass of an electron in the conduction band is 1/4m, where m is the mass of a free electron. Calculate the time between collisions with the lattice.”

さらに、日本語の論文によく出てくる表現で注意すべきものをいくつか考えてみよう。

「n形、p形半導体の両方とも～」という場合、“both of n-type and p-type semiconductors”は誤りであって、名詞の場合には、“of”は使わないのが文法上の用法である。

最後に、比較的よく使われる表現をいくつかあげて、この稿を終ることにしよう。今回は、主として文のつながりに用いるものをあげてみる。英文を書く場合、“and”で文をつなぎたくなる誘惑にかられるが、英語の場合、何の意味もない“and”は、ほとんど使わない。むしろ、多くの場合は、何もなく別の文章に移る方がすっきりする。しかし、多少とも論理的なつながりを示すときには、次のような接続詞が使われることが多い。

「さらに」 furthermore, moreover 「すなわち」 that is 「同様に」 similarly, in a similar way 「反対に」 conversely, 「再び」 again 「むしろ」 rather 「すると」 then 「これに反して」 on the contrary, in contrast to 「～加えて」 in addition to 「～から考えて」 on the basis of 「ところが一方」 on the other hand

エレクトロニクス

用法上の誤り

江原信郎

英語を直訳した日本語が、何ともごちなく読みにくいのと同じように、日本語を直訳した英文は、極めて漠とした、不明確なものとなることが多い。科学技術論文では、この不明確さは致命的なものにもなりかねない。日本語のもつ、控え目な表現、読者の想像にゆだねる表現、冗長な表現といった性格は、これをそのまま忠実に翻訳しようとすると、正確さをねらったつもりが、逆に不正確さを増すことになる。

英語で論文を書く場合には、はじめから英文で想を練ることが奨められているほどであり、日本語の表現に禍された不明確な表現ができる限り入らないような努力を払うべきとされている。したがって、与えられた和文を翻訳する場合には、原文をよほどよくかみくだく必要がある。特に、日本語としてよく書けている文章ほど、翻訳者にとっては、むしろかしいものとなる。

一般的に言って、科学技術論文の翻訳でも、原和文→翻訳用の和文→英文といった段階を踏む心構えが必要である。さらに、できる限

り基本的で、比較的やさしい英文とすることに努めるべきであろう。技術系の論文では、よい文章、よい表現をある程度まねることは許されることであるので、Introduction, Conclusion, Abstract など、簡素で、うまい表現を、できるだけ日頃集めておくことも、翻訳上、大いに役立つ。

本稿では、(1)用法上の誤り、(2)直訳の欠点、(3)不明確な表現、(4)論理の欠陥、(5)冗長な表現、(6)冠詞の誤り などを中心に、順次、考えてみたい。

今回は、用法上の誤りにより、読者に誤解を与えるような場合を中心に考えてみる。

例= n形ゲルマニウムの電子は、室温で $3,600 \text{ cm}^2/\text{V}\cdot\text{sec}$ の移動速度をもつ。伝導バンドでの電子の実効質量を $1/4m$ と仮定して、格子との衝突間の時間を計算せよ。ここで、 m は、自由電子の質量とする。

「n形ゲルマニウムの電子」は、「移動速度をもつ」のが第1の文であり、英文では、主部のすぐあとに、主たる述部を求めるという常識を、まず念頭におく。

「室温で」というように、日本語で、「～で = ～において」というところは、翻訳上のひとつのポイントで、すぐに“in”を使いたくなるが、英文では、“in” “on” “at”などを正しく使い分けないと、読者が思い悩むことになる。「室温で」は、“at room temperature”であり、これは慣用的であるとしても、「極限值で」というような場合に、“in the limit”と訳す誤りが多い。これは“at the limit”であり、“in”とすると、幅が出てしまって、limitが極限值をさすのか、何をさすのか、わからなくなってしまう。もうひとつ、「正孔がコレクタ接触に集められる」というときにも、“holes are extracted at the collector contact”として、一点への集中を正しく表現する。

次の文章に出てくる「伝導バンドでの～」

over the abdomen, 『右乳房下の痛み』 feel a pain beneath the right breast, 『右肩から右腕, 肱にかけての疼痛』 complain of pain in the right shoulder and down the right arm to the elbow などと上記以外にも前置詞(または down のように前置詞に転化した副詞)の使用が工夫される。「痛くて目がさめる」 the pain awoke the patient in the middle of the night の表現をあてるとよい。「3日前からはじまった胃痛」という原文の時制については the pain which had begun three days ago のように過去完了が必要。それは「ゆうべはげしくなった」前の段階でのことだからである。「さめるほどだった」という表現は普通 so~that, such~that 構文を思いつきがちであるが, かならずしもそうではない。

〔試訳〕 Last night, the patient complained of a severe pain in the stomach which had begun three days ago. The sharp pain did awake the patient in the middle of the night.

上記試訳での a severe pain in the stomach は a severe stomach-ache としてさしつかえない。日本文の「ことに」や「ほどだった」は試訳で見ると、文脈で消化できることがすくなくない。

〈参考〉 腹痛 abdominal pain; 胃の不快感 epigastric distress (discomfort); げっぷ belching; 胃が重い a dull, heavy feeling in the stomach; 消化不良 dyspepsia, indigestion; 下痢 diarrhea; 便秘 constipation etc. 5分ごとに痛みが起る。The pain recurs every 5 minutes. 痛みは1時間続いた。The pain continued (又は lasted) for an hour. (「痛みが起る」の「起る」は occur, come (on) なども用いられ, 「惹起する」は be produced, be induced, be caused などが用いられる。) 頭痛がアスピリン錠で軽快した。

The headache was relieved by an aspirin tablet. のどにくすぐったい感じがある。have a tickling feeling in the throat

彼はこの1年間しばしば下痢を繰返しており, 下痢の発作と発作のあいだに便秘の時期がある。最近2年間に体重が158から103ポンドに減少した。

「下痢を繰返す」 have diarrhea off and on, 「下痢の発作」 a bout of diarrhea (疼痛発作などは an attack of pain とする), 「便秘の時期」 a period of constipation, 「体重が減少した」 The patient lost from...to... pounds; etc.

〔試訳〕 The patient has had diarrhea off and on for the past year, and periods of constipation come between the bouts of diarrhea. The patient lost (in weight) from 158 to 103 pounds in two years.

上記試訳でわかるように, 時制が has had と現在完了を使った個所と come のように現在時制を用いた個所, および lost のように過去時制を用いた個所と原文の内容に即して時制の使い分けがあることである。医学技術翻訳でしばしば誤りがあるのは, この時制の扱いの上での内容のとりちがえである。基本的には一般の語法どおりであって, 文法の正語法によればよい。それは原文の内容によく即しさえすればよいのである。

◇一般的な注意: 初歩的注意事项の一部を列挙する。(1)冠詞: 一般文法に準拠するが, 特に薬物・病名・症状名・所見などはすべて無冠詞, 身体部位・臓器などには定冠詞を用いる。(2)分節法: hyphen のある語は hyphen のところ以外で分けてはならない。e. g. post-operative (術後) は post と operative とだけに分ける。(3)医学術語としてドイツ語と英語の用法上の習慣に注意する。英・米語の差異に注意する。(4)数字はすべて 1, 2, 3 の文字を用いる。

医 学

食欲・胃痛・下痢

安立 恭彦

医学技術翻訳の仕事の多くは主として学会で発表するための医学研究論文になることが多いと思われる。まずその専門領域が広範であり、それぞれの部門の取扱い事項が特殊であることで、翻訳は至難である。翻訳者は十分な英語の熟達者であることはもちろんであるが、医学事項についての理解と知識が深くなければ実用とはなり得ない。現実はこの作業をするときは、つとめて専門医科医師と協同するか、詳細な説明と意見を提供してもらい、精訳を心がけねばならない。本講座は基礎的事項について一般的技術を養うことから逐次応用特殊材料に進んで、医学翻訳技術の要点をマスターできるよう試みたいと考えている。

愁訴 Complaints, 疼痛 Pain

彼女はここ数日間食欲がなく、何をしてもすぐ疲れて、はなはだ調子が悪い。

「食欲がなく」は「食欲が減退、不振、悪い」などと表現できる。文字どおりに「減退、不振」をあらわす語句を使えば、Her appetite has been falling off. She has been suffering

from lack (loss) of appetite (...from anorexia). などがある。「すぐ疲れて」は「疲れ易い」としてよい。be easily fatigued, feel easily tired などを用いる。「調子が悪い」は簡単には does not feel good でよく、be in poor health, be out of health, be out of sorts も一般的にはこの意味で用いられる。ただひと口に「食欲不振」と言っても「神経性食欲不振、偽食欲不振」などの症状ないし徴候があるばあいは専門語の anorexia nervosa, false anorexia などの術語にたよらなければならない。

〔試訳〕 She has been suffering from lack of appetite these several days; she tries to do some work but feels easily fatigued and just does not feel good.

〈参考〉 疲労感 lassitude; 倦怠 fatigue, tiredness; 疲れ易い (easy) fatigability; なんとなく調子が悪い vague ill feeling; 不眠 insomnia; 眩暈 (めまい) dizziness; しびれ numbness; もつれ tingling; 麻痺 paralysis; 痙攣 (けいれん) convulsion, seizure; しゃっくり hiccup, hiccup; 気絶 syncope, fainting; 歩行障碍 (しょうがい) unsteadiness in walking, difficulty in walking; 言語障碍 difficulty in speech (thick speech, aphonia), etc. 「食欲が良好である」 The appetite is fair. 「彼女は食欲過多である」 She has a voracious appetite.

3日前からはじまった胃痛はことに昨夜はげしくなり、患者は真夜中に痛くて目がさめるほどだった。

「胃痛がはげしい」は have a sharp pain in the stomach とする。このほか「激痛」を言うばあい、severe, pungent, terrific, intense pain などのことばがある。一般に、痛みの発生する部位については、限局の程度によって、前置詞は at, in, over などと使い分けをする。e.g. 『腹部全般の痛み』 have a pain

例：生態学的見地からいえば、この大気という術語は地球をとりまく厚いおおいのみをいうのではなく、生物体を出入りする少量ではあるがきわめて重要な気体をも含んでいる。

From an ecological standpoint the team atmosphere included not only the thick gaseous envelop surrounding our planet but also the small and highly important masses of gas which penetrate or originate in the organisms.

「生物体を出入りする」は多少意味を深くとって下線部のようにした。また「地球」のことを our planet としたのは決して必要なことではないが、表現に柔軟さを持たせる工夫の一つである。

大気といえばわれわれ人間はすぐに呼吸に必要な空気のことを考えがちであるが、実はそれだけではなく、更に重要な役割がある。そしてそのような役割を知ることは、公害問題をより広く、深く論ずるためにも意義のあることである。

例：地球をとりまく大気の層は、他の惑星で起っているような昼間の温度における大きな変動を防いでいる。そしてこの温度の変動はたちまちのうちにあらゆる生物の形態を消滅させてしまうであろう。

このような例文を翻訳するときには、内容がよく理解されていなければならない。つまり、大気の層が、太陽光線の輻射熱によって上下する気温の差をやわらげている。いわば毛布のような役目を果たしている。そして、もしも地球上で、大気のない他の惑星のような状態が起れば太陽光線の当たる部分の生物は高熱のために蒸発してしまうであろうというわけである。

The atmospheric blanket surrounding the earth prevents such wide diurnal fluctuations in temperature as occur on

other planets, fluctuations which ^①would quickly extinguish all ^②known forms of life.

下線部①は、もしもこのようなことが地球上で起ればという現在の事実の反対を仮定した、いわゆる仮定法過去の結着を表わす would であり、②は、他の惑星にももしもそのような環境に耐え得る生物がいるといけないから、この地球上で知られている生物という意味で加えたわけである。

では次に、大気の組成に移ろう。そして各組成の自然界における循環について考察していく予定である。この循環の機構こそ、公害の複合汚染の機構を理解するうえに重要である。

例：大気の主要組成は、次の如く、かなり一定の体積比をなしている。N₂ (79%), O₂ (21%), CO₂ (0.03%)。

The principal gaseous constituents of the atmosphere exist in fairly constant proportions by volume as follows: N₂... 79%, O₂... 21%, CO₂... 0.03%

このように、組成が一定に保たれるには植物の働きが大いに関与しているわけである。

例：動物と大抵の非緑色植物は常に O₂ をとり入れ、CO₂ を排出している。したがって、緑色植物の大気に対する効果を相殺してしまうのである。

Animals and most nongreen plants always take in O₂ and liberate CO₂, so that their metabolism tends to offset the effect of green plants on the atmosphere.

このように green plants と animals との相互関係によって地球上の大気の O₂ と CO₂ の組成の割合が一定に保たれているのである。もっとも、CO₂ が水に溶けやすいということも大きな要因ではあるが、これはあとで水の要因として扱うつもりである。今回は大気汚染についてのべる予定である。

生態学とは

石川 照 男

はじめに

今日、ますます深刻化する公害問題に対して、その根本的理解と対策の面で、本来生物学の一分野であった「生態学」が、一躍世間の注目をあびるようになってきた。

生態学(Ecology)という英語は、ギリシャ語の「家」という意味の語に由来している。したがって、われわれの住んでいるこの地球こそ、まさにかげがえのない唯一の「家庭」であり、その「家庭」の秩序を乱し、汚す公害の問題こそ、われわれ人類の最大の関心事といわなければならない。

本講座においては、このような公害問題を中心課題として、それに関するさまざまな生態学的様相を解説しつつ、基本的内容の文章を英訳することを目標としている。

生態学とは

例：生物体とその環境との関係を研究するのが生態学として知られている。

The study of relationships between organisms and their environment is known as ecology.

「生物体」は一般に「生物」の意味で living thing(s) でもよいが、科学論文では「有機体」

の意味で organism の方が多く用いられる。

例：生態学とは、そこに生息する生物とその環境とを取扱うものである。

この場合、「そこに生息する生物」という長い表現を biota という学術的用語を用いれば簡単になる。

Ecology deals with the biota and its environment.

このように、生態学とは、生物と環境との相互関係を扱う学問であるから、まず環境そのものに目を向けていきたい。生物をとりまく環境は、物理的環境(physical environment)と生物的環境(biotic environment)とに大別される。そしてこの物理的環境には、大気、水、土壌、光、温度等の要因が考えられる。しかもこれらの要因が複雑に関連して、われわれ生物体に影響を与えているので、ここに公害問題の複雑さと困難さがあるわけである。では大気要因から順次考察を進めていこう。

大気要因 (atmospheric factor)

まず大気の設定から、「地球上の気体状のおおいを大気という。」The gaseous envelop of the earth is called the atmosphere. この場合、下線部は on でもよい。



CENTRAL P.O.BOX 1948, TOKYO, JAPAN
FUKUSEI BLDG., 6-19, 1-CHOME, YAESU, CHUOKU, TOKYO, JAPAN
TEL.(03)271-2341



運輸大臣一般登録第51号
東京都中央区八重洲1-6-19 福清ビル5階
(株)クニオ トッパン トラベル 電話(03)271-2341
一般旅行業務取扱主任者:小林英夫

“トータル・イングリッシュ・ツアー1976”

いま日本に在住しているアメリカ人と海外旅行を楽しみませんか!
外国人と一緒に旅をし、行動を共にすることでごく自然に食事をしたり話を交したり買物に出たりする機会がえられます。あなたの英会話がたちまち向上するのはもちろんのこと、国際人として必要な“生きた”マナーを直接身につけることができるわけです。
さあ、あなたはどのコースをお選びですか?

※お問い合わせ、案内書請求は電話にてどうぞ。

☎ 03(271)2341, (278)0082 (係) 都築英男

整理番号		旅行費用	期 間
OG76-1202	フィリピンへの旅 (マニラ, プンタバルワルテ海岸)	¥149,000.-	12月25日/1月1日
OG76-1203	パタヤ海岸への旅 (香港, バンコック, パタヤ海岸)	¥199,000.-	12月24日/1月2日
OG76-1208	東南アジア5都市の旅 (台北, 香港, シンガポール, バンコック, マニラ)	¥269,000.-	12月18日/12月31日
OG76-1209	南太平洋, ニュージランド, ロマンの旅 (タヒチ, ボラボラ, オークランド, シドニー, ヌメア)	¥466,000.-	12月17日/12月30日

“トータル・イングリッシュ・ツアー1977”

札幌雪まつり 2月4日~2月6日
感謝祭フィリピン旅行 4月2日~4月10日

★第1回翻訳奨励賞発表★

■主催／大学翻訳センター

■後援／朝日イブニングニュース社

Ⅱ一般部門Ⅱ

Ⅰ最優秀翻訳賞Ⅰ

田隅富美子(36歳・無職・東京)

Ⅰ優秀翻訳賞Ⅰ

成瀬朋子(39歳・主婦・神奈川)

Ⅰ努力賞Ⅰ

山崎秀雄(42歳・教員・千葉)

岡 達子(45歳・主婦・東京)

小原 昭(43歳・教員・千葉)

大村久美子(44歳・教員・福岡)

平田弘子(32歳・主婦・大阪)

Ⅱ学生部門Ⅱ

Ⅰ最優秀翻訳賞Ⅰ

中村由美子(お茶の水女子大学四年・被服学)

Ⅰ優秀翻訳賞Ⅰ

清水令子(神戸大学二年・教育学)

Ⅰ努力賞Ⅰ

本田実千雄(京都大学医学部二回生)

山本裕子(関西学院大三年・英文学)

下田 敦(予備校生・東京)

田中成子(大阪外語大一年・ドイツ語)

上村尚美(早稲田大学三年・歴史学)

■審査委員

審査委員長Ⅱ大竹 勝(日本翻訳家協会理事)

審査委員Ⅱ佐藤亮一(日本翻訳家協会副会長)

出口保夫(早稲田大学教授)

武富紀雄(日本翻訳家協会事務局長)

中村徳次(朝日ウィークリー編集長)

井上一夫(英米文学者・翻訳家)

金谷展雄(津田塾大助教授)

湯浅美代子(大学翻訳センター教育事業部長)

審査経過と講評——武富紀雄

全国津々浦々から寄せられた一、〇〇〇余点(一般の部六六四、学生の部三二二)から択りすぐられたものとあつて、期待に胸を弾ませながら二次審査を通過した各二〇点の候補作品に向いました。しかし、両部門を通して、ずば抜けて水準の高い作品には、めぐり合うことができませんでした。

「背丈」の足りなさは、一般部門に、とりわけ目立ちました。ということ、一七の入賞作を選ぶに、努力賞と優秀賞は見送られて、努力賞どまりにしては、と私同様の説を立てる委員もありまし

つけがたいということです。

田隅さんが一位に選ばれたのは書き出しの処理が成瀬さんやその他の人たちよりうまくいったから他なりません。成瀬さんが *pare other men for death*、

「他人に死に対する心構えをさせる」とたとどしく訳しているのに対し、田隅さんは、「死に対する心構えを人に説く」と、ローマ・カトリックの神父たる主人公マレデイスの職業をしつかりとつかまなければ出てこない、こねれた訳をつけています。成瀬さん以外の人たちもこのくだりはまるで判を擦したように、「心の準備をしてやる」、「死に対して備えてやる」、「死の覚悟をさせる」、「死を迎える心づもりをさせる」といったように「させる」「やる」の乱発に終始してました。一つ一言を呈しますが、小説(少くともこんどのテキストのような)には、美意識がひとかけらもない「させる」「やる」式の安直かつ不用意、不適切な表現を許してはならないのです。

一般部門に絞つての話ですが、次にどの候補作にも、なぜ私が抵抗なく融け込むわけにはいかなかったのか、その理由を大雑把に分折してみることにします。それは、小説を訳しながら、小説にな

っていないからです。いうまでもないことですが、小説の翻訳は小説、詩の翻訳は詩になつていなければなりません。折角、小説を訳しながら、なぜ訳したものでしょう。訳に昇華しきれないのでしょうか。

それは、英文和訳の域に低送しているからです。原文の品詞をなぞることだけに汲々としてゐるからです。原文の文章構造に密着し過ぎた態度が、作品の足を引っ張る、価値と効果を薄めてしまつてゐるのです。皮相な原文尊重主義は、下世話にいうひいきの引き倒しの逆効果をうみ出しかねません。形式的な忠実さが原文のころや価値に忠実とは限りませんし、土台、氏も育ちもまったく違う(外国)語と日本語の間には、一対一の機械的な対応関係など、到底、あり得ないからです。英語と日本語とは、語順、句節の並べ方、語の重さや響き、音節の長さなど、挙げていつたらそれこそきりがありませんが、すべてがまったく異なるのですから、翻してどのような処理が最も効果的であるのか、じっくりと考える必要があります。耳で大きく話し言葉とは違つて、いやでも目に訴えかけってくる書き言葉は、機能性をふつきたった美意識に富んだものでなけ

ればなりません。

翻訳家は、原典の小さな正確さを取り繕うのに汲々とするよりも最大の正確さを目指して血眼になるべきです。もっと噛み砕いていへば、作品はひとつの森だたえられる、「全文章的」な存在です。原典のころや意図を正確に読みとるために、一語、一句、一節を丹念に追うという翻訳態度はもちろん大切ですが、それにのめり込み過ぎて、個々の木の生え方や枝ぶりだけが浮き彫りにされ、かんじん要の森の全体像がぼやけたり、見失われたりしてしまつたのでは、本末転倒というものです。翻訳作品は、間違いないく原典の分身です。だからといって、乳離れできず、産み親に凭れかかればなければ赤くない、たとどしい存在であつてはならないのです。

一般の部にきわ立つた水準の応募作がなかったのは、問題が難し過ぎたからかも知れません。だとしたら、出題者たる私の不明の至り、世間知らずのせい、深くお詫びしなければならぬというものが最も敬愛してやまないオーストラリアの作家(アメリカで執筆活動を続けています)から、アメリ

カの作家というべきかもしれませぬ)、Morris L. West の「The Devil's Advocate」悪魔の弁護人(ローマ教皇庁の役職のひとつ)、「信仰推進者」の別名)——というきわめて芸術性の高い作品の冒頭を出典としたものだけに、もう少し労わり深い扱いが欲しかったという気持を消せずにはいます。

聞いてもらいたいことは、まだ山ほどありますが、紙数が尽きかけてきたので、結論に入ることにします。一般の部門で、田隅さんと成瀬さんが、最優秀賞と優秀賞に輝いたのは、「翻訳の世界」の創刊に伴うお祝儀の措置でもあるのですから、囑つたり、安心した訳のことなく、今度の受賞を翻訳の世界への旅立ちであり、門出として、将来とも精進していただきたいと思ひます。

学生の部門に関しては、応募者がまだ発展途上にある存在、ということと、とりたてて苦言を呈することはありませぬ。あえて一言ありとすれば問題がやさしかっただけに、原文の読み込みにしても、訳のつけかたにしても、いまだ少し木目のこまかさや欲しかったという事です。とくに固有名詞の表記には、参考文献をあたって正確を期すといつた、慎重さが望まれる次第です。

訳例

武富紀雄
(出題者 審査員)

他人に死にうち向う心構えを説くのが、職業の筈であった。それがどうだろう。死が自分の問題になったいま、まったく覚悟ができ

ていない……。そのことに彼はひどくうらめされた。

彼は理性的な男であった。そして理性は彼に死の宣告は人間の、

主催者より

第一回翻訳奨励賞最優秀翻訳賞(一般部門)の作品を左に掲載します。講評は前ページを参照して下さい。なお、今回は特に出題者自身の訳例を同時に掲げました。第一回に応募された方々の再度の奮起を期待するとともに、広く読者各位の参考となれば幸いです。(学生部門は掲載略しました。)

最優秀翻訳賞 田隅富美子 受賞作品

死に対する心構えを人に説くのが彼の仕事であったが、自からの死については全く覚悟ができていないのに彼は愕然とした。

彼は分別をわきまえた人物であり、人の寿命は生れおちた時からその掌に記されているということも分っていた。冷静で、情念に煩わされることも滅多になく、修養に倦むことは更になかったが、それでいて、まず彼を動かすものは永遠の生への迷妄にひたすら執着する心であった。

全く予期しないときに、前ぶれ

もなく、面を覆い、手を隠して現れる、というのが、「死」のたしなみ深い役柄である。死は、その

兄弟分の「眠り」の様に、ゆるやかに、ものやさしくやって来るかと思えば、愛のいとなみが頂点に達した時の様に、すみやかに、荒

々しくやって来る。死への屈服の瞬間は、靈魂と肉体がもぎ離されるというものではなく、そこにあるのは静寂と飽和なのだ。

「死」のたしなみ。それを、人は

生れ落ちたその日に、掌に書き込まれていて、ということを教えていた。彼は熱情に揺さぶられることもなければ、どんな戒律にもめげることもない冷徹な男だった。しかしその彼も、生れてはじめて、不老・不死の幻想にしゃにむにしがみつきたい衝動に馳られていた。

死の使者は、顔を包み手を敵い隠して、まったく予期されざる時、足音もなく唐突に訪れきたるべきである。——これが彼が死に求めるせめてもの節度であった。死はその兄弟である眠りのごとく、静かにやさしく、あるいはまた、愛の成就のように荒々しく、迅速に訪れきたるべきであった。それでこそ、肉体と靈魂が訣別を強いられるあの醜薄な瞬間、臨終の際も、静謐感と飽和感にみたされる

といふものである。死の節度、それは折れるものなら、誰もが夢みて空しく折り、叶えられないと知って激しく絶望する体のものであった。ブレイス・メレイスはいま、薄い春光の中にうすくまり、サーベントインの池の上を列をなして緩くくうと浮動している白鳥や、芝生の上で愛を囁きあつて二人連れや、飼い主たちのひらひら躍るスカート

を皮紐に引きずられてちよこまか

追うブードルなどに、ほんやりと目を落し絶望を噛みしめていた。萌え立つ若草、新しい樹液をしたたかせている樹々、微風にうなづくクロッカスや水仙、ものうげに愛を交し合っている二人連れ、きびきびと足を運んでいる初老の男たち——、こうしたさまざまの人生の真只中において、彼だけがひとり死と膝つきあわせているのであった。宣告は下された。生命の終局が目前にさし迫っていることは、間違いなかった。死はその託宣を、彼の掌にはではなく、四角な写真のネガの、小さな灰色の斑点に書き込んでいた。

「癌ですな！」
外科医の無骨な指は、一瞬その斑点の上をうろつき、ついで腫瘍の拡がりを迎ってネガの外側へと動いていった。

「進行は遅いが、がっしりと根を生やしています。これまでこれと同じものをずいぶん診ているので、間違いありません」

小型の透視スクリーンと、その上をはい廻る医者のだよな指をみつめながら、ブレイス・メレイスは皮肉な感慨に打たれていた。彼のこれまで、の全生涯は、人間を被襲する罪悪、人間を墮落せしめる欲望、人間を滅ぼす愚行、

といったこの世の業の鼻先に、真

漠然と待ち望み、祈りの気持にあれば祈り求め、かなえられぬと知れば悲嘆にくれる。淡い春の日ざしの中に腰を下し、サーベントイン池にゆつくり列をなしてゆく白鳥の群れ、芝生に愛を語らう恋人たち、そして小路づたいに皮紐にひかれた難しい顔のブードルが主人のスカートの裾廻りながら、ブレーズ・メレデイスは今、その悲しみにひたっていた。

草は生いさかり、木々は新しい樹液に満ちてはちきれんばかり、風にそよぐクロッカスや水仙の花、若者たちは緩慢な愛のしぐさに身を委ね、年寄りたちも元気に散歩を楽しんでいる——これらあらゆる生氣の中にあつて彼だけが、死の刻印をおされている様に思われる。その指示が緊急且つ最終のものであることに間違いの余地はなかった。見る人が見れば、それが記されているのは掌の線ではなく、四角い写真のフィルムで、そこに見える小さな、灰色のかげりが彼に死の宣告を下している。

「これが、がんの腫瘍です。」と外科医は言い、その無遠慮な指先が灰色のかげりの真中に一寸とどまり、そして腫瘍のひろがりを通りゆく。「進行はゆるやかですが、

すっかり根をおろしています。同じ様なケースを度々見えていますので間違いはありません。」

小さな半透明のスクリーンと、その上を指がへらの様に動くのを見ながら、ブレーズ・メレデイスは事態の皮肉さにうちのめされていた。彼は生涯を通じて、人に向い、自らに誠実であるべきこと、犯した罪が人を破壊し、導き、慾望が人を堕落させ、数々の愚行の故に人は衰えてゆくということを説いてきた。然るに、今や彼は自分の内部に、小さな悪性の腫瘍が、マンドレークの根の様に着ち始めて、何時の日か彼を死に至らしめるのを見つめているのだ。

出来るだけ平静に、訊ねてみた。

「手術は出来るでしょうか。」

医師が透視スクリーンのスイッチを切ったので、小さな灰色の死は不透明の中に消えていった。それから腰を下し、デスクランプの向きをかえると、医師はかげに隠れ、患者の顔が美術館の中の大理石像の様に照らし出された。

ブレーズ・メレデイスには医師の考えている事がよく分った。二人共、くろうとであった。夫々、自分の職業を通じて、人間という動物を相手にしている。病めるものからは一歩離れて、相手にかか

理を突きつけることに費されてきた。それがいま、自分の内臓を突きつけられている。そこには小さな悪魔が巣くい、マンドラゲの根のように、彼を破壊し去るその日までではびこり続けていくのだ。

彼は平静を装ってきいた。

「手術は、可能でしょうか？」

外科医は透視スクリーンのスイッチを切り、小さな灰色の死が不透明の中に沈み込んでいくのを見届けてから、椅子に腰を下した。

そして、机の上のスタンドの光を自分の顔が影になるように調節した。その結果、患者の顔は、博物館に飾られている大理石の首像のように、光に浮び上ることになった。

ブレイス・メレデイスは、医者の小細工に気づき、その意味を理解した。彼らはふたりとも、人間という動物を取扱うことを天職としていた。どちらも死の床にある人たちに接する際には、その弱り切った、恐怖におののく心情に没入し過ぎてはならない立場に置かれていた。

外科医は椅子の背にもたれると、ペーパー・ナイフをつまみ上げて、宙にかざしてみせた。手術刀でも扱うような慎重な仕草だった。適切な答を選び出すために、言葉の間を渡り歩いた挙句、彼は

「おずおずと口を開いた。」

「そう、切ることはできます。しかし、その場合、三カ月とは生きられないでしょう。」

「もし、切らずにいたら？」

「もうちよつとはもつでしようが、その代り、苦しみが死ぬということになるでしょう。」

「もつといつて、どのくらいですか？」

「六カ月……せいぜい十二カ月、でしょうね。」

「どのみち、むごい選択ですね。」

「しかし、誰でもないあなたが、自分で決めなければならぬことです。」

「わかっています。」

「医者は軀をほぐした。やつといやなことを片づけることができ

た。やはり、自分の目に狂いはなかった。見込み通り、彼は理知の勝った、ストイックに自制心の強い男だった。このショックに耐え抜き、不可避の運命を甘受するだろう。激しい苦痛に襲いかけられても、毅然としてそれにうち向うだろう。教会はやさしく彼を看とり、死んだ時には手厚く葬るだろう。たとえ、誰ひとり泣くものがないとしても、それは彼が過ぎてきた独身という生活形態に対する、最後の褒賞というべきかもしれない。家族とともにあるこ

★第1回翻訳奨励賞発表★

わりすぎるあまりに、患者と同じ様に氣弱になり、おじけづいてしまうことを避けねばならないのだ。

医師は椅子に背をもたらせ、ペーパーナイフを手にとり、氣をつけてバランスをとり乍らメスを持つ様な手つきでかざした。一寸待つて、言うべき言葉を探し、よく選んでから答えた。慎重に考えた正確な口ぶりであった。「手術はできます。しかし手術しても3ヶ月はもたないでしょう。」「手術をしないでおればどうでしょう。」

「いくら長く持ちこたえられるでしょうが、余計苦しまれることになります。」「どの位先まで?」「六ヶ月か、せいぜい一年くらいです。」「残酷な選択を迫られるわけですね。」「でも、御自分でお決めになる他はありません。」「それは分っています。」「医師は椅子の上で身体を楽にした。一番の難関は通り越したと思つた。彼はかつてその患者がどういう人かを見誤つたことがなかった。ブレイズ・メレデイスは、知的で、禁慾的で、自制心に富んでいる。ショックを生き抜き、避け

られぬ運命に自分を適合させることである。苦痛が襲つてきても堂々と耐えるであろう。日常に事欠くことがあれば教会が面倒を見るであろうし、死を迎えれば手厚く葬つてくれるであろう。そして、たとえ彼の死を悲しむ者が只一人もいかなかったとしても、人生の悦楽への未練も、又人生の務めを果し得なかつたことへの怖れもなしにこの世を離れ去るとしては、神に身を捧げた独り者にとつては最後のほなむけとなることである。

医師が、この様に考えているのを、ブレイズ・メレデイスの静かな、乾いた声がさえぎつた。「おっしゃつた事を考えてみたいと思ひます。もし、手術をしないで、——仕事に戻ることにすれば、恐縮ですが現地のかかりつけの医者あてに診断書を作つて頂けるでしょうか。今後の細かい見通しや、できれば処方なども?」「メレデイス司教、喜んでお役に立ちましょう。お勤めはローマでしたね? あいにく私はイタリ語では書けませんか。」「ブレイズ・メレデイスはかすかに、冷たく笑つて答えた。「自分で翻訳してみます。恰好な練習になると思ひます。」「司教の御勇氣には頭が下りま

との歎びとの訣別に未練を感じたり、果し得なかつた家族への責務に後髪を引かれたりすることなく、この世を去つていけるというものだ。」「ブレイズ・メレデイスの静かな、乾いた声音が、医者の男考を中断した。「おっしゃつた事を考えてみましょう。手術を受けないし決めた時には、仕事にもどるつもりですが、私の主治医に診断書を書いていただけますか? それと、処方箋も——、もつとも、処方があるとした話ですが。」「おあいご用です、メレデイス神父。お勤めはたしか、ローマでしたね? 残念ながら、私はイタリ語は書けないんですが。」「ブレイズ・メレデイスは、口もとに苦い微笑を浮べた。「私が訳してみましよう。いい勉強になるというものです。」「あなたの勇氣には、まったく感服します。私はカトリックをはじめ、どんな宗教も信じていませんが、あなたをみて、やはり信仰は必要なのかなと思つたりしますよ。このような時にこそ、大きな慰めとなつて、人間を支えてくれるでしょうからね。」「そうであつて欲しいと思ひます。」

ぶすつと、ブレイズ・メレデイスはいった。「ただ、私の場合、それを望むには、あまりにも長い間、聖職にたずさわり過ぎてきましたからね。」「いま彼は、日射しを身に受けたがら、公園のベンチに坐つていた。周囲の空気が春の息吹きでむせ返つていけるといふ、彼の行末は短く限られ、死という空しい当てだけが永遠に続いていつているのだ。」「彼は確たる信仰に誓を立て、二十年も聖職にたずさわり続けてきた。信仰は宣下する——人生は不確かで移ろいやすく、地上は創造主の恵みを麗ろに映し出すに過ぎぬと。人の靈魂は必滅の五体にかりそめに宿る不死のもので、神がさしおける腕の中に抱きとめられるその日を、羽搏きながら待ちこがれているのだと。そしていま、救済の時が訪れ、メレデイスは永遠の生命に解き放たれようとしていられるのだ。それなのに、思ひ悩むのだから。随喜とはいわず、せめても得心をもつて、神のお召しに応じることができていい筈ではないか?」「多分、問題の核心はこれかもしれない。彼はこれまで、なにものをも渴望したことはなかつた。欲しいものはなんでも手に入った

す。私はカトリックではありませ
んし、こういったことでは何の信
者でもないのですが、こういうと
きに信仰を持っておられることは
大きな心の支えになることでし
ょう。

「そうであれば結構だが、ブレ
ズ・メレディスは短かく言った。
「でも私は久しく僧をつとめてき
て、今や、その境地を望む気はな
くなりまして。」

今、彼は、日あたりのいい公園
のベンチに腰をかけている。周り
の空気は春の香りに満ちている
が、未来は短かく、うつろなひろ
がりとなって永遠の彼方に溶け
込んでゆく。

彼は二〇年の間、僧職にあつ
て、人生は東の間の不安定なも
の、世界はその創造主のかりそめ
の表象にすぎず、全能の神がさし
のべる両腕に救われんことを待ち
わびて鼓動をうちつつづけている
肉体の中で、靈魂のみが不死なるも
のとの確信に立ってきたのだ。そ
して彼自身の救いが間違いない
ものとなり、救いの日も決った
今、欲びに満ちてというは無理
にせよ、せめて自信をもってそれ
を受け入れることも出来ないのは
どうしたことだろうか。

必要とするだけのものはいつ
ももっていたし、手に入らぬもの
を感しいとも思わなかった。彼は
教会の規律を守り、教会は彼に保
護と安らぎと、その才能のほけ口
を与えてくれた。大抵の人以上
に、彼は安心立命の境に達してい
た。——従って、彼が幸福を求め
なかつたとしても、それはかつて
不幸であったことがないからに他
ならない。この今の今まで——春
の始めの、ブレイズ・メレディス
にとつては最後の春の、ふりそそ
ぐ太陽の下のこの冷たい瞬間がく
るまでは。

最後の春、最後の夏。喘んで、
かさかさになるまでしゃぶられた
末、ごみために投げ捨てられる砂
糖棒の様な生命の残片。そこにあ
るのは、失敗と幻滅の苦味と、酸
っぱい後味であった。一体、何の
功績を算え、身にたづさえて審判
の日に向おうというのか、後世の
記憶に生きる何物を残してゆける
というのか。

彼は人の子の父となつたことも
なければ、一本の木を植えたこと
もなく、建物や記念碑を造るに石
を積んだこともない。怒りをまき
散らさず、慈善を施しもしなかつ
た。彼の業績はヴァチカン宮殿の
書庫の中で知る人もないままに朽
ちてゆくであろう。彼の教会での

し、また手の届かないものには、
決して欲望を燃やしたことはなか
った。教会の戒律を遵奉した見返
りとして、彼は身の保障と居心地
のよさと、才腕をじゅうぶんに発
揮できる「場」を与えられてき
た。彼はどんな人間よりも深い満
足を味わってきた。これまでに幸
福を求めたことがなかつたとして
それは不幸だと思つたことが一度
もなかつたからだ。いまの瞬間ま
で——早春の陽光のもと、し
らじらと揺がる、荒涼たるいまの
瞬間まで——。「最後の春」と
なることがたしかこの瞬間まで
は、ブレイズ・メレディスはわが
身の不幸をかこつたことはいづ
れなかつたのである。

最後の春、そして最後の夏でも
ある。船棒のように、干涸びるま
で嘔られたり、しゃぶられたりし
て、その拳句、がらくたの山の
上、ぼいと棄て去られてしまふ
人生の残片。そこには、ある種の
苦さ、挫折と幻滅の酸い味があつ
た。神によつて裁かれる審判の
日、神に示し得る功績を彼はもち
合わせているといえるのだろうか？
死後、人びとの思い出に残すこと
のできるな、があるというのだ？

彼はひとりの子供をもうけたこ
ともなければ、一本の樹を育てた
こともなかつた。家とか記念碑と

いった生命の標を、この地上に残
したことがなかつた。怒りを発し
たことはなかつた代りに慈善を注
いだこともなかつた。彼の仕事は
合切、教皇庁の記録の中でだけ知
らぬまま朽ち果ててしまふだけ
らう。その聖職から花開いた美德の
一切も、神のみ名の影に没し去
り、彼の名に帰すものはひとつも
ない。貧しき者で日々を糧を手に
し得たど、病める者で勇気を得た
と、罪福を救げた人間はひとりも
いなかつた。彼は義務としてもと
められてきたことは、すべてきつ
ちりとやり遂げてきた。しかし、
彼は空しく死に、ひと月とたたぬ
うちに、その名は永劫に砂漠の上
を吹き飛ばされ続ける一粒の塵と
化し去るだらう。

恐怖が突然、彼を驚かすかみにし
た。冷汗がべつとりと吹き出し、
手がわななきはじめた。ベンチの
まわりでボールを転がしていた子
供たちは、ゆらめき光る池の水を
越えた遠いところを血の気もなく
して虚ろに見据えていて、やつれ
た神父の変りざまに気づくと、群
れをとき返りしながら散つてい
った。

悪寒は徐々に去つていった。恐
怖も薄らぎ、彼は平静さをとりも
どした。理性も立ち帰つてきた。

★第 1 回 翻訳奨励賞発表★

つとめを通じて開花した美德は全て神にかかり、人の世のことはなかつたといえよう。貧しき者にはパンを、病める者には力を、罪ある者には救いを与えて、彼が祝福を受けるといふこともないであらう。彼は自分に課せられたことを全て為しとげ、しかも満たされることなく死を迎え、一ヶ月も経たずしてその名は一片の塵となつて永遠の荒野に吹き散つてゆくことであらう。

突然、彼は恐怖に捕えられた。冷汗が身体中からふき出てきた。両手が震え出し、ベンチの側でボール遊びをしていた子供たちも、このやせて、顔色の冴えない聖職者から次第に離れていった。彼は腰を下して池の水のきらめきを見やっていたが、眼には何物もうつっていなかった。

やがて苦痛が去り、怖れも和らぎ、彼は再び平静をとり戻した。分別がよみがえつて、彼は余生のかたちを如何にととのえるべきかを思い始めた。

ローマで病を得て、イタリイ人の医師たちに始めて当面の診断をうけたとき、彼は本能的にロンドンに帰らうと思つた。不治の病を告げられるのなら、それを自国語で聞きたかつた。そして余命がいくらもないとなれば、その最後

を、英国のおだやかな空気の中で過したい、草原とぶなの林を歩き、古い教会のかがやナイチンゲールの愁いの歌を聞きたいと思つた。そこでは、英国人に永きだけあつて優雅さを仕込まれてきただけあつて、「死」もより親しみ易く、やさしげであつた。

イタリイでは、死は粗げザリで、芝居がかつてゐる。——グラインドオペラの終幕の様に、悲嘆の歌声、とびかう羽根飾り、そして黒塗りのパロック式の柩車が、スタッコ壁の宮殿を過ぎて、カンボ・サントの墓地の、大理石造りの霊安堂にきしみながら進んでゆく。それがこの英国では、ノルマン風の教会の外陣で、しめやかに語り合う弔い、風雪を経た墓碑の並ぶ中に芝を刈り込んで設けられた墳墓、そして墓地の門の向いの樅つくりの酒亭での別れの杯——人の死のたすまいははるかにおだやかなのだ。

それも今や、単なる幻想、感傷によるそれ事にすぎず、自らの腹部にひそむ灰色のしたたかな敵に向つては、何の防具にもならないことが明らかとなつた。彼に身中の敵を逃れるすべはなかつた。僧として、又、人としても、物にならなかつたという宣告を免れることも出来なかつた。

そして、彼は残された日々をどうやつて生きるべきか考えはじめた。

ローマで発病し、なんにんかのイタリイ人の医者にかかつた時、彼の本能はロンドンに取つて帰るよう促したものだ。所詮、助かるゆめとして、死の宣告を「母なる言葉」でしかされたいと思つたのだ。死がすぐ目の前まで忍び寄つてゐるのなら、人生の最後の日目を、せめてもイングランドの柔らかな空気の中で過したかつたのである。丘陵や樺の林をさまよいながら、古寂びた教会のもの蔭で、鶯のあのかなしい囀りに耳を澄したかつたのだ。イングランドへ帰らう。イングランド——

そこでは死は、より温かな肌さわりを持つた、より親し気なものとして受けとめられる筈であつた。人びとが長い年月をかけて、死に慣ましい立居振舞を教え込んできたからである。

イタリイでは、死は、合唱が動哭を奏で、歌い手たちの頭上で羽根飾りが揺れ動くグラインド・オペラの幕切れのように、けばけばしく劇的であつた。大時代ががかった黒い靈柩馬車が、漆喰で化粧された宮殿をよぎつては、カンボ・サントの大理石の墓目指して車輪を転がしていく。イングランドでは

それが、穏やかな様子を帯びたものに変貌する。ノルマン様式の内陣で「追憶弥撒」がしめやかに唱えられ、そして幾時代もの間、雨に打たれ風に晒されてきた墓石のひとつが、きれいに葺り込まれた芝生の上でひっそりと口を開くのだ。弔いの木の梁が立つりと屋根を支えている居酒屋に場所を移し、盃(註)を傾け合つて故人を悼むのだ。

しかし、これとても所詮、なにかに縋りつきたい心が描く、感傷の幻でしかなかつたのだ。内臓を喰ひ散らしているまがましい灰色の敵は、どんな防備も無力なのだ。司祭としても、人間としても、完きをつくせなかつたという呵責の念は振り切り得ても、この敵からは逃れられないのは、確かつた。

〔註〕辞書にはEatonは「献酒・神酒」とあるが、カトリックには神に酒を捧げるのきたりはない。このことからEatonは樺や墓石に注ぐ「聖水」ととるべきであらう。原文の処理は、聖水を酒にみため、なぞらつた絶妙な手並である。

there were none to mourn him, this too might be counted the final reward for celibacy, to slip out of life without regret for its pleasures or fear of its unfulfilled obligations.

Blaise Meredith's calm, dry voice cut across his thought:

"I'll think about what you've told me. In case I should decide not to have an operation — go back to my work — would you be good enough to write me a report to my local doctor? A full prognosis, a prescription, perhaps?"

"With pleasure, Monsignor Meredith. You work in Rome, I believe? Unfortunately I don't write Italian."

Blaise Meredith permitted himself a small wintry smile.

"I'll translate it myself. It should make an interesting exercise."

"I admire your courage, Monsignor. I don't subscribe to the Roman faith, or to any faith for that matter, but I imagine you find it a great consolation at a time like this."

"I hope I may, Doctor," said Blaise Meredith simply, "but I've been a priest too long to expect it."

Now he was sitting on a park bench in the sun, with the air full of spring and the future a brief, empty prospect spilling over into eternity.

He had been twenty years a priest, vowed to the affirmation that life was a transient imperfection, the earth a pale symbol of its maker, the soul an immortal in mortal clay beating itself weary for release into the ambient arms of the Almighty. Now that his own release was promised, the date of deliverance set, why could he not accept it — if not with joy, at least with confidence?

Perhaps that was the core of it. He had never been hungry for anything. He had always had everything he wanted, and he had never wanted more than was available to him. He had accepted the discipline of the Church and the Church had given him security, comfort and scope for his talents. More than most men he had achieved contentment — and if he had never asked for happiness it was because he had never been unhappy. Until now . . . until this bleak moment in the sun, the first of spring, the last spring ever for Blaise Meredith.

The last spring, the last summer. The butt end of life chewed and sucked dry like a sugar stick, then tossed onto the trash heap. There was the bitterness, the sour taste of failure and disillusion. What of merit could he tally and take with him to the judgment? What would he leave behind, for which men would want to remember him?

He had never fathered a child nor planted a tree, nor set one stone on another for house or monument. He had spent no anger, dispensed no charity. His work would molder anonymously in the archives of the Vatican. Whatever virtue had flowered out of his ministry was sacramental and not personal. No poor would bless him for their bread, no sick for their courage, no sinners for their salvation. He had done everything that was demanded of him, yet he would die empty and within a month his name would be a blown dust on the desert of the centuries.

Suddenly he was terrified. A cold sweat broke out on his body. His hands began to tremble and a group of children bouncing a ball near the bench edged away from the gaunt, gray-faced cleric who sat staring with blind eyes across the shimmering water of the pond.

The rigors passed slowly. The terror abated and he was calm again. Reason took hold of him and he began to think how he should order his life for the time left to him.

When he had become ill in Rome, when the Italian physicians had made their first, tentative diagnosis, his instinctive decision had been to return to London. If he must be condemned, he preferred to have the sentence read in his own tongue. If his time must be shortened, then he wanted to spend the last of it in the soft air of England, to walk the downs and the beechwoods and hear the elegiac song of the nightingales in the shadow of old churches, where Death was more familiar and more friendly because the English had spent centuries teaching him politeness.

In Italy, death was harsh, dramatic — a grand opera exit, with wailing chorus and tossing plumes and black baroque hearses trundling past stucco palaces to the marble vaults of the Campo Santo. Here in England it had a gentler aspect — the obits murmured discreetly in a Norman nave, the grave opened in mown grass among weathered headstones, the libations poured in the oak-beamed pub which stood opposite the lich-gate.

Now this, too, was proved an illusion, a pathetic fallacy, no armor at all against the gray insidious enemy entrenched in his own belly. He could not escape it, any more than he could flee the conviction of his own failure as a priest and as a man.

第 1 回翻譯獎勵賞課題文(全文)

“The Devil’s Advocate” Morris L. West

It was his profession to prepare other men for death; it shocked him to be so unready for his own.

He was a reasonable man and reason told him that a man’s death sentence is written on his palm the day he is born; he was a cold man, little troubled by passion, irked not at all by discipline, yet his first impulse had been a wild clinging to the illusion of immortality.

It was part of the decency of Death that he should come unheralded with face covered and hands concealed, at the hour when he was least expected. He should come slowly, softly, like his brother Sleep — or swiftly and violently like the consummation of the act of love, so that the moment of surrender would be a stillness and a satiety instead of a wrenching separation of spirit and flesh.

The decency of Death. It was the thing men hoped for vaguely, prayed for if they were disposed to pray, regretted bitterly when they knew it would be denied to them. Blaise Meredith was regretting it now, as he sat in the thin spring sunshine, watching the slow, processional swans on the Serpentine, the courting couples on the grass, the leashed poodles trotting fastidiously along the paths at the flirting skirts of their owners.

In the midst of all this life — the thrusting grass, the trees bursting with new sap, the nodding of crocus and daffodil, the languid love-play of youth, the vigor of the elderly strollers — he alone, it seemed, had been marked to die. There was no mistaking the urgency or the finality of the mandate. It was written, for all to read, not in the lines of his palm, but in the square sheet of photographic negative where a small gray blur spelt out his sentence.

“Carcinoma!” The blunt finger of the surgeon had lingered a moment on the center of the gray blur, then moved outward tracing the diffusion of the tumor. “Slow-growing but well established. I’ve seen too many to be mistaken in this one.”

As he watched the small translucent screen, and the spatulate finger moving across it, Blaise Meredith had been struck by the irony of the situation. All his life had been spent confronting others with the truth about themselves, the guilts that harried them, the lusts that debased them, the follies that diminished them. Now he was looking into his own guts where a small malignancy was growing like a mandrake root towards the day when it would destroy him.

He asked calmly enough:

“Is it operable?”

The surgeon switched off the light behind the viewing screen so that the small gray death faded into opacity; then he sat down, adjusting the desk lamp so that his own face was in shadow and that of his patient was lit like a marble head in a museum.

Blaise Meredith noted the small contrivance and understood it. They were both professionals. Each in his own calling dealt with human animals. Each must preserve a clinical detachment, lest he spend too much of himself and be left as weak and fearful as his patients.

The surgeon leaned back in his chair, picked up a paper-knife and held it poised as delicately as a scalpel. He waited a moment, gathering the words, choosing this one, discarding that, then laying them down in a pattern of meticulous accuracy.

“I can operate, yes. If I do, you’ll be dead in three months.”

“If you don’t?”

“You’ll live a little longer and die a little more painfully.”

“How much longer?”

“Six months. Twelve at the outside.”

“It’s a grim choice.”

“You must make it for yourself.”

“I understand that.”

The surgeon relaxed in his chair. The worst was over now. He had not been mistaken in his man. He was intelligent, ascetic, self-contained. He would survive the shock and accommodate himself to the inevitable. When the agony began he would wear it with a certain dignity. His Church would guarantee him against want and bury him with honor when he died; and, if

第 1 回 課 題 文

I was born in 1928, on March 4th, under the sign of Pisces, in the front bedroom of a red-bricked council house on the further outskirts of Nottingham. We left the neighbourhood some months later, and though I lived a few miles from it during much of my life, I didn't see the house till I was over forty, while casually walking around the area one day. Otherwise it had had no interest for me.

My father worked at a tannery — or skinyard, as he called it — and I remember my mother taking my elder sister and me along Lenton Cut one Friday afternoon to meet him coming home with his wages. It was one of my first memories, and not unpleasant, because at that particular time my parents were reasonably content. My father took the two-pounds-odd from his wage-packet and slung the small brown envelope into the water. On turning my head I saw it floating like a miniature raft towards the depths of a nearby lock. It was the last wage-packet any of us saw till the war began in 1939.

A few weeks later my mother and her sister took me with them to Nazareth House at Lenton, to ask the nuns for bread. It was known in the neighbourhood that they occasionally had a surplus, and would give it out to first-comers.

From the beginning we children witnessed the dumb god-damn suffering of our parents, who were not able to do anything about what was happening to them — the eternal fate of such people everywhere. Bitterness was the only comfort available but because my father couldn't read or write, it lacked the subtle edge that might have led him to find some way out.

My first attitude towards my parents therefore was to feel sorry for them, and maybe this prevented me later from going through the phase of adolescent rebellion that many children who have had it better seem to find necessary. How can you 'rebel' against a father whom you have seen in tears because he has been unable even to sell the power of his muscles and the sweat of his brow?

There were five children, and in some respects we were quite well looked after by the state. Without the dole for month after month we would have starved to death. We were able to go at eight in the morning, before starting school, to a 'dinner centre' for a breakfast of bread and butter, and hot, well-sugared cocoa; and again at midday for a hot meal of main course and pudding. During the morning in the classroom there was a free bottle of milk.

懸賞つき

英文翻訳募集

読者参加

趣 旨

月刊「翻訳の世界」では、現在の翻訳の状況を踏まえて、将来の翻訳のあり方、新しい翻訳の方向性などを広く考えていきたいと思っております。今後、優秀な翻訳者が多数輩出することを願って、その奨学の資金の一部として懸賞金をさしあげたいと思います。翻訳に興味をお持ちの方、翻訳者をめざしておられる方など、ふるってご応募下さい。

◎応募要項◎

■**応募資格** 特に資格を問いません。但し、翻訳書を出版刊行したことのある方は除きます。

■**応募要領** ①応募原稿は市販の200字詰原稿用紙を使用して下さい。②応募原稿の第1ページ目に以下の必要事項を記入の上、左上の応募券を添付し、200円分の切手を同封して下さい——必要事項〈氏名・性別・年齢・住所・職業（勤務先、学生は学校名・学部・学年）、受講者番号（翻訳家養成講座受講生のみ）〉——。③原稿は黒又は青インクを使用し、かい書で丁寧に書いて下さい。鉛筆の使用は認めません。

■**締切日** 11月20日（木）消印有効

■**送付先** 〒113 東京都文京区湯島2-4-6

大学翻訳センター「翻訳の世界」編集部

■**その他** ①応募券の添付されていないものや200円分切手のないもの、コピーされた原稿などは受け付けません。②応募原稿の添削・返送は行いません。③受賞者の翻訳原稿は、模範例として本誌々上で発表いたします。

★**最優秀賞**..... 1名 3万円

●**次 席**..... 5名 各1万円

.....**出題及び審査=出口保夫(早稲田大学教授)**.....

出典は Alan Silitoe の “Long Piece” from Mountain and Caverns です。Silitoe の生い立ちを描いた自伝風エッセイの最初の部分です。翻訳される場合には、Silitoe のことばを選ぶ時の研ぎすまされた感覚を考慮に入れて現代イギリスの社会的背景を照らし合わせて訳されることを望みます。(出題者)

①

占領下での翻訳権争奪戦

佐藤亮一

◆敗戦の混乱期◆

第二次世界大戦で日本が敗れたのは、一九四五年（昭和二十年）八月十五日である。有史以来、戦争に敗れたことがないと思っていた日本人が、戦争に敗れたということ、を、いかにこの悲劇を深刻に受けとめたか。悲哀、絶望、虚脱、不安、あらゆる深刻な思いが残骸にもひとしい国土の中に、みながぎっていた。この思いは海外で戦っていた日本人も同じだった。

しかし転換の早いのは、日本人の特性でもある。戦争には敗れた、しかし生きのびなければならぬ。敗戦の事実は事実として受けとめる反面、長い苦しみへの訣別を内心喜び、明日への希望への手がかり、あるいは各自の立場での出路、そのようなものが虚脱の中にも逸早く芽ばえ、やがてそれが戦勝国、強大な敵国への尊敬の念にも

変わった。学者、知識層を中心とした自由主義者たちの戦争批判―私だけは戦争に反対だった、私は敗れると思っていた……など、鼻持ちならない知識人の声が出た。これに反発を感じた出版人が、その戦争反対論者、敗戦必至洞察者たちが、実は戦時中は、いかに「お上」や軍部へのおべっか組であったか、その証拠はこれだと言つてその論文、講演、行動などの資料を公表して、知識人の変節ぶりを暴露した。混乱期によくある例である。

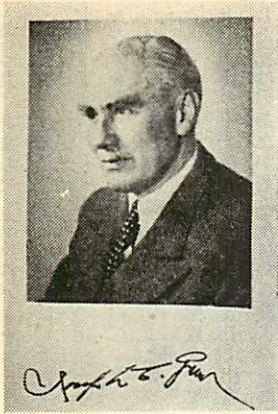
戦勝国の軍隊が進駐して来た。こうなればもう権力に弱い日本人は、へなへなになつた。進駐軍は威張り放題に威張つた。パンと称する売春婦たちが現われた。戦勝国、特にアメリカ人に対する恐怖とあこがれが入り混つて国内を揺らした。教授、文人たち、アメリカ人への接近が相次いだ。いままでの権力は根こそぎ破壊され、

いわゆる赤い勢力が俄然抬頭し、一時占領軍総司令部はこれを助成した。すべてに、焼け跡にさまざま哀れな日本人の、打ちひしがれた姿がそこにあつた。

食べる物も、まともに住む場所もなく、ぼろぼろの姿の日本人ではあつたが、心のかてにも飢えていた。読むものが欲しかつた。しかしやつと発行する新聞のほかは、まとまった印刷物はなかつた。なんでも読むものが欲しかつた。割当ての紙はみんなの手に回らなかつた。粗末な印刷物を、人はむさぼるように読んだ。仙花紙という粗末きわまる紙に印刷されたものは、飛ぶように売れた。みんなは「読む」本を求めた。そして何よりも外国のもの、戦勝国のものを求めた。しかし印刷される本の発行は、すべて占領軍司令部の検閲と許可を得なければならなかつた。日本人は読書欲に飢えていた。

◆入札制度による翻訳出版◆

外国の本を読むには、翻訳作業が必要である。混乱の中に一九四六年（昭和二十一年）十月、水道橋の当時講堂館ビル内の日本出版協会内に、日本翻訳出版懇話会が設けられ、同時に連合軍総司令部（GHQ）が、日本における外国人所有の著作権に関する覚え書きを作成、十二月五日、GHQは連合国各施設に対し、回状（外国の雑誌、書籍、映画、ニュース写真などの輸入および広布）を通達し、許可制により外国著作物の翻訳権取得の道を開いた。同時にこれより五日前の十一月三十日には、「連合国民の特許並に著作権使用料の銀行供託金に関する件」の覚え書きが配布された。



ジョセフ・C・グルー元駐日米大使

日本国内の要望にこたえ、占領軍総司令部CIE（文化情報教育局）が、競争入札による翻訳出版を許可することに踏み切り、一九四八年（昭和二十三年）六月五日、水道橋日本出版協会（講堂館ビル二階）の大広間で、第一回の外国図書の展示入札を実施した。

このときの光景を、私はまざまざと覚えていた。このとき展示された図書は一〇〇点（米書七十六点、英書二十四点）だったが、出版、新聞、知識人関係者がわっと押しかけ、大へんな騒ぎだった。そして六月十四日CIEは競争入札の結果を発表した。

落札書は九十一点（五十三社）、著作権使用料の最高入札額は、ジョセフ・C・グルー



元駐日米大使の『滞日十年』（上・下）（Ten Years in Japan, © 1944, Simon and Schuster, Inc. New York）の36%だった。今日ではとても考えられないものである。それだけに競争は激しかった。これを落札したのは毎日新聞社で、この高き一票を投じに出かけたのは私だった。

グルー元大使の『滞日十年』の人氣は圧倒的だった。親日家のこの元大使の記録を、日本人のだれもが読みたかった。それは日本人に多くの友人を持ち、日本に非常な愛情を持っているこの元大使は、打ちひしがれた日本人にとっては、アメリカにおける最有力の味方であるという意識と、強大国アメリカに対する日本人の劣等感とあこがれの現われでもあった。この本に次いで入札件数の多かったのは、ジョージ・オーエルの『動物農場』（Animal Farm, © 1945）で、諷刺家のイギリス小説家のこの本は、大阪教育図書が落札した。

このときの競争入札の騒ぎは大へんなものだったが、著作権使用料のことで別の騒ぎが起こった。

グルー元駐日大使の『滞日十年』を毎日新聞社が落札したのであるが、落札した比

率があまりにも高くてけしからんということだった。あまりにも高値のパーセンテージを投じて出版権を取得したのは、大資本に物を言わせて他の群小出版社の出路とチャンスを奪うものであるというのだった。

お茶の水付近のどこかの建物の二階だったと覚えているが、各出版社の懇談会の席上、満座の中で毎日新聞社を代表して出席した私は、あたかもみんなから被告の座につかされたような立場におかれた。A出版社のA君という編集者が、かねて用意していたらしい批判の書面を読み上げて「大資本の横暴」を攻撃した。その趣旨は私にもよくわかることだった。やたらに入札の額を釣り上げることは、自ら日本の出版社の首を締めるようなものである。利率の高値は製作費に影響を与える。高率で競争すれば、群小の出版社には外国図書出版のチャンスがない。安くても入札できるようなものは、どうせ部数の出ないものである。大多数の出版社はこのA君の説を支持した。

このとき、私はさすがは岩波書店だと思つた。岩波を代表して出席していた編集者は、この問題は、その社が高い率を投じても採算が取れると判断してやったことだか

ら仕方がない。高い率を投じて損をすれば、その社が責任を負うのだから、他人があまりかれこれ言うべきではない……。

そこでこちらも席を立つて応酬した。「こちらが一切の責任を負うからいいではないか。社の方針でぜひ取りたいから高い一票を投じただけで、かれこれ言われる筋合いはない。版權使用料の率を低くできればそれに越したことはない。しかし競争をどうさばくのか。みんなできるだけ低くつけてくれ、こちらはそれより少し高くするから教えてくれとも言えまい。どうすればいいのか。みんなよい本は取りたいのだ。落札した以上は名譽にかけて立派な、しかも安定価の本を作ってお目にかける。それでいいではないか……」そんなふうなことを私は言った。

この『滞日十年』の版權を取った私たちは、訳者を石川欣一氏（当時毎日新聞社出版局長で外国生活が長く、しかもグルー元大使と知人の間柄）の訳で、上巻を昭和二十三年十一月一日、下巻を同年十二月十五日に発行し、物凄く売れ行きによって利益を得、別に原著者の印税寄付によって、一千万円のグルー基金を日本の若人のため

に積み立てたのである。この入札制度は十回つづいた。この制度ができたころは、落札図書の新訳の良否を検討するために翻訳委員というのがCIEから依頼され、できあがった翻訳の内容を検討し、これにパスしてはじめて出版された。この委員は大学教授を中心とした諸氏だが、省略する。

◆独立後の風潮◆

これとは別に、このころGHQの特別許可を得て、版權を仲介する外人が現われ、これらの仲介によって英、米、仏等の版權の取得が行なわれ、結局一九五二年までに、日本の出版社が外国図書の翻訳出版契約の手續きを取ったのが、全部で五四四〇余点、その内三二二〇余点がアメリカ物で半数以上を占め、次いでフランス物が八〇八点、イギリス物が七〇七点、その他八〇〇点であった。

一九五二年（昭和二十七年・四月二十八日）が、日本が占領軍の手から解放されて一応独立国家として再出発した年であるが、その前年あたりから占領軍、特に反米の風潮が高まりつつあった。この国内の風潮を日本の出版界は敏感に受け、営業政策

の面に強くこれを反映させる姿勢を取った。米国外使館ができたのは、日本独立と同時に、四月二十八日である。



ベストセラー『ニッポン日記』と著者マーク・ゲイン

日本が独立する前年あたりから反米風潮が高まったが、これは目先のきく日本人が独立が迫ったのを見通した素早いごき方である。軍政が解かれれば主権は独立国に戻る。出版物に対しても、無茶な弾圧はできまい。そこで国民の心理をついた、際物出版が企画された。単にそろばんの上の計算ばかりではない。勝てば官軍ということへの反発も多分にあった。筑摩書房が敢然として、独立前年の末、マーク・ゲインの『ニッポン日記』を出版した。

これは文学書ではなかった。新聞記者の書いた内幕物で当時の風潮に大いに迎えられ、一九五二年の最大のベストセラーとなり、これがいろいろな意味で大きな衝動を与えた。この出版によって筑摩書房当局者が総司令部に呼び出されて調べられ、なんとか申し開きをつけたと聞いている。まだびくびくの時代である。

しかし売れるものを出したいのは、出版社の願望である。チャンスはそうあるものではない。多少の危険を冒してこそうま味というものがある。それに、強いものにタテをつく気風が日本人には受けた。終戦と同時に戦犯裁判が戦勝国によって行なわ

れ、多数の日本人が軍人を中心に裁かれた。そして敗戦国の日本人からみれば、これは一種の報復裁判とさえ思われた。戦争中やたらに威張り散らした軍人たちは、日本人から見ても裁かれるのは当然だと思われる反面、外地に遠征して名をとどろかした將軍たちの中には、英雄とさえ思われる人物もいた。

人道上の立場から戦犯裁判に批判を加えた、アメリカ人将校フランク・リールの『山下裁判』の出版は(下島連訳・日本教文社刊)、占領中(昭和二十七年)出版を抑圧されていたため、かえって人気を呼んだ。マレー半島を攻略し、ブキテマの高地でイギリス軍司令官パーシバル將軍に降服を求め、相手に多くを語らせず「イエスカ?」、「ノウカ?」ときめつけたマレーのトラ山下將軍は、東条大将とのいきさつもあって日本人に人気があった。結局絞首刑に処されたが、この伝説的將軍の死を日本人はいたんでいたのである。感激性の日本人が、これをベストセラーにしたのは当然である。

ここで、もう少しマーク・ゲインの『ニッポン日記』(井本威夫訳)の出版事情を

くわしく報告しておきたい。これは版權獲得競争の一面である。

これは上巻が昭和二十六年十一月五日發行、約一か月おかれて下巻が出て以来、日本じゅうの評判になって飛ぶように売れた。たちまち三十数万以上を売ったのだから、筑摩書房の編集当局が鼻を高くした。

まだ占領中にこのベストセラーが出版されたいきさつは、次のようである。訳者の井本氏はジャーナリストで上海辺で相当活躍した人であった。まだ占領中の二十六年の前半期、当時日本に来て日本語を勉強中のスエーデン人宣教師に日本語を教えていたが、ある日、訳者は宣教師の書齋にあったこの原書を見発した。

手に取って見ると、なかなか面白そうである。そこで宣教師に尋ねると、この本は日本に来る前に日本の事情を調べようとして、ストックホルムで買収求めたという。借りて読んでみると、いよいよ面白い。

同時にこれは日本で出版すれば相当いけると思つたのは、さすがジャーナリストのベテランである。そこで友人に相談しているとき、これをかぎつけたのが筑摩書房の編集部。

やがて双方の話がまとまった。それからが大へんである。まず版權を取らなくてはならない。当時流行の目玉題目「本社独占版權獲得」というやつである。しかし本書の著者たるシカゴ・サンズの元東京特派員マーク・ゲインは、噂によれば占領軍司令部内の評判が悪くて、体よく日本から追放されて行方不明ということだった。しかし餌物を見つけたベテラン記者の追及は執拗だった。直ちにマーク・ゲインの居所に矢張り早の版權交渉の手紙を送った。しかし返事はなかった。しかし訳者の手紙を持って、次々に飛行機は東京を飛び立った。

しばらくすると、パリのマーク・ゲインから訳者井本氏に返事が来た——「貴下の手紙が半ダース私を追跡して来た……」のはずである。先方も新聞記者である。日本を追い出されてから、あちこちと世界十五か国を駆けずり回って、やっとパリに着いたところだった。

話がまとまり、訳者は翻訳を急いだ。このようにして『ニッポン日記』はできあがったのだが、この訳者がひどく日本じゅうに受けたのと同時に、GHQの許可のことでもかなりもめたことは前記のとおりであ

る。

この本は一部の人に言わせると、マーク・ゲインが日本を追い出された腹いせに書きまくり、江戸の仇をあちらで討ち、それがまた回り回って江戸に戻って来たともいう、曰く付きのものだった。しかし、相対にアメリカを批判した本書が大いに受けたし、筑摩書房が気をよくしたし、もうけも大きかったのは当然である。当時まだまだアメリカを批判しながらも、その威力を恐れていた日本の出版界が、ボーダー・ラインすれすれの出版をねらっていたのは事実である。

この本につづいて当時筑摩書房が出したのに、アーウィン・ショーの小説『若い獅子たち』がある。戦争を描きながら、戦争の現実に直面した個人の苦悩や社会の矛盾を強烈に訴えたもので、ノーマン・メイラーの『裸者と死者』とともに、第二次大戦が生んだアメリカ作家の傑作とされていく。

(つづく)

やすらぎと

くつろぎの中で

心ゆくまで磯料理を

味わってください。

- ★1泊2食付き 3000円（但し合宿の場合は相談に応じます）
- ★大駐車場もあります
- ★お気軽にお電話下さい

民 宿 さ さ ぎ

静岡県榛原郡榛原町静波1630

☎ 05482-2-2680

前進する翻訳家の地歩

武富紀雄

翻訳家の地位が、日本のなかでといわず、世界的拡がりにおいて向上しようとしている。ユネスコ本部が加盟各国の協力の下に、作成につとめてきた「翻訳家の保護に関する勧告」が、本年秋のユネスコ総会に上程される運びになったからである。しかも嬉しいことに、この勧告が採択され、「公的」な執行力をもつことになる公算はきわめて大きい。いま、加盟各国には「この勧告は、是が非でも採択に持ち込まなければならない」という輿論が渦巻いている。

日本翻訳家協会（高橋健二会長）は、本部たる国際翻訳家連盟（在パリ）に呼応して、さまざまな面で日蔭ものの境遇に甘んじるところを強いられてきた翻訳家の地歩を、一歩で

も二歩でも前進させようと微力を傾けてきたが、この勧告が通れば、これまでの苦勞がむくわれることになる。

前文と、八章・十五条・二十八項からなる勧告は、「ユネスコ総会は、一九七六年〇月〇日にこの勧告を採択する」という今年中の「断固採択」をはっきりと匂わせた一行を冒頭に掲げてはじまる。さらに前文は「翻訳家の保護に関する規定は、できるだけ法制化せよ」という、含みを盛り込んだ表現をうたい上げ、出版社や放送会社にも協力を呼びかけている。つまり「ユネスコ総会（以下、総会）は、各加盟国が、この勧告に示される原則及び措置をその国内において実施するために、その国の憲法上の手続に従い、必要な立法上そ

の他の措置をとることによって、翻訳者の保護に関する以下の規定を適用するよう勧告する。」「総会は、各加盟国が、この勧告に対し、翻訳者の人格的及び実質的利益に関する事項について責任を有する省庁若しくは機関、翻訳者の利益を代表し若しくは促進する各種の団体、並びに出版社、放送事業者その他の利害関係者の注意を喚起するよう勧告する」。

翻訳の定義にはじまる本文に入つて、勧告は、文字通り微に入り細にわたつた、木目のこまやかな規定をつぎつぎに披露する。とくに心強いのは、第三章第五条第四項と第六項である。第四項は、出版社その他に印税や原稿料の前払い金を支払うよう義務づけた規定であり、第六項は、原著者と翻訳者は持ちつ持たれつの特等関係にあることを強調し、これまで原著者にくらべてとなく軽んじられてきた翻訳家の立場を高めようとする規定である。つまり第六項は次のようにいう。「翻訳者及びその翻訳物に対して、原著作物の著作者と同程度の宣伝を確保すること。特に、翻訳者名は、翻訳物のすべての複製物及び、す

べての販売促進資料（新聞及び雑誌の書評を含む）の目立つ場所に掲げるものとする」。

第十章第十条は、「翻訳家の訓練」の必要性を強調する条項である。「各加盟国は、翻訳は語学教育とは異なる独自の訓練を必要とすることを認めるものとする。各加盟国は、大学その他の教育機関が翻訳者を養成する講座を設定することを奨励するとともに、翻訳技術に関するセミナー又は研究会を開催することを奨励するものとする」。

この勧告が無事に通つたからといって、翻訳家が当面している問題が一挙に解決するとは、もちろん考えられない。わが政府に立法化に踏み切る用意があるとしても、その実現にはかなりの日を重ねなければならないだろうし、「前払い」や「原著者との対等扱い」の問題にしても、出版者の間に「商慣習」として、長い間定着してきたものだけに、その啓蒙は手間暇のかかる仕事になりそうである。とまれ今度の措置は、私たち翻訳家に、太陽が光り輝く真昼にやがてはつながる朝明けをもたらすことだけは確かであろう。

（日本翻訳家協会事務局長）

11月21日発売!

次 号 予 告

12月号(第2号)

特集 ●ユーモアの比較研究 ●

宇井無愁、伊東守男、しとお

きねお、野村正満、W・A・

グロータース

—humour という語はイギリスにその起源を持つようであるが、一般にユーモアといわれている西欧的センスはストレートに翻訳しても日本人に理解できない場合が多いようです。その逆も又…。

△新連載▽

「翻訳論」の俊英・柳文章氏が新たに書きおろす「構文論」を連載します。

△エッセイ▽

・村上陽一郎——科学(史)の分野で活躍中の眼を通して、翻訳を論じて戴きました。

連載——小野二郎、龍口直太郎

吉武好孝、佐藤亮一。その他本

の紹介、翻訳百話、「懸賞募集」インタビュアーなど話題満載。

(一部変更する場合もあります)

FROM EDITOR

「翻訳の世界」というタイトルから、この小冊子にこめられた期待、内容のほどが感じられると思う。翻訳という非常に領域の広い、また底の深い分野に臨んで、武者ぶるいを禁じ得ない。従来の翻訳のあり方、翻訳観といったものに鋭いメスを入れ、今後の国際的、さらには宇宙的な立場から、新しい翻訳のあり方を探っていききたい。こうなってくるとずいぶん大上段に構えているようにとられるかもしれないが、あくまで編集スタッフの心意気であるので念の為。翻訳というと、一般に学術関係、とくに文学を想定される向きが多いと思うが、翻訳志望者もやはりこの方面が多い。ところが、実際には各官庁、諸企業などの実務面の翻訳者が大いに必要とされている。実務に堪能な語学優秀者が望まれているわけである。小誌ではこの点にも特に着眼し、実践翻訳講座を設けて意欲的に実務翻訳にとり組むつもりである。また誤訳の諸問題を多角的に探ろうとの意図もあるが、とにかく読んでおもしろいものにししたい。(湯)

△投稿歓迎▽御意見、御感想など何でも結構です。御自由にお寄せ下さい。お待ちしています。(編集部)

* * *

月刊 翻訳の世界

一九七六年 創刊号

定価 五四〇円

毎月一回二日発行(第一巻 第一号) 昭和五二年十一月一日発行

編集人 湯 浅 美代子

発行人 吉 田 嘉 明

発行所 (株)大学翻訳センター

〒田東京都文京区湯島二の四の六 電話(〇三)八一五二(六二二代)

発売元 (株)ジャパン・

パブリッシングヤーズ

〒田東京都文京区湯島二の二の一 東邦深沢ビル 電話(〇三)八一五二(四二一代)

印刷所 共同印刷株式会社

新刊 ジプシー占い

カートン・ケース 好評発売中
佐藤亮一 訳 980円



不思議なほどよく当る!

占いやまじないの神秘性が話題となり、その不思議な力を見直しつつある現代人に贈る—ジプシー占いの全て—この一冊により自分の運命を変えることも不可能ではない。当るも八卦、当らぬも八卦、信じる、信じないは、貴方の勝手!!

JP ジャパン・パブリッシャーズ 〒113 東京都文京区湯島 2-2-1
東邦深沢ビル4F TEL (03)816-5241

近刊

予価1500円

ノエル・カワード戯曲集

加藤恭平 訳

ユーモアとアイロニーの混在

少数の演劇人に理解されるよりも多数の生活人に愛されることを望んだ、イギリス演劇界最高のエンターティナー、ノエル・カワードの代表作「焼棒杭に火がついて」「大英行進曲」「陽気な幽霊」を収録!



近刊 予価 980円

アイルランドの
あざらし女

ドナルド・ロックリー
佐藤亮一 訳

幼い頃から“海のプリンス”と共に水平線のかなたの王国に行くという幻想を抱き続ける海の女シアン。彼女と恋に陥り、奔放に過すアイルランドの海の生活。こんなにも奇怪で、こんなにも素晴らしいロマンスが、このきぜわしい現代にありえるだろうか?



日本文化の本質に迫る画期的な総合講座！ 講座・比較文化 全八巻

第四回配本(第四巻) 近日常刊

・二、〇〇〇円

日本人の生活

気鋭の学者陣が幅広く考察する 日本人の生活文化

- ▼住居と住生活……………(石毛直道)
- ▼食品と料理……………(石毛直道)
- ▼食事と酒 タバコ……………(石毛直道)
- ▼衣服とよそおい……………(石毛直道)
- ▼人の一生……………(米山俊直)
- ▼娯楽とスポーツ……………(斎藤精一郎)
- ▼旅行……………(加藤秀俊)
- ▼教養と生きがい……………(山本 明)
- ▼信仰生活……………(伊藤幹治)
- ▼性……………(小松左京)
- ▼社交……………(別府春海)
- ▼生産と労働……………(中鉢正美)

〒162 東京都新宿区神楽坂1の2

研究社

編集委員 五十吉 顯
伊東俊太郎・井上光貞・梅棹忠夫・岡田英弘
木村尚三郎・佐伯彰・鯖田豊之・M.B.ジャンセン
高階秀爾・芳賀 徹・林屋辰三郎・増田義郎

特色

- ★従来の固定的、恣意的な日本文化論を整理し、新しいハースベクテイウによる日本人のアイデンティティ確立をめざす画期的な総合講座
- ★日本文化を、その歴史的時間の流れと地理的空間の拡がりの中で構造的にとらえなおす「比較文化」ならではの斬新な試み
- ★日本史・世界史・文化人類学・比較文化・科学史といった各界の専門学者がここに結果し、日本文化を幅広く学問的視野の中で再検討する

『読書人』評

本講座はその分析視角の明確さ、あるいは史実証の裏付けからいって胡目してしかるべきものである。

『東京新聞』評

執筆者の一人一人がそれぞれ独自の仕方、個性豊かに、そして広い展望をもって困難な問題に挑み、そのことを通じて読者に知的刺激をあたえる。

『聖教新聞』評

日本人の価値観をまず宗教の領域からさぐり、さらに生活・文学・芸術の諸領域では、その宗教を根源態とした日本人の価値観の表われを多様性の中で見てゆくことへと発展している。

■第一巻 日本列島の文化史(発売中)・二、〇〇〇円

「日本の成立」隋唐文化と日本／漢才から和魂へ／変動する東アジア／ヨーロッパと日本の出会い／徳川日本の文化史的情景／西欧との対決など

■第二巻 アジアと日本人

宗教に対する態度／王制／民衆(人民)／ラオスの生きがい／大宇宙と小宇宙(盆と正月)／外国人(混血と国籍)／秘密結社／解説文化など

■第三巻 西ヨーロッパと日本人(発売中)・一、八〇〇円

西ヨーロッパはひとつ／森と家畜の文化／法と力の支配関係／キリスト教の儀礼と神話／城壁都市の文化／生と死の現実／ヨーロッパの日常生活など

■第五巻 日本人の技術

生産と加工の技術(農産・水産・金属・木工・織物・陶磁器ほか)／計測とコミュニケーションの技術／建設の技術(国家・都市)／人間形成の技術など

■第六巻 日本人の社会

ムラ・都市の集団／年齢集団／日本の集団の特質／家族・親族／世代関係／日本人の社会関係／封建制／官僚制／宗教制度／秩序とアナーキーなど

■第七巻 日本人の価値観(発売中)・三、〇〇〇円

日本人の死生観／カミの思想／日本仏教の特質／農業における価値観／日本の合理主義／日本語の特質／日本人の詩学・デザイン・芸能・美術・音楽など

■第八巻 比較文化への展望(次回配本)

文化とは何か／比較文化の方法(構造／比較(神話学・宗教学・哲学・文学・演劇・音楽／言語と文化／比較文化論の系譜(日本・西洋など